
夜見先。

夢現慧琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜見先。

【Nコード】

N9841J

【作者名】

夢現慧琉

【あらすじ】

夜の如き刀身を称えし妖刀『夜岬』。

二十四本からなるそれら禍々し刀を巡りし……

一人の姫君。

一人の剣士。

一匹の妖怪。

彼らの物語。

初め（前書き）

ガープス・妖魔夜行と言うTRPGのシステムを下敷きにした小説です。

けれど、そのことを知らなくても気楽に読めるかと思います。

場所は日本の時代は時代は戦国ですけれど、武将の名前一つ出てきませんし、時代考証も手抜きです。

そのことを踏まえました上で、妖刀を巡る妖怪ラブ(?)ファンタジーをどうぞ。

初め

あやかしがた極みさき
妖刀「夜岬」

「闇裂」、「闇咲」とも表記されるその刀は、妖刀と呼ばれる事からもわかるように、怪しく妖しく、呪われた刀だった。「よみさき」と読まれる場合もあったが、その場合は「黄泉先」に通じる。どちらにせよ、まともな刀ではなかった。

この手の刀にはよくある話ではあるが、持ち主は例外無く凄惨な最期を遂げ、誰かの手に渡り、その誰かも呪われたように死に、そしてまた他の誰かの手に渡り……そうやって、次々に持ち主を変えながら、受け継がれていった。脈々と、世を渡っていった。

そうして、生き血を吸い続けて。

そうして、死に様を眺め続けて。

そうして、世の闇を喰い続けて。

いつしか いや、それは最初からだったのかもしれない、其れゆえその名が銘打たれたとすべきなのかもしれないが その刀身は、黒く、黎く、暗く、昏く……夜の色に、闇の色に、染まっていた。むしろそれは さながら夜の闇を集め固め打って刃にしたような黒さだった。

夜を打ち貫いたような刀身。

そんな刀が一振りなら、まだ良かった。良くはなかったかもしれないが、しかし……二十四振りも存在するよりは、ずっと良かったに違いない。そう。

「夜岬」は二十四振り在ったのだった。

折れる事も無く、欠ける事も無く、それらの刀達はそれぞれに、生を斬り落とし死を貪り喰らい命を啜り血を飲み、夜を現し闇を潤し続けてきた。夜に塗れ闇に紛れ続けてきた。

二十四本の夜。二十四閃の闇。

アヤカシガタナ。

二十四と言う数字。

それは八と三を掛けた数。八と三。

闇を懸けて出来た刀。

それを四で割ると六が残る。四の後に六。

死で裂き無を残す刀。

そして四は夜に。六は武に。

夜を武としたその刀。

だから、「二十四」なのだ。打ち手がいつたい誰であったの

かが分からぬ故、最初からそのつもりで二十四振りだったのか、もはや定かではないが、その例えはあまりに、あまりにその妖刀を表していたのだった。

不吉にして不気味。

不快にして不可解。

不安にして不条理。

不穏にして不始末。

世から隠れるように、夜に隠れるように、ひっそりと存在してきた、冷黒なる刀。しかしそれに惹き付けられ、それに魅入られた人間も、数多く居た。

彼らは「夜岬」を求め合い奪い合い、殺し合い……また、自らも死んでいった。闇に憑かれたように、病みに疲れたように。切り裂かれ切り裂いて……延々と永遠のように続くその連鎖。だがやがて。

やがて、その連鎖も断ち切られる。

切欠となったのは、ある病弱な姫君。

切先となったのは、ある冷淡な妖怪。

闇に魅入られ、また闇を愛し、恐怖に駆られ、恐怖に刈られた、その名も黎姫。

闇を無為とし、また闇へ落し、恐怖に生まれ、恐怖に埋まれた、その名も蝕み。

これは物語。 夜の岬を望みし黎明と、
日も月も喰らい蝕む闇との、 出会い話だ。

一刺し抜き（ひとさしぬき）

妖怪が狂気より生まれたものならば、当然その狂気は人間より生まれられたものだ。しかし、人間の感情は全てが全て例外無く、狂気と呼べるものかもしれない、それもある種当然のこと。ならば人間自体が狂気であり、むしろ人間すらも狂気より生まれたのかもしれない。そして人間も狂気より生まれたとするのなら、世の全てを生むものは狂気なのであろう。

世の全ては狂気より生まれ、狂気に没す。

世界は狂うまでもなく狂っているものであり、正常と言う概念こそがそもそも狂っている。

のである。

さて置き。

目前の人間は間違えようもなく狂っていた。

蝕は、面倒なことが始まりそうだと、臆げに、そして確かに、感じたのだった。

* * *

場所は日本の何処か。時間は戦国の何時か。

一人の男が山の中の街道を、のらりくらりとんびりと、何をするでもなく、目的地も無く、歩いていた。

それは随分と、美しい男だった。女と見紛いそうな、美しさ。白い肌、黒い髪。長めの前髪に、通った鼻筋。そして、鋭い目つきに深淵の如く漆暗の眼。ともすると、喰らいついてきそうな、少々恐ろしい目だった。

名は、蝕^{くさくさ}。

神喰かみくわいなどと言う罰当たりな姓も持っていたが、面倒なので名乗ることは少なかった。

そして、この男、実は人ではない。

妖怪。アヤカシ。

そう言った類のものであった。

しかし、普段はこのように人の形をして、当たり前のように人の世を生きていた。基本的に彼は人間に対して寛容であるし、むしろどちらかと言うと、可愛い女性は好みだった。

と、蝕の足が止まる。

目の前に、人の女が倒れていたのだった。

「……………」

周囲を見渡しても、倒れている女以外には誰も居ない。何処か遠くで、鳥の鳴くような音が聞こえた。上を眺め、しばし考える。暖かな木漏れ日、枝葉の隙間から見える青空。世間の喧騒から離れた、平和な雰囲気。面倒なことは避けたかった。

視線を戻し、女をよく眺めてみる。

すす切れて薄汚れた服。草木で切ったのであろう、傷のある手足。腕に抱えているのは、漆黒の鞆に収まった、刀。痩せ気味で、しかし女らしい体。そして、顔。少しやつれ気味ではあるが、まだ若いと言っても間違いない年齢。少々汚れてはいるものの、中々に整った顔立ち。瞼を閉じていた。

さて。決まった。

女に近づき、蝕は声をかける。

「……………おい、綺麗なお姉さん。気持ち良い陽気なのは分かるが、こんなところで眠っちゃ駄目だぜ？ こんな美味しそうな顔と肉体してよ、どんな脅威が待ってるか分かったもんじゃない。刀抱えてたって勝手に身を守ってくれちゃーしねーよ。知ってたか？ ほら起きなよ、目え覚ましなよ。美しいお兄ちゃんが目の前にいるんだぜ。見なきゃ損だよ」

軽い性格だった。

蝕が揺さぶると、女は目を覚ます。

「ん……………」

「おはようさん。腹でも減ったのか？ 飲み物と食い物なら運良く持つてるから、やっても良いぜ。御代はとらねーよ」

「……………」

はつと、目を見開く女。周囲を急いで見渡し、そしてやがて、安心したように、ほうつと息を吐く。

「ん？ どうしたどうした？ ああ、もしかして誰かに追われてんのか？ だとしたらその刀は盗品か？ おいおい、女盗人さんかよ。これまたたまげたな。とんだ拾い物だぜ」

「……………あの、ええと……………」

女は戸惑った様子だった。それを見て蝕は、落ち着かせるように言う。

「あ……………とりあえず、歩けるか？ さっき近くに人のいねえ山小屋見つけたから、そこにも行つて話するか」

優しげに語りかける。女を誘うには、第一印象が大事だ。頼れそうな雰囲気をかもし出し、人を惹きつける微笑を浮かべれば、困っている女など口説くのは簡単だ。求めているものを目の前に差し出してやれば、人間はそれに飛びつくものだ。蝕は何とはなしに、そんなことを頭の片隅で考えていた。

まあ、そんな簡単なものではないか。

そこまで単純では、全然美味くない。

思考を切り止める。

「……………はい」

そして女は、静かに頷いた。

移動。

そこは、崩れたような小屋であった。

とりあえず蝕は、持っていた水と握り飯を女にやった。彼は何も

摂取しなくても、相当生きて行ける。そんなものは、うっかり貰ってしまったただけなのだから、女にあげたところで何も困るところは無かった。

やはり腹も空いていたのだろう、女は握り飯を軽く平らげ、水も綺麗に飲み干した。

女は一息ついて、

「ありがとうございます」
と、言った。

「あ？ ああ、気にすることねーよ。それより、何であんなところにぶっ倒れてたんだ？」

話を繋げるためと、少しの好奇心から、蝕は軽い調子で聞いてみる。

「それは……」

言いづらいことがあるのだろうか、女は口籠もる。蝕は女が抱いていた刀　今は戸口のところに立てかけてある　を、指差して尋ねた。

「やっぱり、あの刀が関係あるのかな？」

女はゆっくり頷き、そして、言葉を繋げる。

「はい。あの刀が……」

「あの刀が？」

「いけないのです」

「……は？」

要領を得ない。さすがに説明不足だと思ったのか、女は言いなおります。

「あの刀は、呪われているのです……」

「呪われてるってーと……俗に言う、妖刀の類か。ははあ。で、何でお姉さんがそんなもん持って倒れてるのさ？」

道理である刀、おかしな雰囲気か漂ってるわけだ　と、心中納得しながら、蝕は話を促す。面倒事になり得るし、この場で女とおさらばする選択肢もあったのだが……。

何故か、興味が、沸いた。のだった。

「……数年前……。十には及びませんが、それでも大分前。私の夫があのかた……」

「おい、待った。夫がいるのかよ？」

聞いておいて、言葉をすぐさま遮る蝕。

「え……？ え、ええ、はい、まあ……」

「……えーっと、さらにもう少し待ってくれ……。どーすっかな……」

下手すると、予想よりも面倒なことになりそうだ……。蝕の中で、このままさらっと去るか話を聞くかで、大きく天秤が揺れた。

もう一度、女の容姿を眺める。

上から 下まで。

舐めるように。

「……なんですか？」

怪訝そうに首を傾げつつ、座りなおす女。

飯喰ったら血色良くなって、さらに美味そうになったな……。

そんなことを思う蝕だった。

「よし。ああ、良い。続けてくれよ」

「……ええと、数年前のある日、夫があこの刀を持って帰って来たのです。どうしたのか、と尋ねると、山で死体に突き刺さっていたのだ、と答えるのです。私は、そんな不吉な刀捨ててしまえ、と言ったのですが……。夫はそれを決して聞き入れませんでした。はじめの内は、刀を抜いて眺めたりする程度でしたが、だんだんとそれで斬り試しをするようになり……。そして、とうとう……」

女の顔に、翳りが生まれる。

「ついに、人を斬っちゃったか」

「……はい……。家で人と飲んでいる時、口論になったみたいで……。気がついたら夫は、刀を抜いていて、相手は血塗れで倒れ伏してまして……。私達は、村を追われるようにして随分離れたところに暮らすことに、なりました」

「ふうん……」

「それで終わればまだ良かったのですが……。夫の刀への執着は、どんどん増していきました。近づく者近づく者に対し、刀目当てではないかと疑いを掛け、刃を向ける始末。しかも、夜な夜な……人を斬りに外に出ているみたいなのです」

夜中にうるつき、人を斬る。

人を斬らずに、居られない。

それはもう、人間ではなく。

殆ど、妖怪だ。

血に飢えた人間。 血に餓えた妖刀。

「……尋常じゃねーな……」

「はい……。さらに、先日……、物売りに来たお爺様まで、斬り捨ててしまいました。私の、目の前で……」

女は辛そうに、俯きながら話す。瞳は潤んでいるようにも見えた。しかし、人 蝕は妖怪だが に話すことによつて……幾分か、何分か、楽になっているような感じもあった。

「近頃は、私にまで刃を向けてくるのです。今にも斬りかからん勢いで……。その形相も、その刀も、とても恐ろしくて……。私は……。……夫は、以前は優しくつたのに。あんなに私に笑いかけてくれたのに。悲しくて、苦しくて……」

話はどんどん支離滅裂になっていく。女は、泣いていた。顔を伏せ、はらはらと涙を流していた。そして、咳くように、言った。

「……もう、止めて欲しかったのです……」

その声は、搾り出すようだった。

「はん。それで……。刀を持って逃げた」

「はい」

首肯する女を見て、蝕は溜息をついた。逃げて逃げて必死で逃げて、草木の鬱蒼とした山の中を掛け抜けて、服と肌を切つて、そして力尽きて、あそこで倒れていたのだ。

面倒な話だ。

だが、特にしてやれることなど。
蝕が女に、してやれることと言えば。

「なあ……その刀よお……」

貰ってやるうか？　と言いかけて、止まる。そんな行為は、面倒なことには首を突っ込む行為に他ならない。大体蝕がそれを保管しても、刀を紛失した女を放っておけば殺されるだろうし、そこをどうにかしたところで　蝕が今度は追われる羽目になる。人間程度に追われたところで、別段大したことは無いが……それでも面倒だ。詰まらない。終わらない。

「……はい？」

濡れた顔を、女は上げる。

蝕は、続く言葉を変えた。

「……ちよつと見せてくれねーか？　どんな刀なんだよ？」

一目見てから対処を考えても、遅くはないだろう。それは思案の時間稼ぎ。

女がそれに答え、

「あ、ああ。……はい。その刀、刃が
よつとしたところで。」

がらっ！

扉が、開いた。

凄まじい形相の男が、そこに立っていた。

迂闊にも　蝕は。

扉に背を向けていたのだった。

思案に夢中で、気付くのに遅れた……？

刀ごときに、気を取られた？

一瞬の混乱。

蝕が、振り向く、その前に、

「はあっ、はあっ……ヤ、ヤミサキイ！」

飛び込んだのだ。

両腕を広げて、蝕を守るが如く……。

だがそれは、蝕を守るためではなく、男をなだめるのが目的だったのだろう。諫めるのが願望だったのだろう。彼女の表情が全てを物語っていた。

もう、止めて、欲しいと。

だが、刃は、止まらない。

裂かれる胸元。

舞い散る鮮血。

確実な致命傷。

一瞬で、一つの命が散った。

「ちっ……」

舌打ち、蝕は 後ろから女を蹴飛ばす。

遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く。

座った体制から足を突き出し、斬られ絶命しつつある女の身体を、刀を振り抜いた男の方へと、思いきり、蹴り飛ばした。

男は戸惑う。

女の行動にではなく、女の表情にでもなく、女を斬ってしまったことにでもなく 既にそんな正常は持ち合わせていなかった
女が自分の方へと飛んできたから、であった。

防衛本能までは捨て切っていなかった。

「なあっ！」

驚き、反射的に、さらにもう一度刀を振るう男。既に死ぬことは確実であった女の身体が、再び切り裂かれる。さらに飛び散る赤い液体。

それで、充分過ぎた。

刀というのは重く、振りきった後には必ず隙が生まれる。ましてやそれを二度振るうだけの時間ともなれば……蝕にとって、懐のあい首くちを抜き放ち構えるのには、充分過ぎる。

驚きの余韻からまだ覚めぬ男が、切先の下がりきった刀を持ちな

おす前に。

女の身体が崩れ落ち、それに遮られていた男の視界がその内に、蝕を捕らえた時には。

男の首を、深深と、ずぶずぶと。

匕首が、突き、貫き通していた。

男は徐々に後ろへと、倒れ行く。

「、、！」
喉を裂かれて、声はひゅっひゅっとうと空気が抜ける音にしかならぬい。

ばたん。

そうして男は事切れた。

あっけなかった。

「……………おやすみさん。まあ……………喉笛裂かれちゃ生きていられないくらいには、まだ人間だったってことだな。ひひ……………」

蝕はそう呟いて、足元の男を眺める。見事に死んでいた。歪み果てた男の顔は、その手に握られた妖刀の方へ、向けられていた。

刀。

妖刀。

真っ黒くどす黒いその刃は、斬り殺した女の血に塗れ、ぬらぬら、ぬらぬら、きらきらと、生きているかのように輝いている。

まるで、血を吸っているかのようにだった。

蝕は男の喉から匕首を引き抜き 血がどぶどぶと流れ出てきた紙で血を拭い取る。刃はほんの少し欠けてしまったが、後一回

二回くらいは、使えそうだった。

ちらり、と、妖刀をもう一度、見る。

……………妖刀の黒過ぎる刃は、何処にも少しも欠けている部分など、見当たらなかった。

* * *

「やみさき。ヤミサキだったな、あの男……」
あれから少し経った後、蝕はあの場を離れ、道を歩いていた。現場はそのまま。これ以上面倒臭いことに巻きこまれたくは、ないのだが。

何となく、あの刀を持ってきてしまっていたのだった。

刀身が真っ黒い、刀。

怨念を収斂したような、刀。

血を吸いぬらぬらと輝いた、あの刀。

今は鞘に収まっているが、その鞘の下に納まっている刃は、限りなく黒いだろう。

「闇裂き……闇咲き？ ああ、いや……、そうか。『夜岬』、だな」
思うところが、無いでもない。

感慨深くは、無いけれど。

「ひひ……」

一人、自嘲気味に笑う。皮肉的な笑みが、自然に口から漏れた。しかしすぐその笑みを消して、刀の柄を調べる。数字が、振ってあった。

「十七……か。十七振り目。これはどうにも割り切れねえなあ……。算術の問題じゃねーけど」

そんなことをぼやきながら、何とはなしに鞘を少しずらしてみる。

黒い 刃が。姿を、現す。

黒い、黒い。暗い。

それを、日に透かすようにして見てみる。微かに日の光を透き通す、その刃。あくまで暗く。黒く。しかし確かに透き通るその刃は、とても妖しい雰囲気をかもし出していた。

「あー、間違いねーな、こりゃ……」
そう呟いた、

と。その、瞬間。

目の前に、突然、若い男が立っていた。

「……え？」

突然？ 人間が、突然？ 何の前触れも無く 他の誰ならいざ
知らず蝕の、目前に。

突然。

気を逸らしていたとはいえ、蝕が気づかない間に視界に入り込む。
それだけでも、相当の手練てだれであることがわかる。

一体何者……。

怪訝そつに、眉をひそめる蝕。

おもむろに、その男は口を開く。

「お主が、通津とほしつ作殿か。拙者は宵丸よしまると申す」

「は？」

人違いである。蝕はそんな格好悪い名前を名乗ったことは断じて
無い。

いや、格好悪いかそうでないかは、その人の感性によるものだから
一概には言えないことなのだが、少なくとも蝕は通津作よりも自
分の名は格好良いと思ったのだった。

違う、そんな話はどうでも良い。

若い男 宵丸は続ける。

「その刀 『夜岬』を譲って頂きたい」

「……あ？」

突然何なんだ手前、突然過ぎるにも程があるぜわけがわからねえ、
誰か理由を説明しやがれって言うかお前が理由を説明しやがれ、宵
丸だか何だかしらねーけど拙者とかお主とか気取ってんじゃねー…
…とか文句を並べようと思った蝕だが、それは叶わなかった。

「などと言っても無駄であろうな。いざ、尋常に勝負！」

問答無用にそう言い捨てた、

刹那。

宵丸は目の前にいた。

少なくとも十歩分は離れていたであろうその距離を、一足飛び

一瞬にして飛躍し、刀を抜き放ち、斬りかかる。
それだけの行動を、刹那でこなした。
何の、事前動作も無く。

「は、あああつ?」
わけがわからないわけがわからないすこしもわからないどうしようにもワカラナイ!

分からない、が! このまま分断されるわけにもいかなかった。
蝕は抜きかけていた『夜岬』を抜ききり、迫る刀を受ける!
ガイーン!

凄まじい重量の衝撃が、蝕の腕に走る。腕が、痺れる。刀など折れてしまいそうだ。

この男 手練どころでは無い!
速さも、強さも……段違いだ!

しかし、その認識も、まだ甘かった。

「疾っ!」
その衝撃がまだ生きている間に。受けた刃がまだ振動している内に 男の刀は、もう一閃したのだ。

宵丸は。刹那の、さらに刹那の間に刀を引き抜き、逆側から斬りかかったのだ。

正しく電光石火。音すらも無い。

「う、ううあつっ!」

蝕は必死に仰け反る。

地と天がひっくり返る。

かろうじて 本当に寸での所で、斬撃を避けきる蝕。目の前で斬られた髪の毛が宙を舞っているのが、良く見えた。艶やかな髪の毛してるなあ、憎いぜ蝕さん……とか、自分で思ったりした。

急いでそのまま二転三転し、後ろへ移動する。無様も何も言っていられない。

「ちよ、ちよ、ちよーっと待てよ! 待てよ待とうぜ宵丸殿よ!
待つことは美德だぜ? 心の余裕は勇ましい男の象徴だ。男の心こ

そ、山のように雄大で空のように広大であるべきなんだぜ？ おい
おい、いきなり人違いで斬りかかんなよ。狭い男と、安い男と、見
られちまうぜ？ あんたの心は幼子のお遊びで作られた砂の山じゃ
ねーんだろーが。ああ、俺は分かっているぜ。よく知っているぜ。宵
丸殿はでつかい男だ。うんうん、誰を差し置いても俺が認めるよ。
いやいや危ねえ。死ぬところだったぜ。つーか、死ぬよ。何あんた、
人間？ 人間業じゃねーよ、何だその凄まじく激しい踏み込みと抜
刀術に加えて斬り返し！ 有り得無い有り得無い有り得無いって。
あんたの存在こそが有り得ねー……。謝罪と説明を要求するぜ。御
代はほら、あんたがたつた今切り取った俺の美しい髪の毛ってこ
とで、どう？ なあ？」

距離を取りつつ、手を振りつつ、宵丸の斬り込みよりも凄まじい
速さでまくし立てる蝕。

舌を全速力で回す。

「……………む、人違い？」

「ああ、思いつきり人違いだ。加えてなんかの勘違いもしてんじゃ
ねーの？」

「通津作殿ではないのか？」

「知らねーよそんな奴。何処のせこい男だ？」

「その刀は『夜岬』の十七振り目ではないのか？」

真つ黒い刀身を見て、宵丸は聞く。確かに《それ》を知っている
者にとつては、動きようがない『夜岬』の証拠であろう。

「あ？ ……ん、ああ、成る程。そう言うことかよ。ひひ……………あー、
あー」

蝕は得心行ったように頷き、ちん、と、『夜岬』を鞘へとしま
込む。とりあえず、大体状況は呑み込めた。やっと落ち着き、いつ
もの飄々とした雰囲気を取り戻した蝕だった。

「？」

「ああ、これは確かに『夜岬』の十七振り目だろーよ」

「！ ではやはり通津作ではないか！ 覚悟！」

「いや！ おい待って待ってコラ！ 刀を構えるなよ、物騒だろうがよ！ 俺はほら、もう刀しまってるだろ！ 刀納めるよ、それが礼儀だろ！ なあ？ 宵丸さんはそんな礼儀もしらねえのかよ！ 良いから聞けよ、とりあえず聞けよ、納得しろよ理解しろよ。俺は通津作じゃねーっての！ 通津作殿はさつき死んだんだよ！」

「……………何、死んだ？」

「ああ、死んだ。俺 蝕って言うんだけどな が、殺してきたところだ」

「殺した、だと？」

「あーあー……………説明するからさ、刀しまつてくれ」

しぶしぶと、宵丸は刀を納める。それは流れるような動作であった。隙が、無い。

蝕は縷縷と話し始めた。

「まず……………あんたは『夜岬』を この刀を、どう言う理由でかしらねーけど、欲してるんだろ？ で、その持ち主の通津作殿を訪ねる所だった。しかし、通津作殿は近頃その刀への執着が激しくて、誰彼問わず近づいてくる人間は『夜岬』狙いだと思いこみ、斬りかかるありさまだと言う……………。だからあんたは、問答無用の先手必勝に出ることにしていた。……………まー、こんなところだろうよ」

「……………ああ、そうだ。だが何故分かる？」

「頭と口は良く回るんだよ、蝕殿は」

「……………ふむ。しかし、では何故その『夜岬』をお主が持っている？ 通津作を殺したと先ほど抜かしたが、やはりお主も『夜岬』を狙う者なのか？ ならば……………」

やはり斬るしかあるまいな、と。宵丸は再び刀の柄に手をかける。「待てつつつてんだろ？ 仏の顔でさえ三度までだぜ？ 俺は仏にやほど遠いしな。あんな下膨れじゃねーし。見るよ、この美しいお顔としなやかな肢体。えーっと。さつき面倒臭いことに巻きこまれてな。通津作殿は自分の妻を斬り殺して、うっかりその場に居合

わせた俺も殺されそうだったから、その前に俺が隙を突いて通津作殿を屠ったわけだ。逆に殺して虐殺ってな。おっと、字が違つか」「成る程……。それでお主が『夜岬』を持っていたのだな。道理で物珍しそうにそれを眺めていたわけだ」

蝕の顔が、斜めに歪んだ。

「……いや、そう思ったなら斬りかかんよ」

「はっはっは。拙者の早とちりであったな。すまなかった」

地に手をつき、謝る宵丸。どうやら根は真面目な若者らしい。呆れたようにその様子を眺め、そして面倒くさそうに蝕は言った。

「ま……あー……生き残ったから良いけれどよ。本当、あんた未恐ろしい腕してるよな」

「そうか？ 拙者は負けられぬから……。だが世には、まだまだ拙者より強い者も居るであろう」

「居るっちゃ居るかもしれないけどな。そんな数はいねーだろ」

実際。

千よりも、何千よりも長い間世に存在してきた蝕でさえ、宵丸ほどの腕の者には、殆ど会ったことが無かった。

「ふむ……。しかし人違いで斬りかかってしまったのは事実。謝っただけで許してもらえないようなことではないであろう。茶屋でも、何か奢らせて頂きたいと思う。お時間は在るか、蝕殿？」

「男と茶あ飲む趣味はあんまないが、奢ってもらえるもんは奢ってもらおうか。って言うか、謝ってすまない問題が、団子や茶の一つで片付くつてのもどうかと思っぜ？」

「それは……はは、一本取られたな」

ばつが悪そうに、宵丸は頭を掻いた。まあ、実質蝕は殆ど無傷であったわけだし、詫びとしては充分過ぎるだろう。なので、蝕は付け加えた。

「つつても勿論、これ以上所望するつもりもねーよ。安心しな」

「かたじけない」

微笑む宵丸。

「茶の一杯でも儲けもんだ」
にやつく蝕。

そうして、二人は近くの茶屋へ歩いていった。

* * *

そう言えばさっきの女に握り飯やったんだっけ、なのにあつとい
う間に死んじまった上に結局あんまり楽しいことはなかったなあ、
しかもその後とんでもないのに斬りかかられるし全くついてねえ…
…などと考えながら、蝕は通算二十九本目になる団子を呑み込んだ。
あれから大して時間は経ってない。
凄まじいペースだった。

「ん……。おい、おばちゃん、みたらしとあんこ五皿づつ追加し
てくれよ。あと、お茶も頼むわ」

あいよ、と受ける声。三十本目を口に運び 喰い尽くし、手元
の茶を飲み干し、やっと、蝕は一息ついた。

「蝕殿……………」

「……………」

「お主、よく食べるな……………」

宵丸は呆れ顔だった。因みに、彼はまだ二本目をぱくついている
ところだ。何でそんなに喰えるんだ、何でそんなに喰ってそんな細
身なんだ、何でお前は微塵の遠慮も見せないんだ、と言う目つきで
蝕を横目見る。

「ああ？ そうかあ？ まあ、そうかもな。大丈夫だぜ。慣らしは
今で終わつたからよ、そろそろ本気に入ってやるから」
「ぶっ」

茶を吹いた。

冗談ではない。

「あーあーあーあー、何だよ宵丸殿よー。きたねーなあ、勿体ねーなあ。何？　なんか面白い洒落でも思いついちまったのか？　わかるわかる。うっかりにやついちまうよな、そう言うのって。ひひ。そうそう、俺がこの間思いついた面白い洒落と言えよ……」

「いや、そうでは御座らぬ……。蝕どの、申し訳無いのだが、そろそろ持ち合わせが……」

口元を拭いつつ、困った様子でそう告げる宵丸。奢るとは言ったが、ここまで喰われるとは思わなかった。しかもこれから本領発揮だとかとんでもないことを抜かしやがったのを聞いて、内心かなり焦っていたのだった。

この男、三百本とか喰いかねない。本気でそこまで思わせる勢いだった。

「ちつつち。その見立ては餡団子のように甘いぜ？　少なくとも四百本は余裕だな」

「勘弁してください……」

泣きそうだった。

よもや団子相手に泣きそうになるとは……予想もしない、想像もしたくない、ある意味一生の不覚であった。

拙者以上の強者は、ここに居たのか……。

追加の皿が運ばれてくる。

「……わあったよ。これで終わりにしといてやるよ。ほら顔上げろよ。しゃきつとしねーと、後百皿追加するぜ？　ひひ」

「あ、ああ」

助かった……とは言っても、既に予定以上の額になるのは確実なのだが。つくづく予想外の展開だった。……お互いに。

さて。新しい団子もさつさと片付け、蝕は再び茶を口に運ぶ。宵丸も自分の分の皿　団子三本をやつと食べ終わり、茶を飲んだ。

一息ついて、宵丸は話を切り出した。

そう……蝕を茶屋に誘ったのは、なにも謝罪のためだけではなかった。この男とあのまま別れるわけには、いかなかったのだ。

『夜岬』を、手に入れなくては、ならない。
その目的は、果たされていないのだから。

「……ところで蝕殿。その刀に執着が無いと言うのなら、拙者に下さらぬか？」

「あ？」

蝕は顔を上げ、眉をひそめる。そして、ああそう言うことかよ、と茶を置いた。

彼も勿論、何の下心も無いのにたったあれだけのことで、奢ってもらえるとは思っていなかった。なので特に驚く様子もなく、問いかけに返答する。

「まあ、確かに執着はねーが……口八もないだろうがよ。無論この団子代はさっきのお詫びだろ？ だったらこっちは、あんたにこれをくれてやる義理なんか、小指の先の爪の欠片ほども持ってないんだぜ？」

「ぬう……それもそう……で、あるな。しかし、拙者には今殆ど持ち合わせも無い……」

と言うか、今食い潰された。

文字通り。

「どうしたものが……」

唸る宵丸。そこでふと気付いたように、蝕は尋ねた。

「宵丸殿よ、何でそんなにこの刀を欲してんだ？ 理由をとりあえず教えてくれよ。そしたらちよつとは義理が生まれるかも知れねーしよ」

「話したら下さるのか？」

「話の内容によっては気が変わるかもよ。まあ、少なくとも最低条件ってやつだ。話も聞いていねーのに、判断は出来ないぜ」

「ふむ。仕方が無い……。拙者はなにぶん口下手であるから、荒い話にはなるが、そこはお許し頂きたい」

「あいよ」

宵丸は茶を一口飲み、そして、話し始める。

* * *

彩あやなし為家。

それが宵丸の仕えている家だった。

特に大きくもなく、どうにかこうにかこの物騒な世の中を生き延びている……身も蓋も無く単純に言ってしまうえば、弱小国だ。幸いそこまで重要な位置に無いので、とりあえず今の所は戦に巻き込まれていない。かと言って、勢力を伸ばそうと周辺国に戦をしかけるなどとんでもなく、精々現状を維持しようと、ささやかな威嚇を続けている状態であった。

そんな国にも、当然姫君が居る。
名を、黎れいひめ姫。

病弱な姫だった。外にはろくに出られず、治らない病気も持っていた。大抵は自分の部屋で、静かにひっそりと過ごしているのだった。直接には誰も言わないし、露骨には誰も示さないが……人からは気味悪がられ、避けられていた。忌避されていた。しかし。

しかし。それを踏まえた上でもなお。
とても、とても美しい姫だった。

儂げな雰囲気。触れれば壊れてしまいそうな芸術。透き通るような肌に、長く綺麗としか言い様の無い髪、くるりと大きな瞳、可愛い鼻、小さく赤く染まった唇、たおやかな肢体。薄く、上品に、微笑む、表情。

そして……彼女は。

闇に魅入られていた。

彼女の唯一の楽しみは。

『夜岬』を眺める事だった。

最初の一本目は、幼い頃に死んだ祖父が彼女にやったものだった。

その『夜岬』を鞘から取り出し、中の刃を見、夜に見入り夜に魅入られ、闇を、愛してしまっただろう。黎姫は、他の『夜岬』も欲しくなってしまうたのだった。二十四振り全てを、集めたくなくなってしまったのだった。

数本は、祖父の蔵の中に在った。

祖父もまた、集めていたのだ。

そう確信して、ますます『夜岬』を欲した黎姫。しかし彼女は身体が弱く、外に出ることが出来ない。ならば、どうするか？ 方法は一つしかなく、そしてそれを実行し得る人物も、一人しか居なかった。

宵丸。

幼い頃から、唯一彼女を気にかけていた、彼女に近づくことを厭わなかった、兄のような存在。そして、誰を前にしても退かぬ心と、誰にも引けを取らぬ腕。何より、彼女に忠誠を誓った、たった一人の、力強く心強い男。

彼しか居なかった。

だから、彼は集める。

『夜岬』を。

既に、二十一本集まっているのだ。後、三本なのだ。蝕の十七振り目で、残り二本となるのだ。そう、あと、三本、だけだ。

だが、時間が無い。

黎姫が死ぬのが早いか、『夜岬』二十四振りが揃うのが早いか。

宵丸は、何としても、二十四本全てを彼女に見せたかった。

願いを叶えてやりたい。

だから 焦るのだ。

人を、斬ってでも。

集めるのだ。

.....。

「……と、言うわけだ」

「ふうん、ご苦労なこつたな」

蝕は顎を上げて相槌を打った。

「で、どうだ？」

「ん、何が？」

「夜岬を下さらぬか、と、問うているのだ」

「ん……」

煮え切らない様子の蝕。なにか気になることがあるようだ。宵丸から視線を外して、空を睨みながら思索している。

「下さらぬのならば、仕方が無い。話を知られてしまったし……」

刀に手を掛ける宵丸。

迅速に止めへ入る蝕。

さすがに四度目ともなると、蝕も大分冷静に対処出来るようになってきた。

「おい、待て待て。落ち着け。手前は猿か猪か？　すぐ強硬手段に出るなつっの。そんなんだからこんな世の中なんだぜ？　わかっ
てんのかよ。一人ずつ和平交渉を覚えていかないと駄目だ。まず人
の話をよく聞くとところから、だぜ。ほら、俺はまだやらないと言
ってないだろ？」

しかもここは茶屋だ。こんなところで斬り合いになつては、大事
になつてしまう。

「……」

「やるよ、やるやる。だが、条件がある」

「金か？」

「いらねーよ、そんなもん」

「ならば食い物か？」

「いや、それもとりあえず要らないな」

「む？」

いぶかしむ宵丸に対して蝕は、ひひ、と嫌らしく笑った。

「なあ、その姫様に会わせてくれないか？」

「……ならぬ」

「会わせてくれるだけで良いって。滅茶苦茶お買い得だと思っければどなあ？　なあ、美人なんだから？　ちよつと興味沸いちゃったんだ

よ、蝕殿は」

「ならぬ」

「何でだよ」

「ならぬ……」

やけに頑なに断る。

何か理由でも在るのだろうか。

「……ち」

蝕は詰まらなそうに舌打ちした。

すると

ぱつと、『夜岬』が消え失せる。

「！　貴様、夜岬を何処へやった！」

「あー？　うん、何処行っただろうな。俺を殺しても出てこねーだろうが、お姫様に会つと出てくるような気がするな」

「ぬ……ぬう」

「ん、んー？」

にやにやと、宵丸を測るように見る蝕。

刀に手をかけ、蝕を悩み顔で睨む宵丸。

そもそも蝕のような怪しい男を一国の姫君と会わせることなど、出来るはずが無いのだ。しかし、なるべくなら、刀一本のために人を斬ったりもしたくない。それに蝕を斬り捨てたところで、『夜岬』が出てくるとは限らない。だが『夜岬』は手に入れなければならぬ……。会わせるだけで『夜岬』が手に入れられるのなら、だが、だが、だが……、やはり会わせるわけには……。

沈黙……。膠着……。

やがて、宵丸は刀から手を 離した。

「……わかった。黎姫様に会わせよう」

「ひひ、そうこねーとな」

「会うだけで良いのだな？ それ以上のことを要求したら、即刻叩
つ切るぞ」

「あいあい。ほら」

「ぱっ……と、夜岬が蝕の手の中に、現れる。

「ぬ……」

そしてそれを、宵丸に渡す。

「な、どう言うつもりだ？」

「約束してくれたじゃねーか？ 会わせてくれるんだろ、お姫様に
よ。だから、やるよ」

「……………」

「宵丸殿を信用しちゃってるんだよ、俺は。よもや一度自分で言っ
た言葉を撤回するような、腐った菜っ葉みたいな男じゃねーと、宵
丸殿を買ってるんだ。そんな男が俺の言い分を受け入れてくれたん
だぜ？ こちらも誠意を露わにして、先に刀を渡そうと思ったのさ」

「……………成る程。お主も中々、立派な男のようだ。……約束、必
ず守ろう。着いて来るが良い」

すつとたち上がり、勘定をすませて歩き出す宵丸。蝕は心の中で
舌を出した。

宵丸のように実直で誠実な男に対して、しかも腕が立つような男
に対して、弱みを握ったり敵対するような行為は返って逆効果であ
る。それよりも、信頼を見せ誠意を向けてやった方が、有効だ。こ
のような性格は、真面目な様子を示されると断れなく……もはや自
ら言ったことを破るわけにはいなくなる。自分で自分に縛られる。
蝕はそのことを、良く知っていた。

「ひひ、どーも」

腹の内はおくびにも出さず、親しげに微笑んで、蝕は宵丸と街道
を歩いていった。

黎姫と、出会うために。

(起、終)

二突き通し（ふたつきとおし）

一条の光すら一片たりとも存在しない無明と言う状態を、人は闇と呼ぶ。その世界には、正しく何の色も無い。光無ければ色も無い。つまりは光こそ、彩色の元なのだ。

闇について。それは黒と言う色すらも生温く、無色と言った方がより正しいのかもしれない。色彩が無いと言うこと。

色が無ければ輪郭も無い。識別も無ければ区別も無い。全てが繋がっていて全てが同一で、自も無ければ他も無く、個も無ければ群も無く、一も無ければ全も無い。真実闇の中ならば。 際限無く、差異が無い。

もし、視覚についての闇だけではなく 聴覚について嗅覚について味覚について触覚について、感覚についての闇が存在するとしたら。それこそ、何もかもが等しく無。そうなってしまえば、生と死の区別も無いのかもしれない。 生も、死も、殺す。

彩無し。 際無し。 差異無し。

そして、殺為し。

彩為。 あやなし。 それは闇 。

下らない言葉遊びだ。

そんな曖昧模糊としたものがその言葉の意だとするのならば、彼にはきつと程遠い。

とうの昔に決めた事。 たった今決めた事。

宵丸は刀を確かに、握り締めたのだった。

* * *

彩為城。

その敷地内の一角に在る兵士用の稽古場に、二人の男がいた。閑散とした部屋に、二人だけ。片方は、白い肌に黒い髪の細身な美しい男。ゆったりと寝転んでいた。もう一方は、いかにも頑強そうな体躯に精悍なる表情の男。どっしりと座っていた。

「……で、まあ……あれが、黎姫様だ」

頑強そうな男が口を開く。

「ああ、あれが黎姫様かよ……」

細身の男が応答する。

そして、溜息をついて、上を見上げた。

「確かに、極上品の別嬪さんだったけどよ……変なお姫様だったな。面白いお姫様だったぜ。いやあ、会った甲斐があったな。ひひ。つていうか、なんだありゃ？ いつもあんな感じなのかよ、宵丸殿よ」

その言葉に、頑強そうな男 宵丸は、苦笑して応じた。

「はは……。うむ。確かにあまり姫様らしくないな、黎姫様は。しかし変さで言うのなら、おぬしの方が上だと思っぞ？ なあ、蝕殿」

「ひひ。んー。そりやどうも」

蝕と呼ばれた細身の男は、体を起した。軽く胡座をかいて、そして先ほど会った姫様のことを、その黎姫のことを、思い出す。

姫 ねえ……。

* * *

あれから数日かけて、つまらないことや面白いことを適当に話したりしつつ（蝕は宵丸の三倍は喋った）、時折悶着を起したりしながら（その原因の殆どは蝕の軽口だった）、宵丸と蝕は彩為城に到着した。やはり色々と問題はあったようだが、どうにかこうにか最終的に 蝕の思惑通り途中で放り出すことなく 宵丸は、蝕

の黎姫との会見を手配してくれたのだった。

城の奥。

向かおうと思うことすら億劫そうなほどの、奥の部屋。そこに、蝕は案内された。

「この戸の中に、黎姫様は居られる。少し話をしてくるから、こいで待つていてくれ。準備が整い次第呼ぼう」

「ああ。律儀に立つたまま待つていてやるぜ」

「座つても良いぞ」

「律儀に、立つたまま待つていてやるぜ」

「……なるべく急いで話をつけてこよう」

「頼んだぜ、宵丸殿」

「頼まれたぞ、蝕殿」

数日間一緒に居たせいで変な風に呼吸が揃ってしまった、蝕と宵丸であった。……と言うか、宵丸はこの掴みどころの無い男に向かつて真面目に取り合うのに疲れただけであるし、蝕はこの真面目な男が刀を構える前にからかうのを止めることを学んだだけだった。

宵丸が中に入り、戸が閉まる。ほどなくしてまた戸が開き、蝕に声がかけられた。

「入つて良いぞ」

「おう、待ちかねた」

中はそこまで狭くなく、かと言ってそこまで広くもなかった。控えめに開けられた窓から刺し込む光だけに照らされ、部屋の中は薄暗かった。宵丸は素早く、しかし音も無く、端の方に移動し、座る。奥の壁際に、鞘に入った刀が二十一本飾られていた。雰囲気から分かる。妖刀「夜岬」が二十四振りの内、二十一本まで。そして、つい先ほど入手した十七振り目は、この部屋の主が手に取り、眺めているところだった。鞘が傍らに置かれている。

あれが 黎姫。

「黎姫様。お連れいたしました」

厳かに、宵丸が告げる。

黎姫は蝕から見て、後ろ向きに座っていた。

大人しくも艶やかな色の着物。

黒い 髪。

まるで絹のようにしなやかで、ゆったりと広がったその様は、夜の川のように深く魅惑的で そう、綺麗な、髪だった。

「ご苦労、宵丸」

澄んだ美しい声で、しかし……何処か曇ったような声で、その綺麗な髪を持ち主である黎姫は言葉を紡ぐ。

「貴方様が、十七振り目の『夜岬』を譲って下さったお方なのですね。蝕 様、と申されましたでしょうか？ 刀を譲って下さっただけではなく、良くぞ私なぞに会いに来て下さいました……。恩人であらせられる蝕様に、こうやって直接顔を会わせてお礼を言えるとは、何と私は幸福なのでしょう……」

「まだ顔は会わせてねーけどな」蝕はいつものように飄々とした様子で、後ろを向いたままの礼姫に応えた。「なあ、その噂の素敵なお顔を俺に見せてくれないか？ ひひ。大丈夫、俺の方も見て損するような顔はしてねーからよ」

「おお、これは失礼をいたしました……。刀を見詰めるのに夢中になってしまいました、上の空のままお話を続けてしまっていたのです。お許し下さいませ」

「……………」
上の空のままさっきの長い礼を述べたとするなら、それはそれである意味大したものなのかもしれないが、誠意の籠っていない礼の言葉にどれほど意味があるものか……。そう思いつつも、とりあえず文句は呑み込んだ蝕だった。黎姫は、もう一度手元の刀を眺め、名残惜しそうに鞘にしまい、丁寧に『夜岬』が順に並べてある棚の所定の場所に戻し、そして、ゆるり、と、ゆっくり、と、優雅に蝕の方を振り向いた。

「……………」
言葉を、失った。

その顔……。その顔には。

眉が無かった。

目が無かった。

鼻が無かった。

口が無かった。

顔が無かった。

……。つまり、のっぺらぼうだった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………。ああっ、しまったのですっ！ 驚くお顔を拝見させて頂きとう御座いましたのに、これでは私の方が何も見えぬではありませんっ！ これは失策に御座いました！」

寒い沈黙に耐えきれず、一人、何か独白しながら仰け反る黎姫。

どうやら面をかぶっているようだった。くぐもった声は、それが原因だったのだろう。

「……………」

「……………」

残念ながら、蝕も宵丸も、突っ込みの言葉を思いつかなかつたようだ。黎姫はあたふたとしながら面を外そうとする……。のだが。

「…………っ、あ…………っ！ あああっ！ は、外れないっ！ 外れませぬ！ く、苦しゅう御座いますっ！」

苦しいのはこの状況だ。

「は、早く！ 宵丸、助けなさい！」

「は、はっ……………」

数秒かかって黎姫は救出された。

ぜいぜいとしばらく息を整え、座り直し、乱れた髪を直して、蝕

の方に改めて向き直り、そして優雅に微笑んで、黎姫は言った。
「お見苦しいところをお見せいたしました、蝕様。黎姫に御座います」

これまた優雅にお辞儀をする。いかんせんその微笑みは取り繕ったような感が否めなかったが……面を取ったその顔も、言葉を失うのに充分なほどに、美しかった。

「……お見苦しいと言つか、息苦しかったのはお姫様の方じゃねーかよ……。全く、いきなりかましてくれるなあ。蝕殿はちょっと驚いちゃったぜ？ ……ひひ、どうも。神喰蝕と言っのが俺の名前だ。改めて、よろしくお願ひするぜ。宵丸殿から聞いた通り　ひひ。蕩けちまうくらいに美味しそうな、美しいお姫様だな」

「この度は、『夜岬』が十七振り目をお譲り下さったただけではなく、わざわざこうしてお越し下さいまして……礼の言葉も無いほどに御座います」

しきり直しと言う風になぞ述べ、静静と頭を下げる黎姫。宵丸が慌ててそれを止める。

「黎姫様。このような者に、頭まで下げる必要など御座いませぬ！」
「良いのです、宵丸。そのようなことを気にする人物など、今ここには居ないのですから。これは、私の気持ちを示すのに、必要な行為です」

「……………」
凜と自分の姿勢を示す黎姫に、宵丸は押し黙る。黎姫はもう一度頭を下げてから、

「……しかし……何故　なので御座いますよう？」
と。顔を上げ、疑問を口にする。

「何が、何故なんだい、お姫様？」

「たかだか私に会うと言う条件のみで、『夜岬』を譲ってくださいました　その、理由に御座います」

「……………」
聡い。

そう思い、一瞬詰まった蝕だが……。

「たかだか　と、申されましても、黎姫様。随分荒唐無稽な話なので御座いますぞ?」宵丸が、口を挟んだ。「このような、何処の馬の骨とも鹿の骨とも分からぬ男が、一国一城の姫君に会おうなどと言う話……『夜岬』ほどの刀の条件にしても、少々行き過ぎなくらいに御座いますぞ」

「さり気なくお前、俺のことを馬鹿呼ばわりしようとしなかったか?」とりあえず宵丸に突っ込んで。「まあ良いや。そう言うこつたな。俺は女好きなもんで、美人と誉れ高いあんたの話聞いて、是非とも会いたくなつちまつただけだぜ」

軽くそう言う蝕。

「それで御座いますか。……私にそこまでの価値があるとは、私自身はとも思えませぬが……、なんにせよ、お会いできて嬉しゅう御座います。ところで、さし当たって蝕様のお望みはこれで叶えられたことになるのでしうけれど……この後はどうなさるおつもりなので御座いますしう?」

「んー。そいつは考えてなかったな」

「でしたら」黎姫は言う。「しばらくここに滞在しては如何で御座いますしうか?　蝕様は彼方此方を旅していらつしやるご様子。この私、是非ともお話をお聞かせ頂きとう御座います」

そうして薄く小さな可愛らしい唇で微笑む。見ている者が足元から溶けてしまうような、心奪われる微笑だった。

そんな笑みを向けられて　蝕に、断ることなぞ出来るわけもない。むしろこの申し出は、願ったり叶ったりだった。

その旨を伝えると、黎姫はより一層麗しい笑みを浮かべたのだった。その後ろで……宵丸は、少し、不愉快そうな顔をしていたが。

確かに、不自然な話だ。

命を危険に晒しながらも、運良く手に入れた貴重な刀。そしてそれを強く欲する人物に出会っておきながら、その刀の代償として求めたことが、たかだか一国一城の姫君とのただの面会である。

何も手に入らない。

どう考えてもどう見ても、蝕はただの面会に意味を見出すような男ではない。誰かと会えた、ただそれだけのことを感謝するような性分とは、程遠い。望めば、もっと堅実な褒賞があったであろうし、……もし、女に飢えていると言うのなら、そこそこの器量の女であれば用意してもらえたであろうに。

何故？

それは、最もな疑問だ。

予想できるのであろう解答と言えば……。

城への取り入り狙い。

他国からの情報収集 問者。

あるいは、暗殺者。

もしかして 刀狙い。

ほとんどがろくでもない。疑問に気付けるだけの頭を持つているのなら、これらの予想がつかないなどと言うことは無いだろう。しかし……。

長い時を生き、移ろう世を見つめてきた蝕のような存在ならまだしも、年端も行かぬ世間知らずの姫君が。そんな小娘が、この時代に、その疑問に気付き……、加えて、それらの危険性を踏まえた上で、こんなにも怪しい人間の、城の滞在を提案するとは。

問抜けか。

それとも、相当肝が据わっているか。

あるいは 何か、狙いがあったのか。

「……………」

そこまで考えて、蝕は体を起こした。伸びを試みたが、身体が

軋んでいる様子は無い。

「……ひひ。ま、綺麗な姫様だったな」
改めて、そう感想を漏らす。

「そうであるう。それでいて、可愛らしいところもあるぞ」
宵丸が、誇らしげに答える。

兄のような人物 だったか。

「宵丸殿の『夜岬』集めは、あの姫様に命じられてやってるんだっけか？」

「ああ。だが、命じられていると言っよりは……」
「頼まれて、か？」

「うむ。拙者としても、黎姫様に何かしてやりたくてな……。生まれつきの病で、黎姫様は外に出ることが、ほとんど叶わぬ身だ」

宵丸は開いた窓から、青い空 飛んでいく鳥を見つめ、呟くように、そう言う。

「わざわざ、こんな戦乱のご時世に？」
「……うむ」

「わざわざ、各地に散らばった妖しい刀を求めて？」
「……うむ」

「わざわざ、あのお姫さんの喜ぶ顔が見たいがために？」
「……うむ。何が言いたい？」

首を傾げた宵丸に、首を傾げて蝕は応える。
「別に」

「……」

てめえほどの腕持ってたら、お殿様がそんな不毛な搜索許してくれねーだろーに。それすらも押し切って、刀集めに全国行脚？ 病気で先の短いお姫様のために？ 阿呆じゃねーの。笑い話だぜ……とは、言わない。

人それぞれだろうし、蝕は面倒臭い話が嫌いだった。どうでも良いと、思考放棄を と、そこで、思い至る。

他人を苛める好機なら 話は別だ。

「別に あの麗しい黎姫様に、俺は惚れちまったかも知れねえからなあ。気を引くにはどうしたら良いもんか、と。宵丸殿の意見でも貰おうかってな」

「なっ……?」

驚愕の宵丸。

「ならぬぞ! それは、ならん!」

「いや、冗談だよ」

「……冗談、か。驚かせるな」

安堵の宵丸。

蝕は、面白い玩具を見つけた猫のような いや、そんなに生易しいものではなく 弱者をいたぶる強者のような表情をした。

「ん? んん、ん、んん?」

にやりと笑って、宵丸を値踏みするように見る。怪訝そうに、宵丸は尋ねる。

「な、なんだその顔は?」

「ひひ。そう言うことかよ」

「どう言うことだと言うのだ」

「よよいの宵丸ちゃんは、お姫様に惚れちまってるってことか。ひひ」

「よっ、よよよよよ、よよよよいの宵丸だっ! 貴様っ!

拙者の名を愚弄するのか! 拙者を侮辱するのか! 許せん許さん、蝕殿であるうとも許すまじ!」

「いや、そんなに言っつてねえよ……っつて、おおおおおい!」

顔を見る間に真っ赤にし、刀を抜く宵丸。

刀を抜き放つ、宵丸。

当然、そのまま蝕に斬りかかる。

「うわっ、ま、待て待て待てまっ……」

「問答無用!」

振り下ろされる刀。避けるには体勢が悪すぎる そうとっさに判断した蝕は、ヒ首で受けることにした。

受け流すつもりだった。

しかし。

キャンッ！

「　　っ！　　嘘だろ！」

三味線をかき鳴らすような音と共に　　ヒ首はすっぱり根元から切断されてしまった。

いとも容易く。あまりに簡単に。

断面は、鏡のように滑らかだ……。

なんちゃって斬鉄剣。

そんな馬鹿な。

「手前の刀は何製だあああ！」

驚愕のあまり、思わず咆哮する蝕。

それに対し、宵丸は壮絶な笑みで言った

「ふっふっふ。良くぞ聞いてくれたな！　拙者の刀は鍛錬と誠実さと実直さと一途な黎姫様への想い、さらに多大なる蝕殿への苛立ち、そして少々の鉄で出来ているっ！」

「んなこと、真面目に説明するなあああ！」

「覚悟っ！」

「そんな少々の鉄ごときで作られてる刀に殺されたくねえよ！」

「安心するのだな！　殆どはお主への恨み心だ！」

「悪化しとるわっ！」

「ええい、黙れ黙れ黙れ黙れ！」

泥仕合だった。

そもそも真剣を室内で振り回すものではないし、人の真剣を弄ぶものではなかった。

そして、しばし。

疲れ果てた二人の男が、その稽古場ではぶっ倒れていたのだった。

「はあ、はあ、洒落になんねえ……」

「ぬ、ぬう。良く全て躲しきつたな……」

「避けきらなかつたら、真つ二つの四肢断絶、八つ裂きに加えて十六分割されてたぜ……」

「それどころか三十二枚卸しにしてくれるところよ……」

「おいおい……元々くだらねえ洒落だったんだぜ？ 洒落で終わらせてくれよな？ はあ……」

「人の名を洒落にする方が悪いぞ」

「つーか、論旨があらさまにずれてた気がするぜ？」

「……………」

押し黙ってしまう、宵丸。何故、自分があんなにも激昂したのか。そして、それでも蝕を誤魔化しきれてないことに気付く。が。

「……ま、良いか」

ここで蝕は体を起こして、ぼんと膝を打つ。

「外に出ようぜ。そこで仕切りなおしだ」

「むう……？ なんの仕切りなおし、だ？」

ぴっと、蝕は宵丸を指差した。

「お前、手え抜いてただろ？」

「……気付いていたか」

「たりめーだ」

確かに 抜いた。

刀と一緒に、手も抜いた。

本気など出そうものなら、蝕はあつという間に細切れになってしまふ。

そう、思ったからだ。

「思い上がるんじゃないよ。俺はそんなに食いやすかねえぜ。だからよ」

宵丸が起き上がったのを見て、蝕は稽古場の戸を開く。

「黎姫をかけて、もう一仕合だ」

蝕。

神喰蝕。

変な男だった。今まで会った男達、今まで会ったことのある、どの人間とも違う雰囲気を纏っていた。とは言ったものの、今までそれほど多くの人間を見てきたわけではない。精々、宵丸と父上に母上、乳母、世話人……数え上げても、足の指まで使えば事足りる。足の指を使つて数えるなど、試したことも無いが。やってみようとしたら案外難しいかもしれない。ひい、ふう、みい……嗚呼、やはり難し……いつ、つ、攣つた攣つた攣つたつ、……。思考が逸れてしまった。……あれは本当に人間、つまりは私達と同じものだったのだろうか……？

何にせよ、要約してしまえば。

「蝕様はおかしな御仁であつた」

それだけのことである。

それだけのことなのに　こつも気になる。

まるで　望んでいたものに出遭つたのかのような、巡り会つたかのような、そんな心地がしたのだ。

あの雰囲気はまるで……

「……」

顔を上げる。

部屋に備え付けられた小窓からは、青い空が見える。良い天気だ。耳を澄ませば、鳥の声、虫の声、遠くから人や馬の声、その気になれば風の声すら聞こえてしまいそうな、良い天気。そのはずなのに。

私が惹かれるのは闇の色。

闇に見入る。闇に魅入られる。

『夜岬』を、とくと眺めている。

そつだ。あの雰囲気はまるで。

「まるで……夜岬の様な御仁であった……」
黎姫はそう呟き、『夜岬』が十七振り目に鞘をした。
す ぱ ちん。

* * *

稽古場の野外。

防ごうとした腕の下を潜り抜け 脇腹を木刀が抉る。

衝撃に耐え切れず、蝕はそのまま地面へ倒れ伏した。

「……っ、くはぁーっ！ やめだやめ！」

蝕は仰向けに倒れたまま、そう自分の負けを認めた。肩でせいぜいと息をしている。

「……うむ」

宵丸も頷き、構えを解いた。

実際、勝負とは言えないほどに力量の差は圧倒的なものであった。そもそも、蝕は刀の構えすら碌に出来ないのだ。持っていた匕首はたまに訪れる修羅場に対して、不意打ちでそれを切り抜けるためのものでしかない。正々堂々の稽古試合など、性分として端から向いていないのだ。

これで地に伏せるのも、幾度目かになる。

「しかし、蝕殿は呆れた丈夫さだな……」

顔をしかめて、宵丸は言う。

「ああ？」

「木刀とは言え 常人であれば、既に三度か四度は死んでおろう。拙者はそれ程の意気込みで、これを叩き込んだ。しかしおぬしは骨も折れておらぬし、血を吹きすらもしない。精精痣が滲んで見える程度」

「……ひひ、まあ な」

愉快そうに意地悪い笑みを、宵丸を見上げたまま浮かべる蝕。その様子を見て、宵丸は一つの懸念　疑念とも言つべき、初対面のときからずっと抱いていた違和感　を、口にすることにした。

「気配も人のそれでは無いしな」

気配、雰囲気。

曖昧としていて糲糊としている、頼りのないそんな感覚ではあるが……何処となく蝕と言う男は、人とは違う……言ってしまうば、不吉な気配がするのだ。

黎姫も感じていた、例えるならば、そう。

『夜岬』のような　そのような、気配が。

「ひひ、わかるかい。良い目をしてやがんな」

「……やはり。蝕殿は　」

「　アヤカシさ！」

言いながら、蝕は跳ね起きた。

と同時に、掴んでいた地面の砂を宵丸の目元へ放る。

「くっ！」

「ひひっ」

たまらず目をつぶった宵丸へ、蝕は身を屈めて下段から木刀を振るった。

ぶん！

目を閉じた宵丸は、それに反応することすら出来ない！

……はずであった。

「なっ」

かんっ。

高く響く音と共に、蝕の木刀が払われ、
ずぐっ。

鳩尾に突きが決まる、鈍い音が続いた。

「ぐっ、ぶ……」

再び、地面と仲良くなる蝕であった。

苦笑しながら、宵丸は目をぐいぐいと拭う。

「ふっふ。あやかしと言う割には、随分とせせこましい手を使
うな」

「けほっ、……そうでもしねえと勝てないことがわかったからな。

遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く、が俺の信条さ。……だが」
半身を今度は起こして、諦めたように蝕は皮肉った。「目え三つ持
ってやがんのか、宵丸殿は」

「いや、そのような便利なものは持つておらぬがな。しかし、拙者
も剣客のはしくれ。間合いに入った者は、常に把握している。自ら
の刃の届く範囲であれば、目など使わずとも対応はし得るのだ」

得意ぶる様子も見せず、宵丸はそう説明した。そして、勝負は決
定的に付いたと言わんばかりに今度こそ木刀をしまい 蝕の分も

縁側に腰掛ける。どっかりと。そこには、長年の鍛錬で練り上
げられた確かな実力を持つ、強者の威容が漂っていた。

「たまげたね、こりゃ。ひひ」蝕も同じく、稽古場の縁側に腰掛け
る。こちらはいかにも軽佻浮薄な風に、である。「だがそんな芸当
が出来る人間つても、そうは多くないはずだぜ。つくづく腕の立
つ剣豪だな、宵丸殿は……。こつちが吃驚仰天大きなつづら、呆れ
たつづらんなら手前様の腕前様の方さ」

舌を切られることなぞ恐れたことも無いのだろう、お世辞なのか
賛美なのかはたまた当てこすりなのか、本心かもわからないような
言葉をつらつらと、蝕は並べ立てた。

そんな言葉を受け流し、話題を変えるように宵丸が口を開く。

「本当にあやかしののか？」

「ああ？ どっちでも良いだろうが、そんなもん」

面倒そうに蝕は言いながら、片目を瞑り、もう一度開いた。その
瞳の色は……人に在らざるような、銀色をしていた。ぎらぎらと。

それ自身が光を放っているかの如く、妖しく煌く。

「むう……」

宵丸がそれを見て取った後、目の色を戻す。にやにやしなから、今度は蝕が尋ねる。

「……退治とか、しねえのかよ？」

「しても仕方なからう。今のところ実害があるで無し、今の打ち合いで闘い向きではないことが知れたしな。それに……おぬしのことは、拙者も　それから恐らく黎姫様も、少々気に入ってしまったゆえ」

「俺は男になんざ、俺は興味ねえっての。気に入られたところで嬉かないな」

「はっはっは、そうか」

互いに、外の景色をなんとなく見やる。次の発言を待っているかのように、穏やかな時が風と共に流れていく。

少し間を開けて、　やっ　宵丸は、言った。

「……おぬしの言うとおりだ、蝕殿」

「うん？　何がだよ」

「拙者は黎姫様に惚れている」

「ほお……そうかよ」素直な野郎だな、苛め甲斐が無いぜ　と呟いてから、蝕は続けた。「しかし、そのことを本人へ伝えてはいいように見えるなあ、宵丸殿よ。お前さんらしくねえんじゃないのかい？　秘め恋が可愛いのはおなごだけだぜ。男は堂々と思いをぶつけて何ぼだろ」

「そう言うな、蝕殿　拙者にも、立場というものがある。わかるであろう」

「ひひ、俺のことだ、そりゃわかって言ってるに決まってるだろが」「意地の悪い男だな……妖怪とは皆、そうやって意地が悪いのか？」「いんや、どうだかね」

二人とも、まるで男友達のように苦笑して。それから。

「……黎姫様は、ああ見えて聡い」

「ああ……それは知ってる」

「ならば、拙者が黎姫様に抱いている心持にも気付いておられるの

かも知れぬ。気付いて、のらりくらりと弄んでおられるのか。それとも。やはり純真に、そのようなことは露とも思わず、ただの兄のようにして拙者を見ておられるのかも、知れぬ」

「で？ だから？」

「楽しそうな顔をするな、全く。だから……わかっておろうが。蝕殿も聡いのだから」

「分かってても聞きたいことはあるぜ？ ひひ、言ってみるよ、恥ずかしいその言葉をさ」

蝕はあくまで、態度を崩さない。他人が苦しんでいるのを見るのが大好きな性格なのだ。数日の付き合いを経て充分それをわかった上で、こうまで寛容に接している宵丸と言うのも、相当人が良いものだが。

「だから、『夜岬』を収集するのだ」

宵丸はそう言って、立ち上がった。

「必ずしも黎姫のためだけじゃあ なく、己の決心やら覚悟やらを、自他に示すための材料 ってえ、ことか。面倒臭い野郎だぜ、心底な」

「残すところ、たったの二振り 一振り目の行方はまだとんと知れぬが、二振り目の在り処は既に見当がついていてな」

「おう。 なら……もう行くのか？」

立ち上がった宵丸のほうを向きもせず、片頬を意地悪く吊り上げたまま、蝕は問う。

「ああ。 長かった道中も、そろそろ終わる。 終わったら 」

「……………」

「男らしくさせてもらうつもりだ」

「は……そうかい」

宵丸は稽古場の隅に置いてあった刀を腰に差し、具合を確かめる。そのまま出て行っても構わなかったのだが、少し考え直し……毒にも薬にもならない、もしかしたら恥ずかしいだけのその言葉を口にすることにした。 毒皿と言うものだ。

軽く振り返る。

「おぬしは、良い奴だな

蝕殿」

蝕は滑稽な感じにずっこけた。

「……は、はあ？ やめろ、男は好みじゃねえって言った直後だろ。男に褒められるのすら慣れてねえんだよ、俺は。怖気と虫唾が駆け抜けて、鳥肌が総立ち、さぶいぼがそこら中所狭しと埋め尽くしまう」

「はっは、本当に良くもまあ、舌の回る。……ここにはしばらく留まるつもりか？」

「どつちでもいいつてのが本音だ。が、ま わざわざ黎姫様の好意で滞在させてもらってるわけだあし、直ぐに出て行く理由は無いわな」

「そうか。なら 拙者が居ない間、黎姫様を頼むぞ」

「……」再び蝕は顔をしかめ、首を傾げて。それから、また嫌らしく笑って言う。「……ひひ、宵丸殿が居ない間に美味しく頂いちまうかも知れねえぜ？ それでもいいのかよ。何処の馬の骨とも 鹿の骨とも知れねえ野郎なんだろ、俺は」

「だが、骨のあるアヤカシであろう。構わぬ、戻ってきておかしな ことになっていたら、おぬしを三十二枚に卸すまでよ」

「六十四卦ろくじゅうよんかけまで辿り着いちまうと、逆になんだか吉兆って感じだな。ひひ、敵わねえ」

「ごろり、と蝕はまた横になり、左手をひらひらと振るう。

「んじや……行って来やがれよ。惨めな武運を祈ってんぜ」

「応。忝かたじけない」

頷き、宵丸は今度こそ稽古場を 彩為城を後にした。

* * *

日蝕。月蝕。

突然訪れる闇。日を喰らい月を蝕む暗黒。古来よりそれは、恐怖の対象であった。日蝕と月蝕の発生する原理は厳密には違うが、両者とも理解が容易であるし、歴史的に見ても割と早い内に解明されたものであり、しかも予測さえかなり昔から行われていたものであるが 日常と言う普通から外れた、異常なる闇 その不気味さ不吉さは、長らく生き続けた。

日も月も蝕む、突然なる闇への恐怖。

それが形を為した妖怪が、蝕だった。

妖怪。アヤカシ。

そもそもアヤカシと言うのは、どのようにして生まれるのか。簡潔に述べてしまえば、それは人の思念により生まれるのだ。

人は、初めから妖怪を恐れているのではない。人の恐れこそが、そのもの妖怪と為るのだ。何かわからないモノを恐れ、何かわからないままに狂い、何かわからないゆえに噂し、何かわからないコトを思う それらの思念、概念がやがて形を持ち、姿を為す。これが妖怪やアヤカシの成り立ちだ。

思いの力。

人の想像と言う指向性。

それゆえ、一度生まれてしまった妖怪と言うのは、存在を知られることにより、より強固により定まった形へと、定着してゆく。彼らは例え死んでしまっただとしても、彼らのことを知っている人間たちが居る限り 思われている限り、その存在が消えることは無い。ほとんどの妖怪は、厳密な意味での死を持っていないのだ。アヤカシたる所以、である。

つまり蝕と言う妖怪は、人々が日蝕や月蝕へ思いを馳せることがある限り、消えはしない。

思いの力。

人の創造と言う志向性。

概念、思念、つまりは思惑が先に立つ存在として、だからこそ妖

怪達は、止むを得ずそれらに強く縛られる。目的意識が存在理由であり、仕事意識が存在証明だ。何かを行う存在として思われた妖怪は、その行為を遂行し続けねばならないし、何物かを弱点とされた妖怪は、それに抗う術を持ち得ない。悪く生まれれば悪いまま、弱く生まれれば弱いまま。アヤカシたる因果、である。

つまり蝕と言う妖怪は、然るべき時に日や月を蝕み続けなくてはならない。

性格も感情も思考も意見さえも持ち合わせていながら、如何様にしても克服できない習癖。何故なら、そう創られたのだから。存在と所業が同位であり同義なのである。

さて。

そう言うわけで、宵丸が発ってから数日も経たない内に訪れし日蝕 日中の暗闇、白昼の真夜 妖怪『神喰蝕』、久々の存在意義到来であった。

* * *

「……………あ？」

目を覚ますと、見知らぬ天井が視界に入った。

……………いや、一度は見たことがある か。記憶と記憶が繋がり、認識が正常に戻るのを感覚しつつ、蝕は気だるげに体を起こした。

「お目覚めで御座いますか、蝕様」

声をかけたのは黎姫だった。

中途半端な広さの、陰鬱なこの部屋の中で、彼女の声だけがやはり麗しく響いていた。二十二振りまで揃えて飾られている『夜岬』の雰囲気は、鞘に入ったままでも禍禍しく しかしより一層、黎姫の存在を際立たせている。

「ああ……………おはようさん」

起き抜けに大好物な美人の顔を拝めたと言うのに、蝕はやはり気だるげにそう応えた。らしくもなく、憔悴しているようだった。

「御覧になられましたか　先ほど、中天に輝きしお天道様が雲も無いのに姿を隠したそうな。天岩戸にでも御隠れになったのでしょうか……。私は外に出られませぬゆえ、そこな小窓から眺めるだけで御座いましたが」

「……………知ってんよ……………」

他でもない、蝕の仕業である。

だから、その分疲弊していた。

より厳密に言えば、日蝕や月蝕など自然現象に過ぎないのだが、その期に合わせて蝕は『日や月を喰らい蝕む』、意識を、認識を、否応無く課せられる。先に述べたよう、人々の意識や認識、思念や概念こそがそのもの妖怪である。つまり、事実がどうあれ　結果的に蝕と言う妖怪が日蝕や月蝕を引き起こした、と言うことになるのだ。

「しかし、ちらりと暗いところを覗かせるとは、天もまた可愛らしいところがあるものです。夜を好む私としては、白昼の夜など差し詰め……普段つれないおなごがちらりと見せる照れた様子のようなもの……………」

あらぬ所を見つめて何をのたまってたお姫様……と、蝕は怪訝そうな顔をする。

「そのような様子を縮めて一言で表しませれば、ずばり」

「ずばり？」

「つれなてれ！」

「語呂悪っ!？」

しかし惜しいところだった。

などと、時代を先取りするように蝕は思ったのだった。

「こほん。さても置きまして……、日が姿を隠し、また表しましてから一刻も経たぬ内に、蝕様が城内で倒れていると聞きました。此処へ運び、休んで頂きますように、と」

「あーあー。了解且つ良好だ……。ようやっと話と覚えが繋がったぜ。少なくとも舌先に於いては、蝕さんはそろそろ全回復だあな」

開闢以来崇め奉られし日やら月やらを喰らうと言う所業は、流石に蝕としても疲労が溜まる。己が本性を現し、しばしの不安と闇をもたらした後、彼は彩為城の中で倒れていた。臆面も無く、泥のよう。そこを発見されたのだろう。

蝕は、身体ごとで黎姫と向き合う。

礼を言うため ではない。

「ひひ、わざわざありがとうよ、黎姫様よ。俺なんぞに氣い回してもらってな。だが」

「……………ですか？」

「無防備すぎるんじゃないか？ 宵丸も居ねえ今、得体も知れねえ素性も知れねえ、怪しいことこの上ない俺と、こんなそうそう誰も来ねえような奥の部屋の中にとったの二人きり だなんてよ。もしも俺に何の企みも事前の仕込みも無かったところで、あんたはそこまで美しいんだ」

ちろり、と。

犬歯を見せて、蝕は舌なめずりをした。

「俺に喰らわれないとでも、思ったのか？」

ぞくぞくっ。

必ずしも怖れからだけではない そんな身体の震えを押し隠しながらも、黎姫は優雅に余裕を見せて返答をした。

「……………初めにお会いした際にか言いました通り、蝕様を引き止めましたのは、旅の話の話を聞かせて頂く為。何分宵丸の旅上話は、『夜岬』に関するものに偏っていますゆえ。そのお話の機会を、此度ついでに頂きましたのみで御座います」

「……………。返答になつてねえな。それが何の保障になる？」

「この部屋へ蝕様を留めた名分の方をこそ、本当はお尋ねになりたいのでは、と思ひまして」

詫びれもせずにそう言う。

微笑さえ浮かべて。

「保障というのでしたら、今この刹那にも宵丸がそんな戸を開くという可能性　それだけで充分では御座いませぬか。あるいは、例え人が寄ることが稀とは言え　いくら私が忌み嫌われてるとは言え　私は黎姫。彩為城の唯一にして二つには下らぬ姫君。私への謀反は、城への謀反。蝕様ともあろうお方が、そのような愚を冒すとは思えませぬ」

「ひひ　一体全体何処でそんな無謀な信頼を寄せたって言いやがんだ？」

「宵丸との試合稽古　その話を耳に入れました。宵丸に刃で到底敵わぬ蝕様が、これまでその単身で旅を続けてこられた理由　それは、狡猾さに他ならぬのではありませんか」

「狡猾さ　目的もなしに、滅多なことは起こさねえだろう　つてか。それでも甘い。甘い、甘い。その程度の浅い推察で、初対面の野郎を押し量るもんじゃ　」

「加えること」

邪な笑みで半畳を打とうとする蝕を制し、黎姫は続ける。

「蝕様は一つお忘れになられております」

「ん？」

「私は『夜岬』の収集に取り憑かれし亡者が如きモノ　」

優しそうでも、麗しそうでもない、しかしそれらを遙かに超えるほど美しく怖ろしい笑みを　年端もいかぬ少女が。世間も知らぬ小娘が。たかが一国一城の若姫君が　生白いかんばせに余すところなく表して。

「その程度の脅威、私の闇への興味に比べませれば、全くどうともいたしませぬ些細な顛末、矮小な些事で御座いましょうぞ」

「ひひ……」

こいつは

こいつは、曲者だ。

道理で、宵丸が惚れるわけだ。

道理で、二十二本も手元に置けるわけだ。

黎姫と言う人間の女を語るのに重要なのは、その病弱さでも、その美麗さでも、その聡明さでもなく、その闇への、『夜岬』への執念、そののみか。

蝕は認識を改めた。

心底愉快だった。

「闇への興味、ね。ひひ、てえことは、あんたも俺の気配だとか雰囲気だとかに、引つかかるところが在るってわけか。つくづく目端の利く輩だぜ。それともあれか。そこにお行儀良くずらりと並んで鎮座しておわします、妖刀様の御加護かい？」

「……『夜岬』に似た匂い、禍禍しさ、底知れなさ、蝕様からはそういったものを感じます」

「ひひ、ひひひ……、そうかいそうかい。お姫様。姫君様。黎姫君様。俺は今気分が良い。こんなに狂った人間共と戯れられるのは久しぶりだ。愉快だ愉快。爽快だ爽快。奇怪だ奇怪。は、だから教えてやるぜ。あんたの両目と魂に、刻み付けて植え付けてやるうじゃねーか」

蝕が、酷薄に笑う。今まで見せていた笑いと、それは違った。

何処か皮肉気な微笑みとは違い、

舐るように意地悪気な薄笑いとも違う。

夜道で、黒猫に出くわした時に感じる

された側からのみ語れるような、表情。

蝕は、嗤っていた。

「俺は」

舌を。

真っ黒い舌を。

闇のように暗く、夜のように黒く。

何もかも呑み込んでしまいそうなほどに、深い冥の色をした、舌

を。

べろん、と。人間では考えられない長さまで伸ばし、蝕は言う。

「世の秩序を崩し、夜の狂気を喰らう、人と相容れること無き妖しき存在」

瞳は銀色。まるで月や日のように銀色に輝いていて。

そのまなこで見詰められると、まるで魂の根底に住まう、心の裏側に息づく 『恐怖』がぎしぎしと疼くようだった。

「アヤカシだぜ」

おおよそ人の雰囲気から、かけ離れた蝕。

『それ』と黎姫は真向から、向かい合った。

彼女は、淑やかな唇を無意識の内に開き、はっと息を飲み、その形の良い眉を寄せ、可愛い目を見開き 　しかし、その目に宿っていた感情は 　叫んだのだった。

「素敵滅法に御座います！」

「……は？」

叫んだのだった。

「なんと綺麗な御眼でしょう！ 輝いて、煌いて……まるで銀細工か宝玉の様……いえ、それらが纏めて滲んで翳んで価値など失ってしまいそうな程の美しさに御座います。そしてその御舌！ 深く深く、夜をそのまま繰り抜いて参りましたようなその色……いえ、色と言ってよろしいものでしょうか？ これはもはや、闇そのものと表現したほうがよりの確で御座いましょう。ぬらぬらと蠢きながら、何をも呑み込まんほどの深暗……私の心も吞まれてしまったように御座います！ ……そう、これこそ……この有様こそ『夜岬』に瓜二つで御座います……」

「……」

うつとりと、蝕の舌と瞳に見入る黎姫。

うつとりと、人外の妖怪に見入る黎姫。

恍惚としげしげと、何処かの螺子がすっぱ抜けてしまったかのようだった。その常軌を逸した様子と言ったら、蝕の方が面食らい、

引いてしまうほどであった。と言うか事実引いていた。精神的に三町くらい引いていた。この姫様、すぐに刀を抜き放つ宵丸とはまた別の危険さがある。

「……………ひひ、おかしな姫様だな、あんた。珍味だぜ」

とりあえず、やつとのことでそう言う。

そろそろ喋らないと、舌をむんずと握られてしまいそうだった。

「あら。おかしいとは失敬な」

「いや、おんまなこに、おんしたはどうかと思うぜ？ 響きが間抜けでこの上なく比類ない。そんな言い方聞いたことが無い。今の今まで俺は一切聞いたことが無かったぜ。新しいお姫様だな。ひひ」
言いながら舌をしまい、瞳を黒に戻す蝕。

「戻してしまわれるのですか？ 素敵で御座いますのに」

「普段からあんなじゃ往来歩けねえじゃねえか。あんた以外のおなごは全員避けて行っちまう。そしたらこの世は地獄だぜ。閻魔大王様がお出でなさる前に、大事な舌をしまっておこうつてえ腹づもりさ」

「ははあ、そう言うもので御座いますか」

「ああ、そう言うものなのさ。全く持ってそう言うものの他では在り得ないのさ。うんうん、双方理解に至ったみたいで蝕様は御機嫌だ。つてえ、ことで、俺はこれにて」

蝕はおもむろに腰を上げた。

黎姫がすかさずその裾を掴む。

ぐい。

「どこへ発たれる御積りで御座いましょう、蝕様？」

「可愛い娘と美味しい食事のある所へ、ちよいと。遠くのお空が俺を呼んでやがる」

「可愛い私がここに居て、美味しい食事も用意させましょうぞ」

「自分で言いやがったなこのお姫様が。これ以上俺に何の用だ」

「蝕様がアヤカシであると聞いて、ますますこの城に留まって欲しいゆうになりました」

「は。それでその刀達と一緒に並べて飾り立てて、毎日眺めて愛でくれるってえ？」皮肉気に黎姫を見下す蝕。「面白くもねえ冗談だ」

「永久にとは言いませぬ！ もうしばしで構いませぬから……蝕様。」

「だあかあらあ……よお……」

黎姫は 上目遣いだった。眉を寄せて瞳を潤ませて。きゅ、と蝕の裾を掴んだまま。

「だ、駄目で御座いますか？」

「いいぜ」

あっさりと蝕は陥落した。

彼にとつて、黎姫は曲者以上に曲者だったかもしれない。

* * *

「私もアヤカシに生まれとう御座いました」
溜息のように黎姫は言う。

あれから三日ほど後。蝕はちよくちよく、彼女に会いに部屋へ来ていた。特に何をしてもなく、他愛のない会話を 先に続くこととの無い、退廃的とも言うべき、何にもならないお喋りをするのだ。それが黎姫の願いであった。

何してるんだかねえ、俺も と言うのが、蝕の余すところなき本音である。

目的のようなものが無いわけでもない。理由のようなものも無いわけではない。しかし、少しでも風が吹けば吹き飛ばされていってしまうような、それらは軽い根拠であった。まるで、約束もしていない誰かと待ち合わせているかのような、立ち位置。

「アヤカシに生まれたかった ってえ？」

適当に話を合わせる。

「ええ。あるいは、アヤカシになってしまいたい、でしょうか……」
「何で、そう思う」

「御覧の通り、私は虚弱に生まれた身。病魔に侵された、死に近しい体。単純な羨望を抱くなど言う方が、土台無理な話で御座います。アヤカシは病にも罹らず滅多なことでは死ぬことも無いそうではありませぬか。現に蝕様は、生まれてから千歳に上るほどのでしょう？」

「まあな」

「それに、使命による生まれ、在り方と言うのも素晴らしいでは御座いませぬか。私の生の、なんと虚無的なこと……。望まれずともすべきことがある生まれに、憧れずには居られませぬ」

「どうしてこんな話になったかは覚えていない。思い出そうと言う気にすらならない。どうせ昨日もしたような話だろうし、今日でなければ明日するだけだったろうとも思う。それは、この会話が不自然なものではなく、黎姫がアヤカシというものについて知ったとき、されて然るべきものだと言うことだ。」

此処のところ黎姫は、『夜岬』を眺める時間が減っていた。

代わりに蝕との アヤカシとの対話を楽しむようになったのだ。
蝕は面倒臭そうに応える。

「アヤカシつっても、色々 可笑しいくらい様々あるぜ。人間つても色んな奴が居るもんだが、アヤカシ共の比じゃねえよ。数では人の方がずっと多いがそれだけに、其々の違いについてちゃアヤカシに到底かなわねえ」

「左様で御座いますか……」

「大体人がアヤカシになれるわけが無いだろう。全然生まれが違えんだからよ。人に生まれちまったものは仕方がないし、アヤカシに生まれちまったものは始末がない。よしんばなれたとして 碌なものじゃあ、ねえ。長寿なんてそれ程良い物じゃねーし、退屈なもんだ。使命についちゃ、詰まって無いくせに窮屈な がっかり

がぎつしりの重箱みてーなもんさ」

「それでも、もしもアヤカシで居られるとしたら」

ここで、黎姫は少し言葉を切った。

再び息を吸い込む。

「ああ？」

「蝕様と共に在れるではありませんか？」

「そうかい……」

今度は蝕の方が溜息をつく番だった。

面倒臭い語らいがより面倒臭い空気を呼び込む前に、そろそろ今日はお暇させてもらおうか、などと蝕が胡坐を解こうとした。その時。第三者の声が響いた。

「黎姫様！」

宵丸 ではない。

黎姫でも宵丸でも、そして蝕でもない者の声が、積極的にこの部屋へ舞い込むというのは珍しいことであった。

伝令の者が駆け込んできたのだ。

わざわざこのような城の奥にまで知らされる内容とは、いかなるものなのか？

「黎姫様……」

彼は動揺が微塵も隠しきれていない。急ぎ焦りながら、今しがた知らされた内容を正確に黎姫へ伝えようと努めるので、精一杯であった。

「なんだ。どうしたのだ？」

「宵丸殿が……」

あの、恐ろしい腕の、若剣士が。

あの、空前絶後の、剣豪が。

「……え、宵丸が……？」

見開かれる目、震える唇。驚きの表情。

そんな黎姫を、蝕は横目で眺めていた。

知らせは

「宵丸が……………」

死んだ。

(承、終)

三薙ぎ倒し（みつなぎたおし）

刀とは殺すための物体である。

斬り殺す。その意義の下、いかなる敵も斬り殺す。斬り殺すためにだけに生まれたものだ。

敵とは何か。本能のまま襲い来る、凶暴な野生動物のようなものか。それらは確かに人よりも遥かに優れた感覚神経を持ち、運動性を誇り、筋力破壊力を備えているものがあるかもしれない。やはり敵とは何よりも人間であろう。敵対象として、人間以上の脅威はいない。何故なら人間は学習し、成長し、熟達し、道具を扱うゆえ。こちらが力を持てばこちらも力を、こちらが鍛錬をすればこちらも鍛錬を、そしてこちらが刀を構えればこちらも刀を。そうして互いに研ぎ澄まされてゆくし、互いに喰らい合って行く。

刀とは、人を殺すための物体なのだ。

刀とは、人の生血を啜る物体なのだ。

その成り立ちを忘れてはならない。

成り立ち、成り性質……成り太刀。

無論、妖刀も例に漏れず、言うまでもなく『夜岬』こそ人を斬り殺すための物でしかないだろう。間違っても 鑑賞するためだけの物などでは無い。

黎姫がそのことに最初から気付いていたか、それとも途中で気付くことになったのか、知る術は無く、本人にとってさえも知った際のことなど如何でも良いだろうが、しかし。最後まで気付かなかつたなどと言うことは、絵空事より願うべくもないことだったろう。

何より。

二十四振り全てが並び揃った『夜岬』を眺めながら、彼女は強くその意義について、想いを馳せていた。

無惨な死体だった。

些かのためらいもなく斬り裂かれた胴体に、そこから中へぶちまけられたはらわた。あちらこちら千切れ飛んだ手足に、無造作に木の枝へ引つ掛かけられた頭部。夥しい血は既に乾き切っていて、ずたずたにされた衣服と林の一角の緑とを、真黒に染め尽くしていた。遺骸からはとうに魂が乖離していて、見るも凄惨でありながらも、それが生きて動いていたときのことなど想像すらできないほどまでに物体へと還元されていた。

人間業ではなかった。

人の力でここまでの破壊を行えるかどうか、と言うだけではなく、心在人であるのならこのような業はとても背負うことができないであろう、と言うほどに、人間業ではなかった。

「……………」
人の通る道から外れた、薄暗い林の中。何者かとの格闘を行いなから道端より移動したらしい跡が、その死に場所へと続いていた。知らせを聞いて、いの一に此処を探り当てた蝕は、おどろおどろしいその情景をしばらく見分していた。薄暗くとも彼には関係ない。闇の化身とも言えるアヤカシである蝕は、たとえ星の無い真宵であったところで、周囲を容易に見渡せるのだから。

真宵。

その名。

……………落ちている左腕に握られた刀を　真つ黒い血がべっとりこびり付いた刃を、矯めつ眇めつ。興味深そうに注意深く視線で撫で回し、蝕はやつと口を開く。それは、彼に良く似合った皮肉気な口調だった。

「……………ひひ。随分と景気良く変わり果てた姿になってくれちゃったな、宵丸殿よ……………」

返事は返ってこない。

「俺は、あんたのことが嫌いじゃなかったぜ。宵丸殿とは、片手の指で足りてしまいそうなほどに少ねえ日数しか顔を合わせちゃいない。千と言う数を軽く踏破し腐るほどの年月生きちまつてる俺にとって、そんな日数は握り飯の中の米粒ひとつみたいな分量でしかないわけだ。が、それでもそれはそれなりの感情を抱ける程度には、鮮烈な一時だったと思うさ。ひひ。ここまで無様な死に様を見せ付けてくれたことまで含めて、全く本当に心の底からあんたのことが嫌いじゃないね、俺は。ただ、ひとつだけ文句を言わせてもらおうじゃあねえか。」

刀傷だらけの木々の中、枝に吊るされるように引つ掛かったままの頭部へ、蝕は語りかけている。

「俺はどうでも良かったんだぜ？ 宵丸殿のことも、黎姫様のこともよ。例えあんたや、どつか頭が浮ついているあのお姫様にどう思われていようと、あるいはこつちがあんた等にどんな感慨を抱いていようと、俺は妖怪だ。人間共のことなんざ、本当にどうでも良い。死のうが生きようが、生きていようが死んでいようが、どうでも良かったんだ。だから約束をされたところで、それを守ってやるうなんざこれっぽっちも思いやしねえんだ。わかるかい？ ……ひひ。それにも関わらずこんなことをしてくれやがって、蝕殿になーにを期待してくれちまつてるんだよ、全体どんな信頼をこの俺に寄せられたってんだ、宵丸殿は。んん？ 何とか言ってみやがれよ、腐臭の漂い始めた肉塊さんよあ……。」

一人 滔滔とそう言い続ける。

愉快そうに、不愉快そうに。

「それで宵丸殿は報われるってわけかよ？ あんたはそれで良いとも思うのか？ そんなのが良いのかよ、なあ、剣豪さん。こつちは真剣に良い迷惑なんだぜ？ 二つ重ねて四つ積んで八つ合わせて、十六重ねて三十二載せて六十四掛けて、傍迷惑さ。ああ、面倒臭え面倒臭え。かったるい、やってられねえ、つまらねえ！ ふざけ

んなつてんだ、畜生が」

げしつと。

死者への弔いや憐れみなど微塵も見せぬ様子で、宵丸の頭部をぶん殴る。

拍子に枝から外れ、首は地面に落ちた。殴られたり落下したりした衝撃で、腐りかけた皮膚などが、ぐずりと崩れる。そんな様子を何の感情も無さそうに見下してから、蝕は言った。

「ふう……」気が済んだのか、笑って。「だが、ま。引き受けてやるよ。腹も膨れない、面倒なだけの骨折り損だろうが……縁が無かつたわけじゃあ、ないからな。か、勘違いするなよ、別にあんたのためじゃないんだからな、なんちゃって。ひひひ……おっと何が面白いのがわからねえか。じゃ、宵丸殿。そうやって草葉の陰からのんびり眺めてると良いぜ。あーあ、おーつかーれさーん」

いかに億劫そうに、ひらひらと亡骸へ手を振りながら、蝕は、踵を返して去っていった。

* * *

「……黎姫ちゃんは尋ねました。『宵丸の眼は、どうしてそんなに銀色で、らんらんと輝いているの?』。宵丸は答えました。『それはね、黎姫のことを暗いところでも間違えることなく見つけるためだよ』。黎姫ちゃんは、また尋ねました。『宵丸の舌は、どうしてそんなに真っ黒なの?』。宵丸は答えました。『それはね、黎姫が好きな色が、真っ黒だからだよ』。黎姫ちゃんは、さらに尋ねました。『じゃあ、宵丸の舌は、どうしてそんなに長い?』。宵丸は大きく口を開けて答えました。『それはね……』」

とん、と、肩に手が置かれた。

「お前を食べちまうためさああああ!!」

「うっげぎゃああああああああああ！！」

喉が割れんほどの叫び声を上げ、慌てて付けていたお面を外し、振り返る黎姫。

涙目だった。

「むっ、むっ、むむ、蝕様ではありませんかっ……………！」

「俺じゃねえか。何が宵丸だよ」

「は、はあ、はあ、はあ……………ふええ。お、驚かせないでおくんなまし……………！ 心の臓が口から飛び出すかと思いましたが……………」

「いや……………すげえ叫び声だったな。色気もへったくれも無い。今度から叫び声を上げる時は、きゃっとか、はわわーとか、いやぁんとか、ちゅみみんとか、可愛らしいのにしてくれよな？ 俺との約束だぜ」

「さ、叫び声を上げるような時に、そのような余裕があるとはとても思えませぬ……………。……………ちゅみ、み？」

「さておき、あんた何やってんだお姫様」
「はい？」

「部屋で一人でのっぺらなお面つけて壁に飾ってある二十二本の刀に向かってぶつぶつと変でけつたいな物語して何をやってるんだ、って言ってるんだよ」

「宵丸を失った悲しみの余り気が動転して錯乱してしまった振りを、少し」

振りだった。

「……………」
「……………」

またしても突っ込みの言葉はなかった。

「……………いや、不謹慎な姫様だなあ。もうちつとこう、死者を労わる気持ちとか、気持ちとか、持ち合わせておいた方がいいと思うぜ？」

宵丸殿が可哀想じゃねえかよ、おい。黎姫様の御心は雪か氷でも出来てるのかい？ 知らなかったなあ、彩為城の姫君がこんなにも冷てえお方だったなんて。いやあ俺、驚いちまうなあ。酷い話だ」

自分のことを十段ほど棚上げにしていた。

宵丸が本当に可哀想である。

「はあ……。しかし、まだ、あまり実感が湧いてきませんもので……。振りでも行えば、涙くらい流せるかと思ひまして。確かに涙は出たようですが、別の涙で御座いました」

「そうかい。……その宵丸の骸を見てきたぜ」

「道理で……。そちらに参られていたのですか、蝕様は。突然に居なくなってしまうわれましたゆえ、どちらへ向かわれたのかと思うて居りました」

「ああ」

「どのような様子だったのでしょうか？ 不肖私と言えど、宵丸を失って悲しくないわけが御座いませぬ……。散散世話になっておきながら、宵丸のために表情一つ変えてやれぬ己が心苦しく、また恥ずかしゅう御座いました。まだ、信じる事が出来ていないのです……。あの者が、もはや何処にも居ないなどと。だから、何卒 お聞かせ願ひとう御座います」

居住まいを正し、蝕へ懇願する黎姫。何も、彼女も死人を愚弄する気などなかったのだ。ただ、宵丸と縁が深すぎたゆえか、ここまですりかかった者の死を経験したことがなかったゆえか、どうもなしえなかつただけで。あるいは 宵丸を知っている者に共通することだろうが どうしたって、あの強き剣豪が死んだ 殺された など、信じられないのかもしれない。

蝕は特に偽ることもなしに、一通り様子を教えてやった。

もしかしたらそれは配慮の足りない行為だったかもしれないが、妖怪にそんなものを求める方が贅沢であろうし、黎姫はありのままの様子をこそ求めていたのだから、別段問題はなかった。

その凄惨な有様を、余すところなく。

全てを聞いてから、

「左様……で、御座いますか」

眉根を寄せ、俯き加減で、黎姫はそう声を絞り出した。

「ああ。冗談の多い蝕さんだが、ここに限って嘘はないぜ。見たまんま、嗅いだまんま、触れたまんま。聞ける声なんざ、何処にももう無かった。」

「……………まさか、しかし……………」

口に出すべき言葉が見当たらないかのように、しばしの間黎姫は何事かを呟いていたが…………、やがて、沈黙した。大声を出したり、泣きじゃくったりはしないものの、複雑な表情をしていた。

と、そこで蝕は、

「だが、これで終いじゃない」

そう、言葉を連ねた。

黎姫は怪訝そうに顔を上げる。

珍しく真面目な面持ちが視界に入った。

「終いではない…………と、申されますと？」

「宵丸の死は、ただのそれだけで終わりなんかじゃないってことだ。あの野郎は、ちいっとばかり看過するには大きすぎる言伝を、死に間際に残してくれやがったのさ。あんた　黎姫様と、まあ、恐らく俺に、な。…………聞かない？」

「そこまで言われて、聞かずに済ませられる道理が御座いませぬ」

「その通り」

蝕は、運命を嘲笑うような表情を浮かべた。

一呼吸。

「さて　実地見分から導き出せる、宵丸の死への道程を辿っ

てみるか。ひひ。まず、道端で宵丸と何者かが殺し合いを始める

理由はとりあえず置いておいても、宵丸は刀を抜いてるわけだし、最終的に殺されているわけだから、殺し合いには間違いがねえ。それも相手は一人だ。足跡やら、林を通った後からな。そして、その往来に飛び散った血の跡を見つけた　つまり最初の打ち合いの末、どっちかが斬られたのさ」

「どちらかが」

「そう、宵丸か、何者か　どっちかだ。そして、斬られた方は傍らの林へ逃げ込み、斬った方はそれを追った。逆じゃねえ根拠はいくつかあるが、とりあえず斬った方がそっちへ行くのはおかしいだろうからな。手負いにして優位に立つたんだ、そのまま続けりゃ良い。で、斬り合いを続けながら二人は林の中を進んで行った　刀の切り傷、血の跡やらが点々と続いてたからな。さっきの斬られた方が逃げたっつー根拠はこの血の跡だ。おおよそ、一人分しか血の跡が残ってねえ。それも急ぎ焦りながら移動した跡　もし両者傷ついてたとしたら、勝った方は事後、傷を庇いながら移動する余裕ぶった痕跡が残ってるはずなのさ。つまり、最初に斬られた方は　」

「宵丸　、すなわち、この斬り合いは最初から最後まで宵丸の負け試合だった」

「その通りだ」

一旦、言葉を切る。黎姫はもう一度今までの経過を頭の中で追ってから、神妙に頷き……疑問を口にした。

「何故、宵丸は林の中へ？　手負いのまま道を駆け逃げたところで、追いつかれると思ったから、でしょうか？」

「ああ、目の付け所が良いな。それもあるだろう　　が、ここでちよつと俺の予想する要素を組み合わせしてみようぜ　　死体も、血の跡も、ほとんど乾き切ってた。もしかしたら、三日くらい前の出来事だったかも知れねえってことだ」

「三日　」

黎姫は、はつと思いが当たったような顔をした。旅の最中、夜間の移動までではないと思ってたゆえに、この殺し合いは明るい中行われたとばかり思っていたが　　。

「三日前。俺がお天道さんを喰らってた時分に、これらが行われてたとしたら、だ」

「な、成る程　　だとしたら……！　……、だとしたら……し

たら……？　しても……何も、変わりが無いような気が、致します、けど……」

「うん、まあ、これに限っちゃ予想だし、もしかしたら違うかもしんねえし」

しれつと言う蝕。肩透かしを食らったように黎姫は体制を崩し、困ったような目つきで蝕を見る。

「いや、意味はあるんだぜ？　もし周囲が、真夜中ほどでなくても暗かったとしたら　視界が圧倒的に悪い。あの林の中なんざ、なおさらだろうな」

「しかし、視界が悪いのは両者共にではありませんか？　両者とも視界が悪いのなら、それは条件として同一　状況が変わったとはとても言えませぬ」

「そうでもないのさ、これが。事実、手負いでありながらも宵丸は林の中で良い勝負をした　さんざ粘った跡が残ってる。……知らなかったら教えてやるが、宵丸殿は多少目が見えなくとも、間合いに入った敵の気配に対応できるんだとよ」

「……成る程。得心行きました。それで宵丸は、ただ逃げるだけよりも　撃退し得るだけの目が在る、林のほうを選んだのだろう、と言うことで御座いますか。……確かに、周囲が暗ければ、明るい時よりも遙かに林の中での追従は困難になるでしょうし　音も」

「門の中に音と書いて闇と読む　林中、しかも暗中となりゃ、音を立てずにの移動はほぼ不可能　待ち伏せも容易ってことだあなしかし」

しかし。

蝕は身も蓋も無い事実を告げる。

淡白に。

「結局、宵丸は死んだ」

「……はい。殺されたのですね」

黎姫も、顔を少し曇らせてから頷いた。そればかりはどうしようもない。如何に宵丸が林の中で善戦を繰り広げていたとしても、相

手へ 宵丸とあるう者が、恐らくは 手傷すら負わせられぬままに、殺されてしまったのだった。でなければ、こんな話などそもそもしていない。だとしたら、それが確実に意味することとは。

「宵丸よりもさらに、その何者かは手練であった……ということでは御座いますね」

「最初にも一撃喰らってるわけだしな。そこまで追った所で、そろそろ本筋だ」

「はい。……何者かが、何者であるかと言うこと
蝕がにやりと笑う。

「察しいいな、お姫様。ひひ、宵丸を一体誰が殺し果せたのか
このこと自体は、別段大した問いかけじゃねえし、重要な解答も無い。何故なら普通に考えるに於いて、そんな奴を推定したところで探せもしないし、見つけたところでどうすることも出来ないからだ」

復讐を果たせるだけの力量も無ければ、そもそも復讐に乗り出すだけの理由も名文も無い。黎姫にも、蝕にもだ。この時代に、そんな通り魔的な殺人を裁くだけの法があるはずも無い。だから、犯人を割り当てる事自体は無意味に近いはずである。
にも関わらず。

「 ですが、蝕様はこの話を切り出した」

「俺の性格を知ってりゃ誰だって思うな そこには意図がある」
「その意図とは？」

「宵丸の死体は、人間の所業とは思えないほどに分割されていた
お陰で、見つけるのに少しばかり苦労はしたんだが……血まみれの刀を握った左手部位があったのさ」

左腕に握られた刀 血がべつとりとこびり付いた刃。

「左……しかし、宵丸は刀を扱うとき右腕を主に……」

「ああ。俺も稽古場でしかと見た。宵丸殿は、右利きだった。だが、刀が握られていたのは左手で、その刀と言うのも脇差で、そして握りは逆手だった どういうことだと思っ？」

蝕は脇差を左手で逆手に握るような素振りを見せて、黎姫に問い掛けた。

彼女は答えようと口を開く。

「それは　ま、待つてくださいまし。それなら、普段宵丸が使っていた　殺し合いに主に使われていたはずの刀の方は……？」

「ああ、そっちの方は、折れて林の途中に転がっていた」

「血は？」

「宵丸自身の返り血らしきもの以外は、付いてなかったぜ」

「と言うことは　」

黎姫の頭の中で、その様子が即座に展開され、整理がつけられる。成程、宵丸が相手に手傷を負わせていなかったと言う何よりの根拠は、その折れた刀に在ったのだ。相手を切りつけた痕跡が見当たらなかった、ゆえに　。だから、脇差を握らざるを得なかった？使っていた長刀を失ったから？　いや、宵丸は刀を逆手で扱う癖はなかった。つまり、こちらは別の意図が在って　別の、意図？　血まみれ。その血は、誰のもの

「……………脇差の血も、宵丸の物。ならば」

「……………ひひ」

蝕は、にやついて返答を待った。

そう、蝕は話題の導入になんと言った　？

言伝を死に間際に残してくれやがった。

これこそが、《それ》ではないだろうか。

普段使わない刀。普段しない持ち方。そして、逆手とはつまり、正当に構えれば切っ先は自らを指し　事実、宵丸は、自分を傷つけ、血で、刃を染めた　。

折れた刀。宵丸が折れるような刀の使い方をするだろうか。いや、そもそも、刀を叩き折るほどの剣撃を行っては、相手の武器　恐らくは刀　自体にも深刻な影響が。相手がそれを気にしていない？　気にしていないと言うことは、代わりがあるか　折れるようなことなど無い。

宵丸のそもそもの目的。

「相手は、『夜岬』の所有者！」

「ご名答。血を啜る刀。刃同士で切り結んでも、まるで気にもしない妖怪の如き妖刀。まさに、宵丸が最期に残した言葉なき言伝つてのは『夜岬』を指している以外に在りようが無い」

黎姫は思い起こす。

あれは、宵丸へ『夜岬』回収を頼んで間もない頃であった。最初に回収してきた刀を抜き、そこへ自らの血を垂らし、宵丸は言ったのだ。

ぬらぬらと血を啜るように閃く刃を見せながら。

御覧の通り、これは紛う事無く妖しく禍禍しい、呪われた妖刀……。どうしようもなく危険な代物で御座いますぞ。それでも、黎姫様は刀を収集すると仰るのですか

自らの身ではなく、黎姫の身を案ずるような顔を。覚悟を測るような、親身に真剣そのものの表情を。そして。

それでも望むなら、己は間違いなく尽くす意志を。

これ以上もなく示しながら。

宵丸は言ったのだ。

「私は……」

私は望んだ。

それでも望んだ。

闇に魅入られていて。

夜に取憑かれていて。

だから……。

「だから……、……なっ！」

思い至る。

ようやく、思い至る。

宵丸が本当に最後に伝えようとしたことは！

「『夜岬』の所有者は、『夜岬』の収集をこそ望むこの城に

『夜岬』が二十二振りまで揃ったこの城へ　私の元へ……！
宵丸を殺したその者がやって来るであろうと　私から『夜岬』を
奪い取るべく、襲来するであろうと　そう言うこと、で御座いま
すか………！」

瞠目し、わなわなと震えながら、黎姫は核心を突き

「そう言うことだ。そして宵丸を楽々と斬り殺し、血と臓物と命を
いとも簡単に撒き散らしやがった、そいつは間違いなく　アヤカ
シ染みてる野郎だろうぜ」

溜息し、飄々と薄く笑いながら、蝕は確信を告げた。

* * *

茶屋にて。

そう、宵丸と蝕が会話と契約を交わし、『夜岬』の受け渡しを行
った、街道沿いに落ち着いている、あの茶屋である。そこそこに人
は入っているものの隣している街道にそれほど人通りがあるわけ
はないので、大賑わいの大繁盛とまでは行かない。ついでに言えば、
茶に良く合う手製団子がこの自慢の一品である。

そんな茶屋にて。

「彩為……」

「ああ、彩為つつつてたさ。間違いないはずだよ」

旅装で笠を被り、顔の窺いにくい一人の男が、尋ね事をしていた。
奇妙なことに……、その男は服装は旅装のそれではあるものの、手
荷物が随分と簡素で、腰に下げた一本限りの刀　それ以外にはほ
とんど何も持ってないようだった。

しかし、人の良いお人好しで通っている茶屋の常連　相手をし
ている気さくな男は、奇妙な風体に対して特に突っ込むこともなく
懇切丁寧親切専念な様子で、質問に応答していた。

「変な二人組みだったんでえ、よつく覚えてるよ。顔がきれいなほそつちよろい男と、いかにも剣豪といった風体の威風堂々とした男！　なんとかあ岬がどうこう言って揉めているようだったんだが、そのうち仲良さそうに出て行っちゃったよ。まあ、彩為つてのはここからああつちの方へなあ、数日くらい行ったところにある、こじんまりしたお城でさ……」

「そうか……やはり」

笠を被った男は、それを聞いてなにやら神妙に頷いているようだった。

構わず、常連らしい気の良い男は話を続ける。と言うよりも、ただの話好きなのかもしれない。

「強そうな剣豪の方が、ありゃあ、ほそつちよろい方を威圧してたみたいだったんだが、それよりも驚きなのはそほそつちよろい方の喰いつぶりだったねえ！　おらあここの茶屋には足しげく通ってるが、あんなに気持ちよく団子食ってる奴は見たことねえわ。こつちまで嬉しくなっちゃまうってえもん……って、おい、あんた……」

しかし、流石に話を止めざるを得なかった。何故なら笠を被

った男が、おもむろに、自らの刀の柄を握ったからである。

刀の柄を、握って。

緩慢とも言える動作で、鞘からそれを抜く

ズラリ。

「な、あ、あ、あんた……」

動揺しているのは、笠の男の行動が意外だったから　　だけでは
ない。

いや。

もはやその笠の男を、男　　つまりは人と、判じてよいものかど
うか。

相手をしていた男のみならず、茶屋にて一服をしていた全員を圧倒したのは、そのただならぬ雰囲気にならなかつた。尋常ではなく、にわかには信じられない感覚　　そして、光景であつた。

刀を抜いた瞬間。

男は様子も様相も一変したのだ。

余りにも禍禍しい　瘴気を背負っているかのような、正気を喰い散らかしているような、狂気が狂喜しているかのような、総毛立つ空気の闇そのものを全身から吹き出しているかのような、笠がずり落ち露わになった顔は、黒く塗りつぶされていて、到底人のものとも思えない。髪が乱れ、風も無いのに漂い、口は裂けているかのように獐猛で、目玉はぎらぎらと光っていた。

常連の男が、どさり、と、尻餅をつく。

「ひっ、ひいっ、ひい、ひいえええ………！」

言葉にならない。

先ほどまでこんな奴と話していたなどと、嘘のようだ。

ちよっと前の現実が、悪い夢でしかない。

その場に居合わせた全ての人間は既に吞まれてしまっていて、足腰も立たず、おかしな呼吸をするので精一杯だった。冷や汗が、脂汗が、嫌なように噴き出す。

なんなんだ　こいつは　！

こいつは、こいつは　人間なんかではない　もっととんでもない、化物のような

物の怪　妖怪　アヤカシ………！！

「……………」

目の前の《そいつ》　妖怪は、声なき笑みを浮かべながら、ちやきつ

と、抜いた刀を閃かせた。

抜いた刀　閃かせた刃は、当然の如く黒い。

暗く、黒い。

殺意のように重く、邪気のように深い。

渦巻く狂気の根源こそ、その凶器であった。

今、夜と闇と恐怖がない交ぜになったこの刀身へ注がれている視線の持ち主等は、誰もが知る由も無い。だが、他ならぬ持ち主

夜道の背後に何も居ないかもしれない、と云う予想。
両者は互いに同一で、どちらも孤独を知るからこそ。
最初から何も無ければ、孤独に悩まず済んだものを。

……………む。

ああつ。そつぽを向かないでくれ、こつちを向いておくれ。ごめん、詰まらない話をしていることは認めるから。機嫌をなおしてくれ。ごめん、ごめんなさい。後で飴あげる。うん、沢山あげる。わたしも大概貧乏な生活をしているけれど、君に好いてもらうためならどんな出費も痛くないんだよ。全つ然痛くない。これつぽつちも痛くない。痛くない痛くない、平気平気。泣いてないつてば。君は怒つてない？ 本音かい？ そんなこと言つて、忘れた頃に責めるんじゃないだろうね。だから続きを話せ？ うん、わかつた。いや、でも本当に怒つてない？ 大丈夫？ 大丈夫なら続けよう。ええと、なんだつたつて。飴の話だつて。あいた。小突かなくても良いだろう。ほんの茶目つ気だよ。うん。

それで…………。そう。

それでもわたしは知つてしまった。

否応無く、孤独を知つてしまった。

君のお陰で。

誰もが知つているように、いつかはわたしも死ぬだろう。だのに誰もが救いとしているような、霊魂や弔いをわたしは信じていないつまり孤独に死ぬしかないのだ。孤独のまま死ぬのは嫌だとわたしは感じる。例えば虫が良いと思われたつて、勝手な奴だと言われたつて、そう感じる。感じてしまう。

君は教えてくれたね。

アヤカシは思いによつて生まれ、

そして思われている限り死なぬという。

だとしたら人も同じではないだろうか。

人は死ぬ。

しかし、人の心に記憶として生きる。

人の記録に、名残として生きる。

歌を詠むのも、人を謳うのも、靈魂の正体さえも。

そうだからではなかるうか？

思いの結果ではないだろうか？

何も違わぬのではないだろうか？

人もアヤカシも。

.....

だから。

わたしの事を忘れないでいてくれ。

お願いだから忘れないでいてくれ。

それが紛うことも違う事も無い、たった唯一の私の願い。

君に忘れられないためであれば、わたしは悪鬼に身も心も差し出

してしまふことすらも、少しも厭いはしないのだよ。これっぽっち

だって、厭わない。そのために、わたしはやるべきことをこなすん

だよ。君がいつか、わたしの下を去ってしまったとしても.....

と、

ふと我に返る。

「蛭月.....」

軽く頭を振るい、誰かの名のような言葉を呟いた。

昼下がり、うつらうつらとしてしまふような中、遠い記憶へ馳せ

るべきでない思いを散らしていた。

「.....ったく。ん？」

軽く自らの頬を叩き、蝕は城の門のほうへ目を凝らす。準備も用

意も覚悟さえ、揃い踏みで揃い済み。後は結果をご覧じろ。と言

うことで、蝕が残りやるべきことと言えば、城の屋根の上からの警

戒を怠らないこと、だけであつた。

怠らない。

彼にとつてそれは、思いの他大変な難関ではあつたが。それも

もう、これで終りのようだ。

何者かがこの城へ、迫りつつあるようであつた。

何者か　それは旅装の男に化けた、あの妖怪。

だがそのような装いなど、蝕には意味を成さなかった。闇を見通す彼の目は、人とアヤカシを見分けることすらも可能なのだから。それこそ、漂う気配を見分けると言う表現に近い。一部の、人に化けるのが得意なアヤカシ共は除くが、幸いこの妖怪はその類ではなかった。

そもそも。

『夜岬』に取り憑かれた　支配された人間。殺人衝動と破壊欲求にのみ突き動かされるようになってしまった、もはや人よりもアヤカシに近い存在なら……ことの始め、十七振り目に会った時に、観察済みである。

なので　間違えようがない。

あの時の男とは比べ物にならないほど　ほとんど妖怪であると言いつつても間違いではないほどに、人間離れしているもの。たった今、この彩為城へ来訪しつつある《そいつ》こそ、宵丸を殺害せしめた者に、そして黎姫の所有する二十二本の『夜岬』を手に入れんとしている者に、違いないであろう。

確信を持って、蝕は笑う。

「ひひ……いいぜ。来いよ、来い。もつと近くに來やがれよ、妖怪さん。手前の周りにや死臭と怨念がぶんぶん漂ってんぜ。どれだけ強いんだか、どれだけ腕が立つんだか、どれだけの手練だか、そんなこたあ知っちゃこつたねえが　宵丸の野郎を殺せたのは単なるまぐれ、お天道様の気紛れに過ぎねえってことを、骨の髄まで捻じ込んでやるよ。あんたの終りはこの城だ。遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く　」

愉しそつに、呟く。

それはささやかな因縁への、些細な宣戦布告だった。

「殺意と執念の代償に、絶望と後悔抱いて死ね」

適当な要件を告げたところ、思ったよりもすんなりと城の中へ案内された。

まあ、もし門番に何事かをごねられたところで、諸共惨殺するだけのつもりだったので、その妖怪にとってこの意外さは僥倖と言うほかなかったが。

「ここでお待ち下さい」

そう言い残して、案内の者は部屋を出て行ってしまった。

内心、せせら笑う。

待つつもりなど毛頭ない。城の中へ入ってしまえば、あとは感覚に任せて目的のものを探すだけだ。城の中。彩為城。確かに間違いはなかった。この城の中に確かに「在る」を感じる。

『夜岬』は『夜岬』同士、牽引するのだ。惹かれ 合う。

もはや『夜岬』と一体になったこの元人間にとって、その感覚は強く、はつきりとしたものであった。同じ城内。しかもこのような小さな城内であれば、感覚に沿って歩き回るだけで、充分探し出すことが出来るだろう。それも、目標のものは二十二振りも纏めて置いてあるのだ。目を瞑っていても、ひしひしと在り処が伝わってくる。

「けけけ……」

妖怪は移動を開始した。

迷わない足取りで、城内を練り歩く。

随分と奥の方に置かれているな。

歩みを緩めぬまま、妖怪はそう思った。

そこで。

「！ 貴様、何者だ！」

城内の人間に見つかった。

身を隠そうなどと試みても居ないのだから、当然である。城内を

うろろろしている旅装の見知らぬ男　不審人物この上ない。発見した二人組みは手持ちの武器に軽く手をかけ、止まろうとさえしないその男に向かって、今度はやや乱暴に、二度目の質問を投げかける。

「何者かと聞いて　！」

だが、それは浅はかだったと言えよう。

一目散に逃げるべきであったのに　。

一息。

そして二息。

無造作に振るわれる黒い刃。悔いる間もなく、二人は闇色の斬閃によって分割され　床へと散らばった。血しぶきが廊下を染め、死の香りが充満する。

本性を現し……とても人間とは思えない容貌へ豹変した妖怪は、しかし刀を納めようとはしない。どうせ間もなく目的へと辿り着くのだから、いちいちしまわなくとも構わないだろう　と言う考えであった。折角だから、次から次へと追っ手が来ればよい。最後に暴れたのは、あの茶屋で　もう、一日以上経っている。そう、殺したくてうずうずしていたのだ。

しかし、それは叶わず……拍子抜けするほどあっけなく、そのまま部屋に着いてしまった。

この部屋の中に、『夜岬』の二十二振りが　！
在る！

妖怪は確信していた。戸を一枚通して、強く強く全身で感じる。

その存在感を……！

「け、けけけ……けけ、怪怪怪怪……っ」

笑みが止まらない。

二十三振りもの『夜岬』を手に入れたのなら、我は一体どれほどまでに強く、恐ろしく為れるのだろう……！　どれほどまでに素晴らしき力を振るうことが、可能となるのだろうか！

斬っ！！

待ちきれず、焦燥のままに、戸を斬り開く。
駆け込みたい気分だった、が 思い止まった。

戸の向こう側の情景が、部屋の中が……信じられない様子だったからである。

そう。

闇だ。

真っ暗闇だ。

部屋の中は 正しく、猫でも見通せないほどの闇だった。

自然にこんな闇が存在するわけが無い。

存在してはいけない、こんな暗さ。

こんな暗さ、今握り締めている『夜岬』の刃以外には、知らない。

妖術か……。

妖怪は、考える。

自分以外のアヤカシが、この件には噛んでいるのか……。恐らくこの城に、自分以外のアヤカシが、居る。そいつも自分と同じように、『夜岬』の怨念によって人間からアヤカシになったものなのかは、わからない。しかしそいつは確実に 自分と、敵対している。

そこまで、思考を整理した。

自分が持っているのは、『夜岬』の二振り目。

最初の、次に作られた、『夜岬』。

最も、怨念が渦巻いた、『夜岬』。

そしてこの部屋に在るのは 三振り目から二十四振り目までの、二十二振り……。

止まる理由など 無い！

妖怪は、自らを鼓舞するようにより強く自分の『夜岬』を握り締め……、

一步。部屋の中へと踏み入った。

「ぐ……？！」

違和感。

感覚で分かる。

目の前だ。もう数歩先に、残りの『夜岬』が
在った、在ったはずなのだ。 在った。
それが。今しがた。消えた。

消えた？

数歩分を、駆ける。

そこへ、辿り着く。

ここ だ。ここに、在った。

在った、はずなのだ！

だが、無い！

闇が濃いあまり何も見えないが

確かに……無い！

「が、な、何故……」

い、や。

いや、いや、いや。

狼狽している場合ではない。敵対しているモノが居るのだ。これ
は何かの
と。

「っ！」

何かが動く気配。

左側から、物音。

瞬間的に視線を移す。

そこには、輝く小さな二つの銀色。

銀色の、双眸。……目だ。

目 敵対しているモノ……！

跳躍 ！

「そ、こかあああああああああ！」

『夜岬』を振るい、斬りかか 待て！

銀の輝きが消えた。

移動した……？

違う！

そこには誰も居ない！

最初から、誰も居ない！

一瞬何かキラリと反射した　これは、鏡。

そう、鏡……鏡だ！　鏡だと！？

刀は止まるが、空中の体は止まらない。

体勢を変え

方向を転換　否！

足が虚しく空をかく。

足場が、無い、と言うこと。

床が　抜いてある？

着地できない？

意味する事は？

奈落。墜落。

闇の中で、闇の中から闇の中へ、落ちる。

ただの単純な事実、に、慄く。

「ぐっ、はああ！」

必死で横へと手を伸ばす！

掴む！　落ちてたまるものか！

幸い　手は届いた！

一息……

つけない！

空気の流れ……不穏な空気。

頭上に、何か

「？ ……！！！」

岩。

「がっ！　がああああああああああああああああああが
ががああああ！」

真つ暗闇の中、穴に落ちかけ、手も塞がり、避けられるはずも無い。

落ち来る岩にぶち当たり、
問答無用に叩き落される。

何故？

何故だ？

わからない、わからない。

さっきまでは本当に何にも無かったのに。突然だ。唐突だ。当たり前のように、いきなりそこに、現れた。頭上に、岩が。そんな事、有り得るはずが無い。無かったものが、突然現れるだなんて。そんな事。起り得るわけが。わからない、そんな事。

現れる。

無かったはずのものが、現れる。

消える。

在ったはずのものが、消える。

そうか、これが相手の……。

などと考えている暇など無く、落ちる。

下へ。下の部屋へ。

下の部屋も 闇だった。

奈落だった。

そして、抜かれた床 穴の下では。

十数本の刀が、刃を上向きに、突き立てられていた。

その上へ、妖怪は落ちる。

岩に潰されながら

じっ！ ばききっ！

どがぐしゃががああああ！！

刃に全身貫かれながら、岩に押し潰されながら、体中をボロボロに壊され砕かれながら、妖怪は下の階へと、着地した。

墜着した。

酷い音と衝撃だった。

「あが、が、がああああ……」

いくら妖怪とはいえ……、身体の損傷は激しかった。それに、岩に潰されて動けない。力が……そう、だ、『夜岬』が 怨念の塊が、自分の力の源が、そこに無い。

無い。

あまりの狼狽と、あまりの衝撃に、いつの間にか 手放してしまった。

早く掴まなくては あれが無くては、どうしようも、ない。大丈夫、見えなくなたって感じる。もはや完全に、体の一部も同然だ。手に取らなくとも手に取るように、位置がわかるはずだ。

わかるはずだ、が。

が。

が、またしても。

周辺から、その気配は消えていた。

『夜岬』の二振り目は、消えさせていた。

自身の片割れが 消え失せていたのだった。

な、なんなの、だ。

我は、何と戦って、いる ？

ずるり。

「な……」

そこで、世が反転したかのような感覚を味わった。周囲が全て、余すところ無く闇。先ほどまでの闇を濃密と示すのなら、今自分を包み込んでいる闇は 喰らいついて来るような、実害を伴う恐ろしい闇だった。

じわじわと、体の端から欠けて行く。

そしてそれは救いようの無いことに、幻覚や妄想などではなかつ

た。

事実 喰われているのだ！

「ひひ、先手必勝ってことは要するに、後手必負ってことじゃねーか」

誰かの声が響いた。

それは全方位から響いてくるようで、誰が何処で喋っているかなど杳として知れぬ 底知れぬ声であった。闇そのものが告げているようで たまらず、妖怪は叫ぶように声を荒らげた。

「ど、どついう意味だ！ 何処にいるっ！ 姿を 姿を現せ！！ ヤミサキを……、私の『夜岬』を、返せ！！」

闇は応えた。

「おいおい、要求は一度に一つにしろよ。ひひ、ま、どれも聞き入れる気は無いんだが な。だが、一応これは教えておいてやんぜ

……」
「何を……」

ぞつとするほど冷酷な声色で、それは告げられる。

「あなたの負けだ」

「な……っ」

「あなたはもう死ぬ」

「し、し、死ぬ……」

「あなたは終わりだっつってんだ」

じゅくじゅくと……体中が闇に溶かされていく。

何よりもおぞましい、耐えられない話であった。

「あなたは後手に回ったんだよ。それも後手も後手、後手後手だぜ。ひひ、宵丸と戦っちゃった時点で、あなたの負けは決定していたのさ」

「宵……丸？」

「取るに足らねー剣士さ。ただ、ちいっとはかし腕が立ったようだな」

「剣士……」

拙者は宵丸と申す

そう、だ。自分がここへ来る切欠となった男だ。確かそう、名乗っていた。『夜岬』の匂いを体中から感じた、その男……。だからそいつを殺し……。全てを奪い取ってやるうと思っただ。確かに腕は立ったが、自分の敵ではなかった。敵などではなかった。一太刀も浴びずに、自分はそいつを殺した！

自分は勝ったのだ！

それとこの状況と、何の関係がある！

「はん、間抜けが。宵丸が林へ逃げ込んだのは、そっちの方が有利だったから　だけじゃあ、ねえ。そこら中に生えた草、足跡を残す柔らかい土、刀傷を残す木々、人の入り込みにくい荒らされづらい領域　ありとあらゆる痕跡がそこには残る。ひひ、そいつを見分すりゃ、あんたの癖やら性格やらが舐めずるように丸わかりってえ寸法だつての。宵丸殿に対して俺が腹を立てたのは、そこまですで俺を当てにし腐ってくれた死に様ゆえさ……。面倒臭いったらありやしねえ」

「そ、そんな……。ならば……」

「だから、戦つちまつた時点で負けだつたつて、言ってるだろうがよ。あの場で宵丸に負けるか、この場で俺に負けるか　あんたにはその選択肢しか残されてなかったんだぜ。最初から。惨め極まりない負け犬人生、ご苦労様だよなあ？」

腕は肘の辺りまで、足は膝の辺りまで、闇に喰い散らかされていた。嫌悪感が形を成して、這い登ってくるかのような有様である。

そのような様子を、周囲全体が嘲笑っているかのようなようだ。

『夜岬』が手元に無い自分が、これほどまでに無力だとは。弄ばれるだけなのか。

「……た、頼む！　頼むから……」

「ん、なんだよ？」

「頼むから、た、助けてはくれぬか……。我を！　も、もう何も殺さぬ……。その剣士のことだったら謝る、償うから……。頼む！　なあ

？ なあ！」

「ひひ、却下」

無茶苦茶良い笑顔で、そう返された気がした。

「あんたは死ぬって言っただろ。そこは揺らぎのない決定事項なのさ。なんにも見えねえ腐った目玉でよく見る、観念しろよ。この状況であんたの挽回が在り得るはずねえだろ。それよりあんた、言い残すことかねえのか？」

「い、言い残すこと、だと？」

そんなこと、そんなこと……、考えたことも、ない。

言い残すとは、なんだ……？

「あんたはこのまま一人で死ぬのか。ひひ、哀れに『夜岬』に侵食され尽くしちゃったか。すっかり自分がアヤカシだってえ 人間ならざる化物だって、思い込んじゃまって思考停止しちゃったか。なあ、思い出してみやがれよ。記憶を無様にひっくり返して考えてもみる。あんた、元は人間だったんだらう？」

「人、間……人……」

「あんたの、人としての最期の言葉 俺が聞き届けてやるって言うてるんだよ」

それはどこか、同情するかのような響きだった。

「なあ……慈悲の心くらい、俺にも在るのさ……」

まるで、寂しさを知ってるような、声音だった。

言われて、考える……。とうに忘れていたこと。自分が人間だったということ。いくら人間離れして、アヤカシ染みたとところで

元は人間だったと言うことを。

仕事も在った。

役目も在った。

笑ってくれる友人も居た。

妻も持ってたし、子さえ居た。

そんな気がするが、どれもこれも臍気だ。

全て殺したからだ。殺し尽くしたからだ。

『夜岬』の糧とした。闇に、喰わせた。

「……あ、嗚呼、そう、か……」

自分のことを知っている人間は、既に残っていないのか。残さず殺してしまったのか。己の腕で。己の刀で。なら、ここで自分が死ねば、全て消えてしまうのか。生きた痕跡など何も残らないのか。闇に溶けきってしまうように……。

それは……。

それは、嫌だ。

それは嫌だ！ そうだ、例えたつた今我を殺そうとしているこの闇の主であっても良い……聞き届けてくれると言つのならせめて、せめて我の人としての名だけでも！

ここ数十年も名乗ることも無かった、自分の名を！

ここで、思い出せたのだから！

き、聞いてくれ！

妖怪は精一杯の声を上げた。

「我は、我の名は！」

ぐしゅり……。

言おうとしたその瞬間。

そこで、名も無き元人間の存在は消え失せた。

闇に蝕まれ、跡形も無く消去されたのだ。

あっけなく、何も残さず。

簡素な終焉だった。

「なんてな。手前の文言なんざ誰が聞くかよ、馬あー鹿」

ひひ、ひひひひと。

たつぷりと悪意に満ちた嘲笑いの声だけが、闇の総てに満ちていった。

事が終わって、蝕は自ら造り出していた闇を解除した。

岩の落下によって半壊した部屋を、余裕ありげに退出する。大体起こり得るであろうことは、あらかじめ半分程　半分程度であるのが重要であり、またそれゆえに最低限の犠牲が二名出た　説明してあったとは言え、問い詰められるのは面倒だったからだ。

後片付けは他人任せ。

勝負は蝕の圧勝であった。

日蝕、月蝕を引き起こす妖怪　蝕は、直接的な戦闘力はそれほど高くない。しかし、あたかも日蝕や月蝕のように、一時的に物体を隠すことが出来るのだ。舌先で触れた物体を、外部から一切の干渉が出来ないように隠し、また一定時間経過した後に、何事も無かったかのように出現させる。今回の現象のほとんど、並びに宵丸から『夜岬』を隠して見せた芸当は、この能力によるものだ。

さらに、質量や大きさを無視して物質を腹　闇の内へ収めることも出来る。それに対しては、最後にあの妖怪を食らったよう直接的な攻撃を加えることが可能なのだ。弱点として、内側からの攻撃には無防備であるが。

部屋を真つ暗な闇にしたのは、妖術の中でも幻術に近い類のものだ。単体ではたいした力を持たないが、己に有利な状況を作り出せるという意味では、大きな効果を持つものである。

第一段階として、混乱を誘う。

第二段階として、力の源を奪う。

第三段階として、じっくり殺す。

順を追い、着実に殺す。奇しくも黎姫が指摘したように、蝕の最も恐ろしいところはその応用力の在る狡猾さ、である。多くの歴史の例に漏れず、彼にとって必要なのは力ではなく　それもある程度は必要かもしれないが何よりも　情報であったのだ。その情報

を、宵丸から十二分に蝕は受け取っていた。

「ひひ。わざわざ『夜岬』の二振り目を届けに来てくれた　ってことだな」

そう皮肉気に笑って。

さらに奥の部屋。

黎姫の待つ部屋へ。

「……これは蝕様。終わりましたか」

部屋に入った蝕を、黎姫が迎えた。

「ああ。これ以上無いほど綺麗に、策に嵌ってくれたぜ。案外良い奴だったかも知れねえな　ひひ、ただの間抜けだったんだろぅが。宵丸の死体がさっさと露見したところが良かったな」事も無げに言う。「宵丸ほどの熟達した兵士を、野放しにはできねえもんな定期的な連絡を約束させたのが、良く響いたって結果だーな」

「そう申されれば……尋ね忘れていたことでは御座いますが、蝕様。如何様にして、宵丸の元へ、あのように疾く駆けつけることが出来たのでしょうか？」

「別に」蝕は軽く肩を竦めた。「俺の妖怪としての本性は、闇色毛並みの狼さんでね。その気になりゃあ、馬くらいの速度で走ることも可能ってだけさ」

「左様で御座いましたか」

「取るに足らない辻褄合わせ、みてーなもんだろ。あんたから借りた二十二振りの方も、もう姿を現してるはずだ。しばらく待てば、言いつけといた奴等がここへ恙無く運んでくれるはずだぜ。」

「ってことで……こいつが収穫の品」

と、いつの間にか手にしていた刀を、鞘からずらして見せる。

黎姫にとって、すっかりお馴染みとなった夜の色　しかし、今まで目にしてきたどれよりも深い黒の彩りに見える。

「ぱちりと鞘に戻して、蝕は黎姫にそれを渡した。」

「宵丸殿の　忘れ形見だ」

言つて、黎姫の前に胡坐を組む。

黎姫は、手に取つたその刀を　とつくりと眺めていた。

『夜岬』の二振り目　宵丸を屠つた、刀。宵丸が最後に対峙し、そして敵わなかつた、刀。宵丸が最期に対峙し、そして叶わなかつた、刀。確かにある意味それは、形見とも言えるだろう。

鞘から抜いて、刃を撫ぜるようにする。指先が触れるか、触れぬかの距離。鏢から切先へ　切先から鏢へ。する内に、やがて……呆けたような顔　目を見開いたまま感情が何処かへ消えてしまつたような呆然とした表情　で、黎姫はぼつりと呟いた。

「宵丸……。すまない。私はそれでも、それでも私は

お前を、愛せなかつた」

愛せなかつたのだ、と。

手の内の刀に語りかけるかのように、それは独白にも懺悔にも似た……その実ただの、事実確認のような言葉だった。

「……は、やっぱりよー……」

こちらも静かな口調で、しかし蝕らしく一呼吸、愉快そうに笑つて言つ。

「ひひ、宵丸殿を殺したのは、お姫様。あんただつたつて言つ見解で、良いんだな？」

まさか、そんなはずはない。

宵丸を殺したのは確かに、『夜岬』に取り憑かれた　あのアヤカシになりきれなかつたアヤカシであり、黎姫とは何の関係も無い。蝕の言っていることは、今までの流れや文脈を丸つきり無視した、見当違いの台詞である。だからこそ、ここは否定の言葉が返つて来なくてはいけないはず……で、あるのに。

「……はい。間違い、ありません」

黎姫の返答は、肯定のそれだった。

「そ、か」

蝕は軽い調子でそう言つて、両腕を頭の後ろに回し、若干後方へ体重をかけるようにする。そのまま言葉を繋げる。

「そもそもよ……。全国に散らばった二十四本の刀　それも、こんなにも禍禍しい妖刀、凶刀を全部集めようつてのが、荒唐無稽だったんだよな。阿呆でもそんなことは言わねえ。しかもそれを言出したのが、よりにもよつて頭の悪くない麗らかなお姫様だつて言つんだから、これはもう狂つてるとしか思えない」

そこで一端言葉を切り、つい、と薄目で黎姫を見やる。彼女は、黙つて聞いていた。

肯定もせず、否定もせず。

目を閉じて、蝕はさらに続けた。

「そんな、目隠したまま逆立ちで綱渡りをするような真似をしろと言われて、素面で受ける野郎もそもそも居るはずがねえ。土台無理な話だつたのさ。やつたところで、十中八九どころか十の内十は途中で死ぬぜ。そんなの依頼するつてのはもう、『死ぬ』つてんのと同じだな。だが　その頼みを聞いちまった、馬鹿を超えた大馬鹿野郎が居たわけだ。その上そいつは、二十四本中二十二本も集めちまった、狂いきつた野郎だつた。ま、結局　死んだけどな。ひひ」

黎姫は、しかし、何も言わず。

表情も、やはり、何も変えず。

「この結末を、お姫様。あんたが予め想定していなかったはずはねえ。予想してなかったはずがねえんだよ。二十二本　今となつちや二十三本か　そこまで集まることは予想してなかったかもしれねーが、宵丸が途中で死ぬ……。つてことは、明らかに最初から考えていたはずだ。加えて、さらに外道なことに　宵丸が、その頼みを断るわけが無い、つてことも予想してははずだぜ。宵丸殿はあなたにぞつこんだったからな。それに気付かないお姫様じゃねーだろ。……。だとしたら、だ。お姫様、あんたが宵丸に頼んだ事は、『死ぬ』つて言うことと同じで　だからこそ、宵丸はお姫様が『殺

した』と言つちまつて、何も問題はねーわな」

「……………ふ」

黎姫は、やっと無表情を止めた。そして、顔を翳らせるようにして 笑みを、浮かべる。柔らかな顔立ちに反して、それはとても底意地が悪そうな表情だった。……………歪なような。

「ふふ、しかし、それが如何なさいましたか、蝕様？ 私が宵丸のことをどう思っていたとしても、もしくはどうも思つてなかったとしても この結果に変わりはありませんでしょう。過程にさえ、影響を及ぼしませぬ。そのように何にも繋がることのないことを、わざわざ指摘するなど 蝕様らしくも御座いませぬ」

「言つじゃねえか……………ひひ、だがその通り こいつは実に下らない話さ。あんたが突いて貰いたそうな顔をしてたから、突っ込んでやっただけでな」

「……………」

「……………」

見つめ合うように 睨み合うような、しばしの沈黙。

蝕は、そこで胡坐を崩した。ついでに話題も変える。

「……………ところで、お姫様」

「はい」

「あんたにこいつをくれてやるぜ」

そう言つて、

刀を、もう一本、

蝕は取り出した。

「 ! な、よもや、それは……………!？」

滑らかに鞘から しゅらん 刃を抜いて。

黎姫の目の前に すとんっ 突き立てる。

「な、何故 蝕様が、こ、これを……………」

深い夜の色彩。濃い闇の彩色。

それは、『夜岬』に他ならなかった。

最初にして 黎姫にとっては、最後になるであろう、『夜岬』。

慌てて、打ってあるはずの打ち出し番を　何振り目であるのかを、黎姫は確認する。が、他の全ての『夜岬』に数字が打ってあったその場所には、何も彫られていなかった。

無　　零。

いや、それは初振り　、一振り目に他ならないからではないか。「紛うことなく違うこともなく、最も初めに打たれた『夜岬』が一振り目　だぜ」

黎姫の心中を察したかのように、蝕がそう告げた。

「し、しかしっ、何故……。宵丸の話によれば、とんと行方など知れず　実在するかすら危ういと言われておりましたものを……何ゆえ、蝕様が所有してらっしゃるのですか……っ？」

「何故も何も、俺が最初から持ってたからに決まってるだろが」

「……？　え！　ええ？」

「俺がこの刀を打った奴から『夜岬』を受け取ってそれっきり一度たりとも外界に出したことがなかったからだぜ。そりゃあ、行方も全然わからないだろうし、噂すらも立たないだろうさ　煙立てる火の元が、ずっと俺の腹ん中だったんだからよ」

言われて、狼狽しつつ動揺しつつも、改めて　黎姫はその刀を眺める。

手に入れることを、本当に真の意味で心の底から諦めかけていた

『夜岬』が一振り目。

型番号のない、零に等しい初の一つ……。

ふと気づき、蝕へと問い掛ける。

「……一度たりとも、外界に出したことがないと……そう、仰いましたか？」

「ああ、受け取ったことを自分ですっかり忘れてたくらいだからな」「忘れて……、い、いえいえ。それより、ならば」

「そう。そいつは今まで、一雫たりとも、血を吸ってない」

命を喰らったことのない、生まれたままの妖刀　『夜岬』。

刃は確かに　黒く、黎く、暗く、昏かったが

ほのかに。
薄らと。

例えようの無いほどまでに、美しく　紫色を帯びていた。

最初の刀ゆえ、打ち方が甘かったのか。

それとも、血に触れたことが無いゆえか。

どちらにせよ、黎姫にとっての真実は一つ

「う、うちゆくしゅうございませしゅ……」

「おい」

「美しゅう御座います！」

「ちゃんと言えたな、おめでとう」

「はい！」

見蕩れる余り、一瞬幼児化してしまった。

「い、いえ。しかし……」

黎姫は名残惜しそうに刃から蝕へ視線を移し、尋ねた。

「受け取った、と……」

「ひひ……ま」蝕は崩した胡坐から片足を起こし、膝に肘を乗せる

ようにして言う。「少し、昔話をしてやるよ」

「昔話……で、御座いますか？」

「『夜岬』の話さ。さっき言ったように、俺もすっかり忘却し

ちまっつたからな。ここにいたつての憶測も含めて言うが

元々、そもそのところ。その刀は……」

思い出す、別に思い出したくも無い記憶。

すっかり忘れていた、思い出。

「……それら刀　『夜岬』は、俺に向かって創られた刀なんだよ」

「なんと……」

懐かしむわけでもなく、詰まらなそうにでもなく。いつもの皮肉

気なやかにや笑いのままで、蝕は自らの過去を言の葉に乗せてゆく。

「とある刀鍛冶が居た。名は……別に良いか。そいつと俺は、珍妙

な切欠で何故やら仲良くなっちまっつた。ちょうど　今回の宵丸と

か、あんたみたいにな。お姫様」

「……ふむ」

「俺よりひねた野郎だったぜ。『わたしの性根は夜中より暗いのだぞ、蝕！』どうだ、御見それ行ったか！』とか呵呵大笑してたな……お前それ、ただの根暗じゃねえか。根暗が御見それとか言っ
てんじゃねえよ、みてーな」

「さ、左様で……」

「俺くらいしかまともに話せる相手もない根暗のくせに、ま……
とんでもない寂しがり屋だったのさ」

ひひ、と、間を置くように笑う。

「だから、『夜岬』を打った」

「……だから」

「そう、だから、だ。あろうことが、俺に忘れられなくなかったんだとよ」

「その方のお気持ちは……わからないでもありません」

「はん、そうかい。だが、俺はそいつの下を離れた。『夜岬』の振り目を貰ったのも、その時のことだな。『夜岬』に俺の舌が似ているんじゃない。俺に似せて、その刃は創られたんだろうよ。で

それで　ここまで至る。ひひひ、あの後二十三本も几帳面に
同じもん創ってた　たあ、知らなかったし、考えだにしなかった
が」

「合わせて、二十四」

「そう、二十四」

二十四。

その意味は

誰に向けたものかと、言えば。

「……滑稽な話だ。この場に居合わせちまったことで、何の因果か
因縁か　結局忘れきれずに、あいつのことを思い出しちまうだ
なんてな。……、策に綺麗に嵌ったのは、俺の方ってことかよ。
しゃらくさいこと甚だしいぜ」

蝕。

むしばみ。

虫が食むように 『むし』『はみ』『六と四』、『八と三』。掛けて、『二十四』と、『やみ』。闇を、二十四振り。あいつから……いつかの蝕へ。いつの年か月か、あるいは日か。そのことに気付いて、自分を思い出して欲しいと 思い出さなかつたとして、その闇色のみが、自らの居た、在った証になればと。ただそれだけの、あいつの思いだった。

寄添った時が在ったと。

それだけの ために。

呪われた夜を二十四回。

黒すぎる刀を二十四本。

一生を懸けてまで……。

「ひひ……全然笑えねえ、駄洒落だ」

そう、昔話を締め括った。

話を咀嚼するように、黎姫は幾度か頷き……

「蝕様……。そのような、大切な品を 本心に、私なぞが所有してもよろしいものなのでしょうか？ もし資格という話をなさるのであれば、それは、とても私などには……」

口籠るように、尋ねた。

「黎姫様よ。この刀が綺麗だと思っただら？」

「は、はい……！ それはもう……！」

「ならやるよ。くれてやる。資格ってんなら、それで充分だろ。大事にしやがれ」

無造作にそう答える蝕。ここまでされた以上、忘れないという意味では 現物など、蝕にとっては不要であり、無用の長物だと そんなところなのだろう。

途端、黎姫は感極まったような顔となった。

両手を二三度はたぱたとさせてから、はっしと蝕の手を掴む。

「む、蝕様っ……！」

「ああ？ 礼つつーんなら……」

首を傾げようとする蝕に先んじて、黎姫は強く告げた。
上目遣いで、歡喜と懇願の表情で、瞳を潤ませて。

「わ、私と夫婦になっては下さいますか……っ!!」

呆然。

啞然。

苦笑。

失笑。

脱兎。

蝕の取った行動は、迅速これ極まりなかった。

(転、終)

四切り捨て（よつきりすて）

人は止まるところを知らない。
知る由も無い。

特に人の欲こそ、止まるところを知らない。求め続けるのが人だとも言える。その欲求こそが、初めから今の今まで人を動かさせ、人を歩かせ、人を走らせ、人を進めさせ続けて来た。邁進させて来た…… 見えるものから見えないものまで。無いものから在るものまで。余さず残さず、好き嫌いなく 人は、求めてきた。

かくして、喰らい合って来た。

喰らい合う世。戦国時代。それはまさに、わかりやすい形で見やすい形で。人間を表現した時代だったのかもしれない。

力を求める。力も無いのに名を馳せるな。気を配れ、気を抜くな。油断をしたら喰われるぞ。手を組み奪い、手の平返して盗み果せる。心は掴めど、心は許すな。地獄はすぐそこに、そこかしこにありふれるほど点在しているが それゆえに、欲望の坩堝がうねりを上げて我々を研ぎ澄ましてくれる。貪欲に、醜悪たれ。意欲高く、悪名高く往け。

そう、歴史は告げている。

どろどろと。

どろどろと 続き歩く兵隊達。

そのような様子を、高い木の上から気だるげに眺めていた蝕は、ここしばらくぶりに黎姫に会いに行こうかと 少し、思ったのだ。

「ひひ……潮時かな」

呟いて、木から降りる。

蝕が黎姫の求婚を断ってから　つまり、黎姫の下に『夜岬』が初から了までの二十四振り、その全てが並び揃えられてから　十には及ばないものの、数日よりは多い程度の時間が経過していた。それでも、黎姫へのお目通りは叶った。彼女の方はまだ、蝕を歓迎する気持ちを忘れてはいないようであった。

薄暗い、彼女の部屋。

壁際に、二十四本の刀が鎮座している。

その存在感をひしひしと感じながら部屋に入ると、部屋の主は深々と出迎えた。

「これはこれは蝕様。もう会えないものかと思っておりました。嬉しゅう御座います」

蝕へ微笑みかける黎姫。心なしか

さらに美しくなったように見えた。

さらに、儂げになっていた。

「そりやどーも」と、黎姫の前に座る蝕。「まだ俺のことを覚えてくれたとは光栄だ」

「またまた。蝕様の方こそ、私のことをまさかお忘れになっているわけは御座いませぬでしょう。こうしてお顔を見せに来て下さったのですから」

「ああ、勿論覚えてるぜ、宵丸さん」

「忘れられております!」

勢い良く驚いて見せてから、けほけほと咳き込む黎姫。やはり、体が衰えているのだらう。あるいは……ここどころ、話す相手すらろくに居なかった　と言うことであろうか。

蝕が心配そうな様子を見せた。

「おい、大丈夫か宵丸さん!」

「大丈夫ですが大丈夫ではありませんせぬ!　まだそう呼び続けるおつもりで御座いますか!??」

「体に巢食う病魔も、随分勢力強めてきちまつてるみたいだな……。無理をしちゃいけないぜ、宵丸さんよー」

「だから私は宵丸では御座いませぬ!」

「いやいやまあまあ、俺に会えて嬉しいってのはわかるけどな。だからってはしやぎ過ぎちゃいけないよ。な、宵丸さん」

「私の名を言つて御覧なされい!」

何やら元気になったような黎姫。

崖際で大海へ向けて叫ぶ姿もさながらであった。

「どうどう。本当に自愛しろよな」

「はあ、はあ……蝕様が私を弄ぶからで御座います」

「本題に入ろうか」

ひひ、と笑つて、蝕はここへ来た理由である話題に入った。

戦国の世の常　戦争と戦鬪の兆し。今までどうにかこうにか、巻き込まれるのを避けてきた彩為ではあるが……いい加減そうも言つてられない状況となるであろうこと。いざ戦となつた時……いや、このような弱小国は攻め入られるだけであろう……そんな時、黎姫はどのように身を振るのか。

「俺にとつては至極当然どうでも良いこと極まりない話なんだけだよ　今この現在。恐らく隣国の軍勢であろう人間共が……」

「そんなことより、私の名をまだ聞いておりませぬ!」

「まだ引つ張るのかよ!」

本題を遮る黎姫に、突つ込みへ回る蝕であった。彼女にとってはどうやら重要なところらしい。仕方がないのでとりあえず、呼んでみることにした。

「黎姫様」

「はい」

嬉しそうな顔をする黎姫。

「……通津作さん、とか」

「……」

黎姫の髪の毛が逆立った。

「れ、黎姫様」

「はいっ」

嬉しそうな顔をする黎姫。

「……本題に入ろっか、黎姫様」

「はい、構いませぬ」

蝕は仕切りなおした。

「で……もう一度言うか。俺にとっては至極当然どうでも良いこと極まりない話なんだけだよ。今この現在。恐らく隣国の軍勢であろう人間共が、この城目指して迫り来てるぜ。知ってるかい？」

「……はい、存じております」

「そうか。まあ、だろっな。……百人力の宵丸もいなくなつたし、妖怪の襲来。は、大した被害は出なかつたわけだが。加えて、『夜岬』も揃つちまつたわけだ。要するに危険視する理由が出来ちまつた上に、ちょうど弱つてるところってこと。潰すなら、今。だろーな、外から見たら」

「左様で御座いますか」

「城のこととか、この御家様の行く末なんぞに興味はねえが」

すつと視線を黎姫へ向けて、蝕は尋ねた。

『夜岬』の全てを束ねる、その所有者へと。

「あんたはどーすんだ？」

「私は……」

彼女は言う。己の胸元へ軽く手の平を置くようにして。

「私は、もう、本当に長くありませぬ」

「……そうみただな」

「『夜岬』も揃つてしまいましたし、蝕様には拒まれてしまいましたたゆえ……、もはや何も思い残すことなど御座いませぬ。目的が無く、結末は一つ。望みが、皆無。絶無。虚無に御座います」

虚ろで、無。

「城が落ちて死ぬか、病で先に死ぬかの賭け事……そんな、ささやかな遊戯くらいしか、やることは御座いませぬ」

「後はただただ待つだけの身か。いいご身分だな、お姫様」

ふふ、と。蝕へ微笑んで見せる黎姫。

触れたら崩れてしまいそうな、危うい美しさ。

溶けつつある雪結晶までに、幻想的。

「捕らえられ乱暴されて殺されるよりも、病で死ぬ方が楽でしょうか？ それとも、独り……病に侵されてゆくよりは、何者にかであれ、手を下された方が救われるのでしょうか。何よりも自ら命を絶ってしまった方が 誰にも優しい終わり様なのでしょうか。私にはわかりませぬ。このような思案こそが、心を殺してゆくような過程 黒き刃で刻んでゆくような 不毛と言わず、何と称しましよう」

「ふうん」

気のなさそうに、相槌を打つ蝕。

「初めて 御爺様から『夜岬』を譲り受けた時、私は何かに巡り会えたかのような心地がしたものです。そう、この 「飾ってある『夜岬』の一つを手取る。」 十三振り目で御座います。この世のものとは思えぬような、刃の彩り 造り。墨よりも澄み行く黒。闇では止みませぬ暗さ。私はそれまで、何のために生を授かり、生れ落ちたのやら、とんと見当もつきませんでした。内側から病に喰らわれていると言うのに、誰も助けてなどはくれず……美しいと私を称する言葉は、鏡よりも上面で、中味も意味も持ち合わせず。世間は夢とも現とも知れぬ有様。されど、『夜岬』 己が手の内に握った夜の色と、人を斬る刃の形は、私に理由を授けてくれたのです」

黎姫は、しみじみと語る。細く白糸を紡いでゆくような、声の連なり。蝕は黙って聞いている。このような話を聞いてやれる相手など、宵丸が死した今、蝕だけであった。否……悲しきかな、宵丸には彼女のこれら言葉の、切なる意味合いを聞き取り、応えることが出来なかったであろう。

宵丸は、黎姫にとって、善良すぎたのだ。

宵丸にとって、黎姫は、無垢すぎたのだ。

心中に闇を抱えたことの無い人間が、どうして『夜岬』などに魅入られるはずがあるのか。そのことについて少しでも考えたことがあれば、思い至らないなどと言うことは、在りえなかつたろうに。

邪気に溺れた彼女は、無邪気に振舞いすぎた。

だから黎姫は孤独だった。

「理由 『夜岬』の収集。私は、黒なる刃に私の心を投影したのかもしれませぬ。姿を映さぬ刀身に、心を映したのかもしれませぬ。それは己が魂の断片を集めていくような、抗えぬ欲望で御座いました。……御爺様の蔵に在りましたのは、四振り目と七振り目と八振り目、そして十八振り目。宵丸が初めて持って参ったのは十一振り目……。了とも打たれた二十四振り目を受け取りました時は、生憎の雨天で御座いました。御陰で眺めるのに灯しか使えず、苦勞したのを覚えております。……此処に並ぶ二十四振り、全てにまつわる記憶を 私は忘れてはいないので。当然のように覚えております。 これら『夜岬』を巡り…… 様な人共が数多殺され、宵丸は多くの命を奪い、通して私はそれより殺したということ。そして今、集め揃えた『夜岬』を取り巻く死の総てを、私は侍らせているので御座います」

刀を元の場所へと戻し、黎姫は座りなおす。

蝕の前で、姿勢を正して、静かに言う。

「黎姫の黎は、黎明の黎。さりとして、私の夜は明けぬまま終わることでしょう。……蝕様」

「なんだよ、お姫様」

「私を殺しては下さいませぬでしょうか」

唐突とも言える言葉を、余りに落ち着いた様子で、必然のように告げる。……しかし、蝕は驚かなかつた。

むしろ笑って 応じる。

「ひひ、一体どういう風の吹き回しだよ」

「私は……いずれの流れにしても、近く死に行く定め。ならば、『夜岬』の黒き刃に貫かれて死んでしまいたい」

「何で俺に頼む。面倒臭いだろ、他の奴に頼めよ」

「この城にそのような頼みを聞き入れてくれる者など居りませぬ。

ご存知でしょう……？ それに、蝕様は 『夜岬』が蝕様へ打たれた刀だというのなら、それを振るうのに最も適した方で御座いましょう」

「その言い方もどうかと思うが……んー」

思案顔の蝕。

にやにやとした表情を浮かべながらも、内心悩んでいるように見えた。別に、黎姫を殺すのが忍びないわけではないのだろうが

蝕は妖怪で、黎姫は人間なのだから。それは宵丸の死体にも告げていたこと。蝕は、他人に余計な感慨を抱いたりはいしない 縁の有無に関わらず、生死について淡白なのだ。ただ、黎姫が美しいだけに、勿体無いと思っただけかもしれない。黎姫は頭を下げた。

「お頼み申します……」

「……そうかい。まあ そう言うことなら、了解だ。請け負ってやるよ。そりゃ、病で死ぬとか、どこぞの誰かに殺されるよりかは……幾分かましかもしれねーからな」

だが、と続ける。

「だが、三日待ちな」

「三日 で、御座いますか」

「ああ、例によって三日さ。ひひ 俺にも色々、心の準備とかあるんだよ。あんたにもあるだろ？ なんだかんだ言っただけ、名残とか思い出とか。振り返って置けよ。死んだらそう言っただけは出来なくなんぜ」

等と、蝕は嘯いてみせた。本心が何処にあるのか、見通すのは難しい。

黎姫は、言葉を噛み締めるようにする。

「……分かりました、では 三日の後に」

「大丈夫、蝕さんは無闇に約束破ったりしねえからよ。だから黎姫様よ。あと三日、生き延びてみる」

「はい」

こうして、蝕と黎姫の、最後の約束が交わされた。

そして三日後、彩為家はその名と血筋を失い、途絶えることとなる。

* * *

『夜岬』が二十四振り、その全てを、揃えて献上すること。

彩為家へと隣国から突き付けられた降伏条件とは、概要を述べてしまえばそのような内容であった。無論、その他にいくつも条件は挙げられていたが、最たる 抜かすことの出来ない特記すべき条件とは、妖刀『夜岬』に関する事、そののみ。もし拒むのであれば、容赦無く城を落とす所存である……と。『夜岬』の噂は信憑性が高いとまでは言わずとも 目を付けられるほどには、広まっていたのだ。

刀身が信じられぬほど黒い、だけではない。

折れず、切れ味も衰えぬ、アヤカシめいた刀。

もしその話が本当であるのなら、それらを二十四振り、腕の立つ剣士達に帯刀せしめ 決して少なくない戦力とすることが可能だろう。最低限そのような曰く付きの刀を二十四も抱えているとなれば、他国への威圧として効果的。……そう、判断したのであろう。彩為に、迎え撃つと言う選択肢は無かった。よしんば目前の敵を蹴散らせたとして、それは戦乱の世に身を投げ置くと言うことに他な

らない。今まで攻め入れなかった理由　それほど重要な位置にはいないと言うこと　とはつまり、戦となった際、自国だけでは大した戦略を取ることが出来ないことを意味する。そのような悪条件の中に身を置いて、生き抜いてゆけるだけの根拠など何処にも無かった。

ただ降伏し、隣国に吸収されるに近い形を取るのみ。

勿論それは、黎姫が『夜岬』の所有者で無くなるということに他ならなかった。

* * *

黎姫が蝕に己を殺してもらったことを懇願してから、ほぼ三日の間が過ぎた。

朝が明けるかと言う手前　夜の最も遅い時刻。黎姫は、眠ってなどいなかった。

日が昇ってしまえば、『夜岬』の全ては己が手の内を離れていつてしまうのだ　どうして、眠ることなどが出来ようか。名残を惜しんだり、思い出をなぞったり、するだけのことをしなくてはならなかった。

加えて。

蝕が約束を破らないと言うのなら、必ずやこの夜の間に現れるだろうと。そのような確信を抱いて、黎姫は眠らずにいたのだ。

かくして、違わず蝕は部屋を訪れた。

人を退ける妖術を用い、人知れぬ内に。

「よお、お姫様」

「蝕　様」

相変わらず、軽佻浮薄な様子で挨拶をする蝕を。相変わらず、優しく美しく儂げに黎姫は迎えた。

「来て下さいましたか」

少し安心したように、ほっと息を吐く黎姫。
続けて、思っていたことを口にする。

「三日……とは、このことで御座いましたか」

「ひひ、このこと　ってえと？」

「とぼけないで下さいまし。この　『夜岬』が隣国に奪われるであろうと言う、交渉条件として提示されている　そのような状況で御座います」

蝕は座らず、立ったまま片頬を釣り上げた。

腕を組み、入り口近くの壁に背を預ける。草木も眠るような時刻、明かりは小さな灯だけ。蝕の輪郭も、朧げであった。

「まーな……。予想よりも早く軍が来るようだったら、その前に予定を繰り上げて参上するつもりだった　と、それだけのことさ」

「『夜岬』を手放せば、隣国に攻め入られることなく……つまり、私は殺されることなく、むしろもしかしたら彩為を救った者として人に見守れながら病で死に逝ける　。それら選択肢が眼前に示された時、私はそれを選ぼうとするのではないか。懸念……と言いますよりは、興味……で御座いますようか。違いはありませぬか？」

「その通り。相変わらず察しがいいな、黎姫様」と、壁から背を離し、蝕は一步……黎姫へと近づいた。「で……、まだ死にたいか？

まだ　俺に、『夜岬』で、殺されたいと　そう願うか？」

「私が『夜岬』をむざむざと他の者へ渡してしまう方を選ぶと、蝕様は、そのような可能性を妄信してらっしゃるのですか？　だとしましたら、滑稽千万、御笑い種……。私は『夜岬』に見も知らぬ他人の垢を付けさせようなどと、毛頭思いも致しませぬ」

弱っていても、衰えていても、例え死期が近くとも　黎姫の執着は変わらず、覚悟は揺るがないようであった。蝕は視線を逸らさないまま、ゆらりと、もう一步。黎姫の方へ、踏み出す。

「どうやら決断に揺らぎはねえようだ。……だったら、俺にも断りようが無いな。のべっ幕なしに言葉で何処も彼処も塗りたくって

も仕方が無い。無駄なくそつなく滞りなく、詰まらないことは終わらせてしまおうか。ひひ、手前は死ぬぜ、お姫様。それで、良いんだろっ?」

もう一歩分。

蝕と黎姫の顔が近くなる。

「構いませぬ。望むところで御座います」

「魂消た度胸だ。しかし、後一つだけ、もう一度聞かせてくれよ」

あと一歩と言う距離で留まり、蝕はしゃがむ。座している黎姫を

……舐めずるように 逆撫でるように、目線を下から 上へ。

……ぞくぞくする……ぞくぞくさせるような、そんな目つきだった。

「どうして、俺なんだ?」

先日返答したこと。

他に人が居ないから。

『夜岬』が蝕へ向けたものだから。

……しかし、同じ返答を求めているのではないのだろう。

蝕は、その場凌ぎの言葉で誤魔化されたりは、しなかったのだらう。

「それは……」

「んーん?」

「関係の無いことで御座いましょう?」

「はあ? わけがわからねえな。ひひ、もう少し分かりやすく言え

よ」

俺はどうでも良かったんだぜ?

俺は妖怪だ。人間共のことなんざ、本当にどうでも良い。

それは、関係が無いと言うこと。

分かっているのに。

分かっていたのに。

「蝕様……。貴方様には、関係の無いことで御座いましょう。この城のことも、この家のことも、無論、私めのことも。一切合切最初から、この場に至るまで、何もかも」

黎姫は、突き放したように 言い切った。
蝕と黎姫とは……最初から最後まで、何も関係が無い。
何かの悪戯で、しばらくの間、一緒に居ただけだった。
何かの間違いで、気紛れのように、共に在っただけで。
今までも。これからも。いつまでも。

彼と彼女は、関係が無い。

そのことが何よりも苦しい。

「だから、それで？」

蝕は、なおも問い掛ける。

追い立てる、追い詰める。

「左様ならば、蝕様には私を殺す理由も無ければ、生かす理由も無く。それはつまり、どちらであっても同じこと。どちらも 同じで。差異が無いと言うこと。私の生も、私の死も、まるで等価と言うのなら それはさながら、暗中のようでは御座いませぬか。闇が内側……輪郭が無い。蝕様にとって、私は闇が内で巡り会いし顔も見えぬ誰かのように 何でも無い。何者でもない。なのに」
それなのに。

嗚呼、それなのに。

「私は、貴方様を好いてしまった」

愛してしまった と。

淡い灯にのみ照らされた、日中ですら薄暗いこの部屋へ 言葉
が、心の断片が、浸透してゆく。

「でしたら、これより完全な死が在りましようか……？」
「……………」

「己が好いた闇に、己が好いた刃で、何でもなく何にも無いのに殺される 死ぬしかない、殺されるしかない私にとって、これほどまでに心惹かれる 完膚なきまでの死が御座いましようか」

まるで『夜岬』よりも黒い瞳で。

黒くも、潤み、揺蕩うその瞳で。

真っ直ぐに、逸らしもしないで揺らぎなく、蝕と見詰め合う。

「私は死ななくてはならない。死ぬべきで、死にそうで、死に体で、死ぬしかありません。貴方様に、殺されなくてはならない。貴方様しか」

「蝕しか。」

「蝕様しか、私を、殺せないのです」

「……ひひ、良く出来た文言の連ね　小唄のように心地良いぜ。舌触りの良い回答だよ……」

軽く俯いて、くっくっくと、愉しそうに肩を震わせる。

それから膝を軽く叩き、蝕はまた立ち上がった。

「あいや了解、承りましたよ、お姫様。遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く　つてのが、俺の有り方、俺のやり方さ。後腐れなく綺麗に無残に締めくくってやるうじゃねえか。お生憎様にもとことん惨めなのがお似合い様だぜ」

壁際に近寄り、『夜岬』の一振りを無造作に手に取る。

「しかし、忘れてるな。言うも事欠いて……闇が内で巡り会いし顔も見えぬ誰か……とは。ひひ、俺の目玉は闇を見通すんだぜ」

銀の双眸を惜し気もなく煌かせながら、黎姫の方を向く。

意識せず　黎姫は、唾を飲んだ。

澱みなく近寄る蝕。しゅらりと刃を抜き、鞘を打ち捨て、黒めく切先を黎姫へと向ける。

流れるように黎姫へ顔を寄せ、左の人差し指で黎姫の顎を撫ぜ、くいつと目線を合わせて……息がかかるほどの近さで、誘うように口説くように、甘く甘く語りかけた。

「甘えたことを言ってるとは自分で思わないか？　哀れで可愛いお姫様」

「あ……っ」

くっくっ、

とん……、と。優しげに黎姫をそのまま押し倒し

ず、ぐり。

黎姫の左掌を、『夜岬』の刃で床に縫いつける。

「はああああっ!」

とくつ、とくつ、と、血が緩やかに流れ出した。

「俺の手で、『夜岬』に貫かれて死にたいんだってな。しかしこれはこれは、一体どうしたことだろう……二十と四つも刀があるぜ?

ひひ……だが、安心しろよ。どの『夜岬』で死ぬのか選べ　なんて残酷なことを、俺は言わない。しっかりきっちり、二十四振り全てでくまなく隙間なく　殺してやるよ。あんたもそれを望んでいるんだろっ?」

次の『夜岬』に手を伸ばしながら、蝕は黎姫のほうを向いた。

「む　むしばみ、さっ……ああああっ!」
とすん。

右掌を貫かれる。

がくがくと、黎姫は震えていた。

美しい顔を見難く醜く歪めて　頭の上から足の先までで。

顔は痛切に歪んでいる。

顔は恍惚に歪んでいる。

死への魅了。闇への羨望。

裏表の感情。

狂気に咽る。狂喜に咽ぶ。

言葉は要らない

闇が伝えてくれるから。

「ひひ……よくもまあ集めたものだぜ。二十四振り　ねえ。面倒臭いこと比類ない。『夜岬』を献上して、城を救う……?　馬鹿言っなよ」

「はっ、はっ、うあう、ああ……」
ずいっと黎姫に顔を近づけ　真黒い舌で、うなじの汗を舐め取る。

しつとりと、じつくりと、じりじりと　愛撫するまじり。

「あああ……」

「……そもそもこんな刀を集めようとしなきゃ、目を付けられることもなかったんだよ……。なあ？ 城が攻め入れられそうなのは、あんたが招いた業だ。家が潰れそうなのは、あんたが招いた罰だ。これだけの刀を集めるのに、どれだけの命が散ったと思ってる？ 財と労と覚悟が弄ばれたと思ってる？ 死を侍らせるってえ 意味が分かってて言ったのかい？」

黎姫が閉じてしまっていた瞼を開くと、すぐ其処に、
すぐ底で、底知れぬ銀色の輝きが彼女と対峙していた。

「ひう……」

射抜かれて、恐怖に身を竦ませる。

恐怖。

闇の恐怖。

やみのきょうふ。

何処までも暗い、何処までも暗い何処かへ、落ち行きそうな不安と恐怖。

そう。

初めに会った時から、彼女を惹き付けていたのは その、恐怖
「怖いかな？ 恐いかな？ 怖いか、恐いかな、怖いか、恐いかな？ こわ
いだろ？」

ざしつ。

どすつ。

三本目が右足の甲へ突き刺さり、四本目が左足の裏を血に染める。

「が、くう、あああああああ！」

これで、身じろぎすら取れなくなった。
床へと大の字に縫い止められた、黎姫。

まるで何かの儀式のような……どこかの国の聖者のような有様。
神秘的にして悪魔的。美しき姫を、血と刃が黒く、さらに麗しく飾
り立ててゆく。ゆく、行く、逝く。 過程。

まだ、二十もの刃が待ち受けている。

夜岬、やみさき 闇裂き、闇咲き。

「悲鳴の上げ方は教えてやっただろう？」

作業を停滞させる様子も見せず、蝕が両手に次の『夜岬』を握る。愉しそうだった。まるきり、愉しそうだった。

むしろ、全然楽しくなさそうなほどだった。

奇異な嘲笑は、人外の妖怪そのものだった。

こんな状況で巫山戯けているとしか、見えなかった。

豊かな表情の向こう側に、峡谷が如し無表情が在る。

「きゃつとか、はわわーとか、いやぁんとか、ちゅみみんとか

だぜ。ひひ……悲鳴を上げるような時に、そんな余裕は無いつてか。確かに、正しく。その通りかもしれないな。だが待て待て、結論を出すには早いぜ」

「い、いきiiiiiiiiiiii、あああああっ！ ひっ、きあ、あ あ
ずぶ、ずぶずぶ……と。」

両のふくらはぎに、刃が沈み込んでゆく。
真黒い牙が、肉を食い、味わうみたい。
じゅくじゅくと濃厚な血を滴らせながら。

「ほら、鳴けよ
ぞくり。」

「くっ、おおっ……！」

「鳴けよ、鳴けよ。鳴けよ」
ぞくり。

「ぎっ、ぎぎ、ひっ、ああああ！」

「泣き叫べよ、黎姫様。声続く限りさあ」

左、右と。

黎姫の前腕部がぱっくりと口を開き、刃を啜え、赤い涎を垂らす。

「ほら……」

「ひ、あ……」

つつ つう。

あらわになつた黎姫の、痛みゆえの脂汗で濡れ濡れた太腿に、刃

の先端を這わせ……

つぶつつ。

「ぐうつ！」

焦らした後に貫いて。

ぐちちいいい……っ。

ゆうつくり 捻る。

「は、わ、あ、が、が……あああああ きゃあああああああ
ああああっ！！！」

「そうそう その調子。お淑やかに。最後は姫様らしく行こうよ。ん？ くくく、ひひひひ、ここはあれか。お決まりの台詞を吐いてやるうか。お姫様 なあ、お嬢ちゃん。いくら泣き喚いても誰も来ないぜええ ってかあ？ 何のことはない、ちゃっかりと人払いをかけてあるからな。蝕さんに抜け目はないのさ。そら……次々行こうか。順番に順番に、拍子取って行こうぜ」

ずしやつ、ぐさ、ずんつ、どしゅ、どしゅつ。

その身に刀 『夜岬』を突き立てられる度、黎姫の体がびくびくと反応する。

痙攣するたび、細かな血しぶきが小さく舞い散る。

「あぐつ、ひぐつ、く、くうあつ、が、はああつ……！！！」

「闇に魅入られた人間ってのは、本当に手に負えない。何処までも何時までも、元々人つてのは愚かなものさ。愚鈍愚昧この上なく極まりない。闇を恐れて、夜を恐がり、光を蝕む冥府に脅えておきながら……それに魅入られる」

がっ、どずっ、ぶずっ……ざちゅつ。

遠慮無く。

容赦無く。

躊躇無く。

未練無く。

「ああっ、あはうつ、ぶ、ぶぐ……、うつ……！！！」

「闇とか 禁忌やらへの憧れなんてのは、己が罪行や醜悪さ、そ

れらへの後ろめたさから来るもんさ。魅入ってみせたり魅入られてみせたり、憧れてみたり羨んでみたりして、抱えてる潜在的、根本的な恐怖やらを克服　支配しようなんていう、浅はかな行為だ。堪らない気持ち悪さが、気持ち良さに転ずる瞬間、あるいは自分が何者になつたかのように勘違う。汚濁をきれいな刺繍みたいに飾り立て、腐つてくのか。……真実、そんなものはどっちだって同じだから　どうでも良い話だけだな」

そんな風に述べて。

ずつ、ぐつ、ぬつ。

弛まず突いて刺す。

「ひあ、あ、あうっ……………」

「蟲けらみてーに這いつくばって、襪褌切れみてーに刻まれて、滑稽千万もお笑い種もこの様除いて何を指すつてんだよ。あーあ、これがあんたの切願した望みだぜ。おい、嬉しいかい？　ああ、嬉しいだろ？　嬉しくなくても悲しいだろ？　悲しくなくても辛いだろ。辛くなくとも痛いだろ？　痛くなくとも　恐いだろ」

既に、二十一本もの刀が、黎姫を蹂躪していた。

一人の身体の上に、所狭しと刀が乱立している。

無論、致命傷は幾つも在れど、即死に至るような場所は避けられているようだった。

それでも、とうに死に絶えていて良いだけの傷なのに。

『夜岬』の怨念に、生かされているとでも　言うのか。

「ひひ、針鼠か山嵐みたいだぜ、お姫様。それよか剣山つて描写した方が、適当か。適当、適切か。嵌り過ぎて笑えねえか。……ひひ、そう言や他の名前と呼ばれるの、嫌がつてやがったなあ。今度から剣山さんと呼んでやろうか？　いやいや、ちよつとまあ、格好悪いかね。はっ、つーか死んだら呼ぶ機会もねーわな」

美しい、人を真似ただけの顔で。

刃のような瞳で冷ややかに、黎姫を見下ろしながら。

どうしようもなく冷ややかに、見下ろしながら。

冥府を歌う舌を、転がす。

冥府へ誘う刀を、突き刺す。

ずさっ。

「ひあっ……ひああ、あ………ああ………」

………これで、二十二本。

「大分疲労も蓄積しちまったみたいだな。随分大量に血も溢れてるし、声もろくに出ねーか。呼吸すら困難そうだな。はぁん。弱いなあ、しょぼいなあ、せこいなあ、人間。……脆いなあ、お姫様。もうちよつとちゃんと死ねないのかい？ まるで真赤なお池に浮かんでいるみたいだぜ。」

長い長い黒髪を広げて、確かに彼女は、この世のものとも思えない。

死んでいるのか？

生きているのか？

まだ、死んでいないだけなのか。

「あ、ああ………」

ぱくぱくと、口を動かす黎姫。

顎を動かす動作すら、緩慢に。

「んー………？ 丘の上の魚みたいになつてねえで、きちんと見えよ。ひひ、てのは冗談 ああ……。ま、残り二振りだしな。成る程、心の臓と額の真中。絶対的急所を確実に、二箇所同時に美味しくどすつと 突き刺して欲しい、かあ？ 構わねえよ」

する……り。

二振りの刀を両手に構え 二振りの闇夜を両手に構え。

淡く光を放つ銀の両目を、日と月を隠すように………持つ。

最も多くの命を喰らって来た、深黒の二振り目。

最も古く命を嚼らないで来た、薄紫の一振り目。

併せて一突き予告が如く、刃を下へと向けて。

そうして、舌を剥いた。

おそろしく。

と、こじで。

「……………あ、ああ……………り……………あ……………」

黎姫は、

最後に何かを言おうと、空気の抜ける口を動かす。

「この上何か言うことが在るのかよ。ふうん……………何処まで我俣なんだい、お姫様？」

椰揄しつつも、聞こうとする蝮。

彼女は、言う。

「……………あ……………、ありがとう、御座いま……………」

「違うだろ。違うだろうがよ、手前が言う言葉は違うだろうがよ？」

ああああ？

しかし途中で遮った。

鋭く齧しく、遮った。

死に逝く覚悟を遮った。

「これからあんたは、完膚無きにまで死ぬんだろ？ そのつもりだったんだろが。死ぬよ。死にやがれよ。殺され尽くせよ。そんな大往生みたいな言葉を吐くんじゃねーよ。そんな、大団円みたいな台詞を言うんじゃねーよ。最後の最後だぜ。最後の最後の最後の最後だぜ。死ぬ時くらい 謙虚になってみるよ、暴君お姫様」

「……………くふっ……………」

血を吐きつつ、押し黙る。その剣幕に、押し止まり、目を閉じる。

そこに見えるのは、今までのこと。

走馬灯？

いや……………単なる後悔だ。

今まで会ってきた、全員に謝りたい。

そう、眼前で刀を構える彼にも謝りたい。

愚かな私を殺してくれる彼に、謝りたい。

ごめんなさい。申し訳御座いませぬ。

……だるうか？ 最期の言葉は……。

「それも違うぜ。俺に謝ってどうすんだよ？ あんたに無礼を受けた覚えも、あんたへの恨み辛みも、金輪際少しも微塵も欠片も俺にはねえよ。関係無いんだからな。自分で言ってたろう？ 絶無にして皆無。虚無だ。虚ろで無だ。無駄だ。んん？ ほら、在るだるうが。何か在るだる。言つべきことが」

謝るのではなく。

謝るくらいなら。

何だるう。

一体何が、彼女に在ったと言つのだるうか。全体何を、言うことが彼女に在るのだるう。

そもそも、彼女に何が在った、とでも？

最初から、間違っていただけではないか？

弱い身体。

狭い世界。

暗い部屋。

少ない人。

存在してたことが、間違いではないのか？

……。

ああ。

ああ、嗚呼。まさか、そんな。

わかってしまった。

わかってしまった。

何でこんなに痛いんだらう。何故痛みを感じるんだらう。何でこんなに……全身切り刻まれて全身刺し貫かれて、心が縫い止められ心が縫い付けられて、魂が傷を叫び魂が血を吐き 私 が 恐怖する ほど に。

私は生きてるんだらう。

死んでなかったのだらうか。

死ぬのが どうしようもなく こわい。

「あああ、や、や、やめて……。しにたく、死にたくない……！」

私は死にたくなんか無かった！

あまりにも自然にその言葉は口を突いて出た。

しかし。

遅過ぎたのだ。

「ああ。そうかい」

ず、ずん。

確実に。刃は。

夜は。冷たく。

姫の心臓 心を深黒が。

姫の眉間 魂を薄紫が。

貫き壊した。

「あ……………」

事切れる。

死果てる。

身崩れる。

朽落ちる。

「……………ひひ」

口を歪めず、声だけでそう笑い……蝕は、その場を去った。去った。

後に残されたのは、黎姫だった骸。

妖刀「夜岬」二十四振りが突き立てられた

屍体。

夜は終わらず、黎は明けずに結んだ。

(結、終)

四切り捨て（よじきりすて）（後書き）

かくして物語は結びます。

わなびまっ？

五拭い拭き（ぬしぬぐいぶき）（前書き）

結んだ終わりを、もう一度終わらせるべく。
語られるべきではない、その後の物語として

「夜を見た先に。」、最終章。

五拭い拭き（ぬつぬぐいぶき）

始まった物は終わらせなければならぬ。
明けぬ夜は無く、暮れぬ日も無いゆえに。
抜かれた刀は納められなければならない。
終りを繰り返すことが、続くと言う意味。
つまりそれが、生きると言うことならば。
朝から夜まで二十四つ、飽きることなく振るい続けよう。
さて。

生まれたての、始まったばかりの彼女は、
一つの終りを見届けるため、誰かを待ち続けていた。

* * *

場所は日本の何処か。時間は戦国の何時か。
もう少し細かく言えば、陽気な昼下がりである。
一人の少女が山の中の街道脇の切り株に、ちよこんと腰掛けていた。

それは随分と……いや、ずば抜けて美しい少女だった。思わず見
蕩れてしまいそうな、美しさ。白く透ける肌理細やかな肌、黒く長
く麗しい髪。小さな唇は、鮮やかに赤く。ほっそりとした体つきで、
全体的に儂げな雰囲気漂わせていた。

もしも……『夜岬』が二十四振りを何故か紛失してしまい交渉に
失敗した拳句滅ぼされてしまった彩為家と言う一族を知っていて、
且つその家の最後の姫君を一目でも見たことがあるなどと言う稀少
にして稀有な者がいたとしたら この少女の容姿を見て、驚愕し
ながらこう言うことであろう。

生き写しのようにそっくりだ、と。

唯一違う点を挙げるのなら、その目つきだけだろう。

かの彩為家の姫君　黎姫は、穏やかそうな目つきであったが……この少女は、それとは対称的に鋭い　深淵の如く漆暗の眼を。ともすると、喰らいついてきそうな、少々恐ろしい目をしていただけだった。

少女は所在無さそうにしばらくしていたのだが、やがて少女から見て右方の街道延長上に誰かの姿を認めると、何やらわくわくしたような楽しそうな表情となった。駆け出して名乗りを上げたいのを必死で我慢して、声をかけてもらおうのを待とう……と言っような。嬉しそうに笑ってしまいそうになる顔の筋肉を、少女が一生懸命押し殺していると……段々と、その人影が近づいてきた。

誰であろう。

他ならぬ、日蝕と月蝕の妖怪　蝕であった。

相変わらず、のらりくらりとのおんびりと、何を考えているのか何も考えていないのか分からないような面持ちで、何処へとも知れず歩いているようだった。てくてくと、少女に近づいてくる。

てくてく。

わくわく。

てくてく。

わくわく。

てくてく。

……てくてく。

素通りだった。

少女の方を、一瞥すらしない蝕だった。

「……って、くおらあーっ！」

怒号を上げながら立ち上がり、少女は全力疾走、蝕を追いかけた。蝕はのおんびりと歩いていたので、すぐに追いつく。隣に並んで、顔を覗き込んでみる。

じいっ。

ついつ。

露骨に顔を逸らされた。

ので、顔を拳で殴った。

「痛っ！ 何をしゃがる！」

「何をしゃがるはこっちの台詞であるぞ！ 通りで初対面の人間とすれ違つておきながら、用も無いのに挨拶をして世間話に花を咲かせぬ人間が何処にいる！」

「そんなことする奴のが何処にもいねえよ」

「なっ……、うむ。それもそうか」

少女はこくこくと、一人頷いてみせる。

のつけから突っ込みを入れさせられて、呆れ顔の蝕であつた。殴られたところ 頑丈な蝕であるし、少女は非力であつたので、実際大したことはない を軽くさすつてから、少女に言う。

「用が無いのか？ 無いんだな？ 無いんだよな。そうだよな。うん、じゃあ俺はこれにて。壮健で。お疲れ様でした。御機嫌よう。さようなら」

一息で言い切つて、さつさと去ろうと したところを止められた。

「こらっ！ 私を置いて何処へ行くつもりだ、父上！」

「……はあ？ ちち、うえ？」

父上。

それは普通に考えれば、父親へ向けた呼称である。

少女が父上と言つたら、何処かの母君との間に自分を授かつた、父親のことを呼んでいるに違いないのだ。養子と言うことも在るだろうが、血が繋がっているかどうかだけで、厳密なところ大差は無い。

そして勿論、蝕は誰かと夫婦になつたこともないし、間に子をもつけたこともないし、ましてや面倒臭い養子を取つたこともない。つまり、父上などと呼ばれる筋合いは無い。従つて、即座に少女の認識の訂正を試みた。

「おいおい、待ってくれ。俺には子なんかいねえよ。妻も娶っちゃいない」

「何を言うか！ 確信子かくしんこかもしれぬではないか！」

「どうしてそんな自信たっぷりなんだよ……」

「おとなしく頓知とんちするが良いぞ！」

「認知はしなくて良いのかよ……俺は一休さんじゃねえんだぜ」

蝕は溜息を大仰について、いかにも仕方がないという風に、やつと少女の方をきちんと見遣る。どうやら、相手をしなくては付き纏われると思っただけらしい。

「で……。何だよ、妖怪小娘」

妖怪小娘。

少女のことを、蝕はそう呼んだ。

「おおっ！ 流石は父上だな……良くぞ見抜いた！ いかにも私はアヤカシだ。そう

姿

夜雲蛭月秀作よるくものひるつき・妖刀アヤカシガタ・夜岬よみさきが二十四振りの生まれ変わりし

だ。つまりは、黎姫の意志を受け継いだ、父上の娘だな！」

「だから父上じゃねえ」

「我輩は刀である。名前はまだ無い！」

「待て待て待て。乗りすぎるな」

「ふむ、考えてみれば苦沙弥くしゃみと蝕とは語感が似ているな！」

「最後の『み』しか合っていない上に、良く分からない方向へ掘り下げるな！」

「父上がそう言うなら……」

「父上ではない」

「なら止めぬ」

「……ああ、もう良い。好きに呼べよ……」

面倒臭くなっただけだった。

少女の方とは言えば、「やったぞ！」などと喜色満面である。

どうしてあの大人しくお淑やかだった黎姫の意志を受け継いだはずのアヤカシが、こんなに元気一杯天真爛漫であるのか……蝕は頭が痛くなる思いであった。

……とは言え、余り気にしすぎても仕方が無い。しばらく懽然としていた蝕だが、やがて表情と機嫌を直してしまった。面倒臭がり屋である彼は、実害がなければそれで良いと……割り切るのは早いのだ。多くは望まない。可愛い妙齡の女性と、美味しい食事の他に。

少しすると、一通り喜び終えたのか、少女が話題を振ってきた。

「うん……。やはり父上は、最初から気付いていたと見えるな」

蝕の方も、普通に応じる。

「何についてだよ？」

「私が『夜岬』の妖怪であること……並びに、私が『生まれている』であろうことに、だ。父上の目がいくら闇を見通し、アヤカシと人を見分けるとは言っても、その背景にある事情を即座に看破せしめるほどのものではないだろうからな。言うことは、予め私のことを予想していたのであろう」

どうやら、まともに会話が噛み合い始めたようである。

蝕は愉快そうに皮肉気に、重ねて尋ねる。

「ひひ……。何故、そう思う？」

「ふふん、それを訊くか。自明なことだな」

「説明してみろよ」

「家族愛の成せる技だ！」

はたいた。

さっきのお返しだった。

額を押さえて、恨みがましい目で蝕を見る少女。

「痛いではないか！ ほんの些細な茶目っ気に対して、そのように手を上げるとは何事ぞ！」

「五月蠅え。折角話がまともに進められそうになったところで、早

々に腰を折るからだぜ。つか、真面目な話をしないんだつたら本当、なんであんなところに居たんだよ。俺を追いかける意味合いとか、全然無いじゃねーか」

「うう……わかったぞ」

少女は頷いた。

二人は歩調を揃えて、人もまばらな山中の街道を歩いて行く。草木が茂っているものの、空は今日も青く澄み渡っているので、充分に明るい。むしろ、暑すぎず涼しすぎず、過ごしやすい適度な気温と湿度で、物見遊山にでも来たかのような心地であった。

会話は続く。

「うむ……まあ、そうだな。まず、私が黎姫　つまりは私からすれば母君だな　と瓜二つであることについて、何も疑問に思う素振りをしなかったところだな。加えて、私のような可愛い女子が道端に居たにもかかわらず　気も軽ければ口も軽く、美しいおなごを見れば一も二も無く矢も縮み上がりばかりに疾く声をかけ口説くほど好色なはずの父上が、まるで無視するように私の前を素通りして行こうとしたところからだ」

「……とりあえず。俺はそこまで好色じゃないし、口も軽くなーよ……。人聞きの悪いことを好き勝手言いたいようにほざくんじやねえ。それに、まるで何も、そのまま無視して前を素通りするつもりだったんだけどな」

「何故だ！　娘を見捨てるつもりか、この鬼畜父上！」

「そこまで言われるようなことかよ」

「きちうえー！」

「誰だよ。無闇に言葉を略すな。面白くも無い冗談を飛ばすな」
「きゃいきゃい騒がしい少女を軽く制して、蝕は話題を戻す。」

「で……。俺は面倒臭いのが嫌いなんだよ。予想できていた、って言うのはその通りだが……だったら、それはそれで、再び係わり合いになるうと思いはしない。それだけのことさ」

「ふむ。そうか」

「ああ、そつだ」

蝕の言葉に彼女は少し納得したような様子を見せたが、少し考え込んでから、首を傾げるようにして再び問いかける。

小首を傾げたその仕草は、これまた可愛らしいものだった。

「しかし……大方のことは父上の思惑通りに運んだのだろうか？ 当然この状況も、父上の望んだもの と言うよりは、最も理想的な形……であるはずだ」

「何を言わんとしているのか、俺にはさっぱり見当もつかないな」
蝕の態度は変わらない。依然として、人を小馬鹿にしたように応じる。にやにやとしながら。

そんな様子に、少女は肩を竦めてみせる。眉を寄せて、溜息なんかつきながら。

「やれやれ……父上は素晴らしいお方だと、娘である私としては基本的に鼻高々たる思いではあるのだが、その他人を嘲笑うかのような素直ではない態度だけはいただけじゃない……」

「俺が素晴らしいって？ 何の勘違いだよ。ひひ……」

「むむむ。全く、仕方がないな！ ここは不肖この私が 『夜岬』及び黎姫を取り巻くこの一件について、謎解きの如く綺麗に説明し通し、父上の腹の内を丸裸にしてしんぜようではないか」

隣を歩く蝕の方を向き、不敵に微笑んで。黎姫の容貌を持つその少女はびしりとそう言ったのけた。

「ほーう。ひひ。やれるもんならやってみるよ、妖怪小娘」

対する蝕、こちらも不敵な微笑を浮かべて、少女を試すようにそう応じる。

ちゅちゅちと 少女は一指し指を、余裕ありげに振ったのだった。

「順に行こうではないか。さて」

「まずは……、あの妖怪もどきが来たところからだな。宵丸殿を殺

した悪逆だ。あの時、父上は快刀乱麻を断つが如く見事に妖怪を叩きのめし、名の如く蝕み殺して下さったわけだが、同時にあることに気付いたのだろうか？ それは、『夜岬の一振りでさえ、ここまで妖怪の一匹をも軽々産み出すほどの怨念と狂気とを、内に孕んでいる』……と、言うことだ。それが二十四振りも揃ってしまった場合……はたして、どんなにも凶暴粗悪で手におえないアヤカシが生まれたものか、分かったものではない。さてはて、どうしたものか……。そう、父上は考えたのだろうか？」

一度言葉を切って、蝕の方を窺う少女。

蝕は何処の吹く風、と言ったような顔をしていた。

「あー。ほおお。成る程。いやいや全然気がつかなかったな。雪の上の白兔みたいによ。ははあ、そいつは確かに大変極まりないことだぜ。一大事だな」

「むむう、とほけるか。……まあ良い。そして、もう一つ父上が気になったであろう点がある」

「へえ。俺は意外と神経質だからな。あっちもこっちも隅から隅まで、気にならないところのほうが無い位なんだが、もしそうやって一つ上げるとしたらどんなところだろうな。俺には皆目見当もつかないぜ」

「気になったというか、気掛かりであった点だな。母君の『アヤカシになりたい。アヤカシに生まれたかった』と、言う……素朴で、それでいて純粹だった、強い思いだ。そんな話をしたはずであろう？ 何度か、あるいは何度も。その時、父上は無理だと答えた。よしんば成れたとして、ろくなものではない」と

「そんな話もしたっけな。すっかり忘却の彼方、記憶喪失もさながらだったね」

「……しかし、母君はそれでもなお。それでもなお、アヤカシになることを望んだ。母君の命は、あの時既にもう長くなく、そろそろ死んでしまってもおかしくなかったからな。以前は『夜岬』が揃えば死んでも良いと思っていたようだが……。まあ、それは置いてお

いても。……父上は、それをどうにか叶えたいと思ったのだろうか？
くすりと魅力的な笑みを浮かべて、父と慕う蝕を見上げる。が、
蝕は心外極まりないと言った風に、それを否定した。虫を退けるよ
うに、手をひらひらとさせる。

「おいおい。おい、おいおい、おいおいおい。何言ってやがるんだ
よ、やめてくれ。気持ちが悪い。ひひ……俺はそんなにまっとうな
奴じゃねえぜ？ 知ってるだろが。そんな風に情に揺り動かされる
わけねえだろうがよ。そんな鬱陶しくも馬鹿馬鹿しい願い、次の刹
那には忘れちまったださ」

少女はそんな様子を一笑に付す。

「ははは、強がりはやすのだな父上。父上の心づもりなど、つるつ
と御喉越おんのどした」

「……俺は切麦うぐいすかなんかか」

「いや、まるつと御見通しだと言いたかったのだ どんと来い頂
上決戦！ なんてな！」

「意気込みは認めるが、時代的に突っ込めねえよ！」
何の話をしている。

「こほん」

とんでもなく逸れかけていた話を、少女は咳払いで修正する。

なんだかんだ言いつつ、二人の会話の調子は良いようで、油断す
るとどうでも良い雑談の方へ逸れて行ってしまおうだった。心を
強く持ち、真面目に真っ直ぐ話を続けることを刻み込まなければ、
二人とも迷子になって戻ってこられないだろう。

はらはらだ。

「……ともかく、だ。父上はその両方の問題を、一石二鳥一挙両得
に解決する方法を取ったのだ。それなりに悩むところも、在ったか
もしれないがな。最終的に、母君の強い意志に押されたと言っこと
であろう。つまり 『夜岬』二十四振り全てを母君の体に突
き刺し殺した」

「……んん、そうするとどうなるんだよ？」

いかにも発想の飛躍についていけない、と言った風な様子を見せる蝕。

それはここが、話の要点であることを示していた。少女の方もそれを理解しているようで、真剣な面持ちで慎重に、言葉を繋いでゆく。

同時にこれは、『何故自分が生まれたのか』と言う答えになっているのだから。口に出し、言葉として織り綴るのに、幾許かの緊張があるのだろう。

「『夜岬』二十四振りに詰まった積年の因縁と怨念……それらが同時に人間の『死』に立ち会えば　つまり、同時に同じ人間の非業の死を、無念の想いを喰らって　妖怪にならないわけが無い。アヤカシを生まぬはずが無い、のだ。そして、だから。父上は母君にああも残酷に『死』を思い知らせたのだ」

「……………」

「『ありがとう』などと満足して死なれてしまったのは、その想いは残らず成仏するだけだ。『すまなかった』などと謝って死なれては、その想いは謝罪でしなくなり　夜岬に詰まった禍禍しい想いを導くには力不足だ。『まだ生きたりない』『もつと生きたい』……！　そう……それは『死ぬことへの恐怖』。未練の想い　それこそが、必要だったのだ」

黎姫の　彼女の、最期の言葉。

最期に抱いた、最期に気付いた、己が心。

死んでいったのではなく、

生きてきたのだと言うこと。

……それに思い当たった刹那、彼女は死んだ。

「強い、生への執着。強い、死への拒絶。強い、強い、概念。それらを抱き、そして最期にその想いを嚼つた　魂ごと喰らった、妖刀……アヤカシガタナ『夜岬』二十四振りは、母君の、黎姫の純粹で単純な思念を核にアヤカシとなる。　条件が、揃ったのだ」

「俺がそれを意図してやったとでも？」

「でなければ、あんなに最後の問答はしなかっただろう」

「はん、そんなん気紛れかもしれねーじゃねーかよ。俺は他人様を苛めて見下すのが大好きなんだからな。たまたま、苛める要素を見つけちゃっただけ　だとしたら、どうだよ」

揚げ足を取るようにそう言う蝕。

しかし少女は怯まず、すまして告げる。

「何、証拠が要ると言うのなら、もう一つ在るぞ」

「ほお。言ってみるよ」

「簡単なことだ。母君は夜岬で貫かれて死にたい、とは言ったが

『夜岬』二十四振り《全て》をこの身体に突き刺し殺してくれ…
…などとは一言も述べてなかったのだ。つまり、これは父上が自らの判断で行ったと言うこと　だが」

「だが？　俺にはそう聞こえた　全ての『夜岬』を使ってほしいのだからと、そう解釈した　なんて可能性は無いのかよ？」

「ふふ、無いのだ。何度も繰り返言われてることで、先ほども父上自身が言ったではないか。『俺は面倒臭いのが嫌い』　とな。

意図も意味も無いと言うのに、むしろ黎姫　『夜岬』に強い執着が在った母上を、喜ばせてしまうかもしれないと言うのに、自ずから面倒な方を父上が選択するはずが無いのだ。　総じて、私という

アヤカシを生んだのは、父上の目論見どおりであったと言えよう」

蝕はそれでも、笑い飛ばしてみせた。

いかにも馬鹿馬鹿しい例え話やら噂話やらを聞いてしまったかのよう。

「ひひ。俺はただ単に、あの傲慢で一人善がり自分勝手なお姫様が、ちいっと気に食わなかったただだけだぜ。死ぬなら死ぬときらしく、惨めだったらしく死ぬべきだったんだよ。人は闇に死ぬべきだ　宵丸だって、惨めに死んだだろうが」

「……良い良い。言わずとも分かることはあるからな、父上。うむ。まあ、そのようなわけで、晴れて『夜岬』二十四振りに籠った積年の積年の積年の　恐ろしくなるほどの因縁と怨念の蓄積は、母君

の柔らかく優しい心という型に流し込まれ、暴走することなく無事私と言うアヤカシに、成ったと言うわけだ。めでたしめでたしであるうー！」

胸を張って、高らかに笑って見せる少女。とにかく元気よく、勢いばかりだ。

蝕は適当にあしらうようにした。

「あー、そうかい、良かったな。おめでとさん。で、結局言いたいことは？」

「ふふ。父上の言葉は『遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く』」

……だったか？

ここでふっと、蝕は遙か遠くを見つめ、懐かしそうな顔をする。

「そんなことを言っていた頃もあったな……」

「遠い過去の話なのか！？ やめてしまった口癖なのか！」

「俺は古い口癖を捨てるのを厭わない男だぜ？ あの頃は俺も若かった。いや、幼かったな。成長すると共に、遠慮無く容赦無く躊躇無く未練無く 俺は新しい口癖に乗り換えたんだよ」

「嘘をつけー！」

「まあな」

ただの冗談振りだったようだ。やはり親娘のように仲が良いことは、否めないだろう。

気付いているか気付いてないかは、ともかく。

「しかし。ここに至れば、結局のところ だ。深謀遠慮が有り、情け容赦が有り、戸惑い躊躇が有り、そして未練執着が必要だったと、言うことであるう」

「綺麗に纏めようとしているところ悪いが、そいつはどうかな？」

「綺麗に纏めて見せたというのに、その態度もどうかかな？」

「……綺麗に閉じればいいってわけじゃねえんだよ。有終の美なんて味気ないだけだぜ？」

「ならば父上、何処が違うのか指摘すればよいではないか」

「言っねえ」

「父上の娘だからな！」

「……………はん」

蝕は、さもどうでも良さそうに頭を掻く。

しばらくの間両者とも無言で、景色や空気を楽しむかのようにのんびりと、連れ添って歩いた。さくさくと二人分　二つのアヤカシの足音が、木々や土、山の中へと染み込んでいった。

適当に間を置いたところで、ゆっくりと一回瞬きをしてから、今度は蝕の方から口を開いた。

「……………あー……………まー、そうだな。だいたい六か五割くらいか」

「何がだ？」

「手前の謎解きとやら、その出来栄が、だよ」

「な、一体何処が違うと言うのだ？」

「あちこち違うが……………決定的なところは、その理由だな。理由。確かに黎姫を利用して、『夜岬』の妖怪を仕立て上げちまおうと考えるの所業ではあったが……………俺は本当に、あのお姫様の願いを叶えようとしていたわけじゃないんだぜ。ただ　利用可能だったから、利用した。それだけだ」

「……………むう」

少女は眉根を寄せて口を尖らせる。

少し呆れたように、半ば諦めたように、蝕は話を続ける。

「納得いかねーならそれでも良いけどよ……………。とりあえずさ、『夜岬』の最後の一振り　一番最初に創られた、初の名を冠する『夜岬』の中の『夜岬』。そいつを持っていたのは　ずうーと腹の中に隠し持ってたのは、そもそも何処のどいつの何方様だったよ？」

「むむ？　父上　神喰蝕、そのお方であろうが。数字も振られていない、素のままの『夜岬』。禍禍しく呪われた刀の中で……………唯一、血を吸うことの無かった一振り」

「ああ。俺だ。俺なんだよ」

「うん？」

「いや、お前のことだろうが……………自分で気付けよ。……………ま、良いか。

考えてもみるよ、そもそも人を斬るために生まれたのが刀だぜ。『夜岬』もその例に漏れない。むしろ妖刀なだけに、よりその概念が強いとも言える。……だったら。創られてからずっと、一滴も血を吸っていない刀なんてのは、かなりの欲求不満じゃねーか？」

「むう。確かに。私も何か物足りない　　と言うか、何やら喉が乾いているような、腹が減っているような気分であるのだが、それはそう言うことだったか」

血が必要だったのだな。

しれつと呟く妖怪小娘。

生まれたばかりの妖怪である彼女は、まだ完全に自分のことを把握しているとは言い難いのだ。

「……で、だ。普通に考えたら、二十三振りの『夜岬』に詰まった怨念がアヤカシとなる際　　核になる想いつてのは、その『欲求不満』とするのが順当だろうが。なんてったって、『夜岬』の初志を抱いてる刀の欲求だろうからな。しかも欲求不満の原因は、この俺さらに……そいつを手渡されたことを、俺は随分の間忘れてたんだ。こんなアヤカシの標的つつたら……」

「父上だな」

「あるいはあの場　　二十三振りが黎姫の下に揃い済みつてえ場のことだが　　あの時に俺が『夜岬』が一振り目を渡すことなく、すつとぼけて隠し続けてたとする。だとしても、結局その二十三振りがほつたらかされてアヤカシに化けちまったら、第一目的は黎姫やら某妖怪やらの如く、二十四振り揃えることだったろうな。その場合の標的つても恐らく……」

「……父上だな」

指を指されて、蝕は気だるげに上を見上げるようにする。

「俺なんだよ。おいおい。一本分の怨念……しかも中途半端な形でさえ、あれだけ　　宵丸を惨殺しまうほどの暴虐ぶりなんだぜ？」

二十三振り分……いやいや、下手したところで二十四振り分まとめて向けられてみるよ。ひひ……。危険至極極まりねーだろーがよ」

「成る程……。だから」

「そう。だからだ。その怨念呪念の行く先矛先、流れる先を、別に設ける必要があったわけだ。それこそが、あの彩為家の黎姫様だった。ってことだ」

「ふうむ……」

少女は腕組をして、話を吟味する。そう言えばといえはそう言えば、始めから不自然なところが在ったことに気づいた。それは先ほど蝕に対して少女自ら指摘したところで、黎姫も指摘した部分であった。話が進むにつれ、恐らくはそれこそ蝕の狡猾さであろう。有耶無耶にされていた部分だ。

「そう……であったか。初めて父上と母君が会った際、指摘された部分ではあったな……。すっかり忘れて、いや、誰もが忘れさせられていたわ。迂闊、迂闊」

「そ。蝕さんは善意の人間。じゃあ、ないだろ？」

「まあ、純粋な善意の者ではないと私も思うけど」

苦笑してから、そのこと……通して不自然だった部分をずばり、指摘する。

黎姫の口調を真似て。

「『ただかだか私に会うと言う条件のみで、夜岬を譲ってくださいたその、理由』……。だな。これに対して、父上は明確な答えを出していないかったのだ。いくら母君が美しいとは言え、それだけで『夜岬』をただ同然で献上したり、十幾日もの間彩為に留まったり、おまけに宵丸殿と稽古をしたり、襲来を撃退したり。するのは不自然であった。まるで父上が、善い人間であるかのような。無償奉仕のようだ。即ち」

「初めから俺の狙いは、『夜岬』の怨念回避にこそ、在った」

ひひ、と笑みを漏らして、蝕は言う。

「十七振り目に会った時点で既に、俺は『夜岬』のことを思い出してたし、その危険性についても考えてたのさ。直後に宵丸のヤローに襲われたしな。どうにかしなくてはいけない……と、頭をひねっ

て悩み通してるところに、黎姫の名が出てきた。おあつらえ向きだろ？ 渡りに舟にもほどがある。……宵丸殿との稽古試合は、奴の実力を測るため。しくじった時に、次の手を打てるようになる。妖怪撃退は自分のためだよ」

「うゝむ。うむむー、ぬぬー」

「どうしたよ、唸って。お前は犬か？」

「わんつ！ がうがう、ぐるる、わうーん！」

「犬語は知らん」

「きゃうう……」

「可愛いじゃねえか」

ぺし、と少女の額を小突く蝕。「おう」と我に返ったような様子を見せる。

頭を軽くふるってから。

「……しかし、本当にそのような打算だけだったのか？ 父上は？」

訊きたいことを口に出した。

はん……と、阿呆らしそうに息を吐いてから。目の前の少女に向けてではなく、誰でもないところへ向けるかのように、蝕は言う。

「余計な期待を抱かせないためにも言っておくが、それだけだったよ。……ま、宵丸殿は気の良い男だったし、珍しい才覚と一途さ……

……そして愚鈍さを持ち合わせた男だった。黎姫様は何より美しく可愛かったし、悲痛な賢しさがあつた……あんな状況じゃなきゃ、俺好みつてくらいにはな。俺は最初から最後まであいつ等のことを打算的に自分のために狡猾に、利用して貪っただけではあつたが

そここのところを除いても、会えて良かったと思ってるよ」

「……ふふふっ」

とても嬉しそうに、少女は微笑みをこぼした。

そして蝕の腕に絡みつく。自然な動作で。

凄く迷惑がられた。

「離れる」

「いやだ」

「離れる」

「いやーだー」

「隣を歩いてもいいが、離れる。さもないと口を利いてやらねーぜ」
「……むう！」

いかにもしぶしぶと言った風に腕を放して、少女は「しかしな」と、話を再開した。

「母君は、ずっと自分が人間の出来損ないであるかのように、感じていたのだ。生まれも、病も、立場も、美貌も、全てそれらを裏付けるようなものだったろう。それゆえ『夜岬』を愛し、アヤカシに憧れた。……しかし、父上の意図が何処にあるうとも 最後の最期で、父上はそんな母君を救ったのだ。痛みを伴い、悲しみを絞ったような救いであったが、死の刹那に思い知った。そうでなければ……私がこうまで、娘として生まれることは無かったであろうよ」
「だとしたら、結局面倒臭いことをしちまったもんだ。黎姫が俺のことをそんなに慕っちゃう てのだけは、予想外だったな。奇想天外だぜ」

「天外な。まあ、言うではないか。天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」

「いや、まだ言われてないと思うが……」

「天の内に人を作ったんだな！」

「……漢字で見たらそうかもしれないけどよ」

「内の内にも人がいるぞ」

「確かにな。だが、入れ子みたいなややこしい話にすんな」

「内の内の人はちょっとはみ出しているがな！」

「はみ出してるのはためーだよ！」

時代に収まってくれ。

軽くぱん、と両掌を合わせて、蝕は言った。

話を括るように。

「さあて。大体話すべきことはこれで以上じゃねえか？ あんまりそんな入り組んだ話でも、感動的な話でもなかったとは思いますが」

言いそびれたことは回収し終えたと思うぜ。ひひ……。そろそろ括りに入って良い頃合だろうと、俺なんかは思うわけだが。しかしまあ、振り返ってみて面倒臭いを塗り重ねたような道理だったぜ……。蝕さん大活躍じゃねーか」

「活躍と言うよりは、暗躍のような気もするぞ。暗中飛躍。『夜岬』に相應しい　とまでは言わぬが。しかし、言いそびれたことな…」

「……」
ちよつと考え込むようにしてから、少女が指を鳴らす。

「びんつ。と、小気味良い音。」

「あ、そうだ。父上」

「あん？」

「父上、名をくれ」

「名？」

首を傾げる蝕。

名と言えば、名前と言う意味で、つまりは少女のようなこの妖怪を示す言葉　だろうが。そんなの、考えてやるのも面倒臭い……と言わんばかりの蝕であった。少女は父と慕う相手のそんな様子を見て、頬を膨らませながら、めげずに催促した。

「私に名をくれ」

「『夜岬』で良いだろ」

「嫌だ。私は母君の魂と記憶を受け継ぎ生まれ変わったのだ。アヤカシとして生誕したのだぞ？　いつまでもそのような刀に銘打たれた、禍禍しい名を名乗っていたくはない」

「……じゃ、黎姫ならどうだよ？」

「それも嫌だ。母君の心を受け継いでいるとはいえ、私は父上の手によって生み出された、『夜岬』の化身だ。母君の名を名乗ることは出来ない」

「難儀な奴だな……」

「だから名をくださいなれ、父上。私だけの名だ。名付けておくれ。ちーちーうーえー」

四と六で、掛けて二十四になるだろうが。何と驚き、蝕さんの『むし』部分にも掛かっている出来映えだ」

「……おおお！」

「紫色の霧つてのも高貴な感じだし、それこそ『死』と『斬り』にも通じる。妖刀っぽいし。即興で考えたにしちゃ、似合ってる感じだと思うが　ひひ、うん？　気に入ったかよ？」

「うむ、うむ！　気に入ったぞ父上、流石だ父上、お見逸れ行つたぞ！　私は今から紫霧と名乗るぞ！　精一杯全身全霊全力で名乗り倒すぞ！　紫霧は幸せだ！」

頬を上気させて何度も頷きながら、つけられた自分の新たな名を連呼する紫霧。

呆れ顔でそれを見詰めながら。仕方がなかったとは言え、成り行き上どうしようもなかったとも言え、後々まで未永く絡んできやがりそうな縁を作ってしまった　などと、これからの風来坊生活を憂う蝕であった。

さて、長く二人が会話しながら、山道を歩いてきたところ、ここへ来て分かれ道に差し掛かった。

蝕の方が、足を止める。

「……おう、どうした父上？」

「紫霧よ」

と呼びかけたところで、紫霧の方は胸と額を抑えてくらりつとよるけた。

「はうううっ！」

「お前がどうした!？」

「あ、ああいや、いきなり父上に呼び捨てにされたのが嬉しくてしようがなく興奮の余り嬌声を上げながら熱病のようにふらついてしまったのだ、心配しなくても良いぞ」

「お前の神経が心配だよ」

「何と！　私のことをそんなに気にかけてくれるとは、父上、至上

の至福の極みだぞ！」

「前言撤回、お前のことなんか微塵たりとも心配なんかじゃねえ。言うつか、話が全く進まねえじゃねえか。俺達は牛か亀かかたつむりかなめ蛸かくつてんだよ」

「お、おう、すまぬ父上。続けてくれ」

深呼吸のように長く溜息をついてから、蝕は言い直した。

「紫霧、お前どっちの道に行く？」

「ふむ……紫霧が決めて良いのか？ うーん、だったら右の方を選ぼうかな」

「なら俺は左を行くな」

「む？ 父上は左が良いのか？ それなら初めからそう言ってくれば良いものを……。ならば左で私も構わないぞ。左の道を意気揚々と鼻歌交じりで行進だ！」

「それなら俺は右に行く」

「んん？ おやおや、父上は優柔不断だな！ まったく、優しいのは良いのだが。では、やはり右か……」

「……あいな」

やれやれと首を振って、ぽんぽんと紫霧の頭に手を置いてから。

「俺はお前と一緒に旅をするつもりは無い、って言ってたんだよ。お前とは逆の方の道を、俺は行く。ここでお別れだ。これ以上面倒臭い思いが出来るか。妖怪なんだから、野垂れ死ぬこともそうそう無いだろ。精々元気だな。あと最後にもう一度言っておくが俺は父上じゃな……」

「なあにを言うかー!!」

顎に拳を突き上げるように喰らって、発言が止まった。と言うか、止められた。力づくだった。

「そ、そ、そ、そんなに私が嫌いかつ！ 一人娘を置いて去ってしまっ親などおらんわ！ 生み出しておいて逃げるとは何事か、恥を知れっ！ 紫霧は生まれた瞬間から父上との仲良し珍道中を夢見て楽しみで楽しみで仕方なかったと言うのに、そんな願いも叶えられ

ぬと言うのか！ ええい鬼畜鬼畜！ 悪鬼！ 人でなし！ はっ、人でなしとはアヤカシだから当たり前ではないか！ よもやこんな小癩な罫を仕掛けてくるとは見損なつたぞ父上！ 罰として私を連れて行くが良いぞ！ うあああ！」

涙目と泣声で、わあわあど騒ぎ立てる紫霧。とことん突き詰めてまで、駄々っ子だった。蝕は顎の具合を軽く確かめてから、いい加減本当に心底から何処までも、諦めたような様子を見せた。

「あーあー。あーあーあーあー！ もうわかったよ。了解だ、承つたぜこの妖怪小娘紫霧ちゃんよ！ 連れてってやるから喚き散らすのをやめろ！ 鼓膜が破れて頭が割れちまうよ。それにな……」

「そ、それに……なんだ、父上……？」

「お前は笑顔の方がずつと可愛いぜ、紫霧」

「はうああっ！」

顔を真っ赤にして、ふらふらつと倒れかける紫霧であった。

なんとも忙しい娘 いや、アヤカシであろうか。

「……ひひ、なんかもう一周して面白い玩具って感じなんだが……」

あー、ま。良いから目を瞑れ、紫霧」

「むむっ？ 何をする気だ？」

「頬に口付けしてやる。可愛い娘に優しい父上からご褒美だ。愛情の贈り物だ」

「むあっ！ な、な、な、なぬっ？ そ、それは……う、嬉しいぞ」

あたふたとしながら、素直に目を瞑る紫霧。

どきどきとしながら。

わくわくとしながら。

とき、めき、ながら。

「こ、こうか、父上？」

「ああ、そうそう。そうだ。ちょっとそうしてな」

頬を赤くしながら、目を瞑り木々に囲まれた山道の途中で突っ立つたまま待つ、紫霧。

待つ。

「ふ、ふふふ。何処に逃げても無駄だぞ！ 私には父上の居場所
が手に取るように分かるのだからな！ もはや釈迦の手に捕らわれ
た孫悟空も同然だ！ その証拠に私の指にはしっかりと孫悟空と書い
てあるのだぞ！ …… って、落書きっ？ い、いやいや」

勝手にまた一人で仰け反りつつ、意識を集中　する素振りを見
せる紫霧。

「むう、こつちだな！ 待つのだ父上ー！」

紫霧はそう叫びながら、林の中を何処かへと疾走して行く。障害
となるような木々は、片っ端から切り裂きながら、暴走して行く。
まるで豆腐か何かのように少しの抵抗もなく、木の幹を切り倒して
しまふ鋭い刃。宵丸の刀の腕に、『夜岬』の刃が加わったかのよう
だ。

彼女が去った後の通り道は、まるで森林伐採に会ったとしか思え
ぬほどだった。

そして。しばし後。

時間で言うのなら、一刻の半分にも満たぬほど後。

その場に、蝕は現れた。

「……猪突猛進って言うか……鬼薙爆進って有様だな……。未恐ろ
しいぜ、全く……」

溜息をつきながら、軒並み切り倒されている木々を見やる蝕。

彼は紫霧が目を瞑っている間に、自分を喰らい、姿を隠したのだ
った。日蝕の如く月蝕のように、闇が一時日と月を蝕み喰らい隠す
ように、自分自身を隠す。蝕という妖怪の、逃避の最終手段であっ
た。

「ひひ、しかしまあ、ここの山肌はちょっと涼しげになっちまった
が……何処も彼処もあっちもこっちも丸く収まったみたいで、良い
感じじゃねえか。めでたしめでたしであるう　ってか。はん……、
何にせよ一区切り、これにて一件落着、終わりの終わり……だあな
どうせどんなに嫌がったところで、互いに寿命を定め忘れたアヤカ
シ様だ　また会おうこともあるだろうぜ。ひひ。そんなとき気が向

いたらまた、可愛がってやるよ　紫霧「

思うことは色々あれど、あらかた思い尽した。

俺には怠惰なのが一番似合うんだろうよ、と。

軽佻浮薄にのらりくらりとそう言っ

て。紫霧が向かったであろう　木々が薙ぎ倒され続けている　方

向とは逆に、蝕は歩いていく。

地を踏み、天を見やる。

空は薄らと朱に染まり行くところだった。

宿のあても行くあてすらも持ち合わせてはいないが……何、焦ることなど無い。そちらの世界のほうが、自分達には相応しいのだから。次の『存在意義』のはいつになるのやら……それも、その時になれば分かること。終われども終われども、終わらない　終われない。だから持続して行く世界において、最も曖昧で最も明確な区切り。

一刀両断。

また、夜が来る。

(終、了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9841j/>

夜見先。

2010年10月8日15時23分発行